

目次

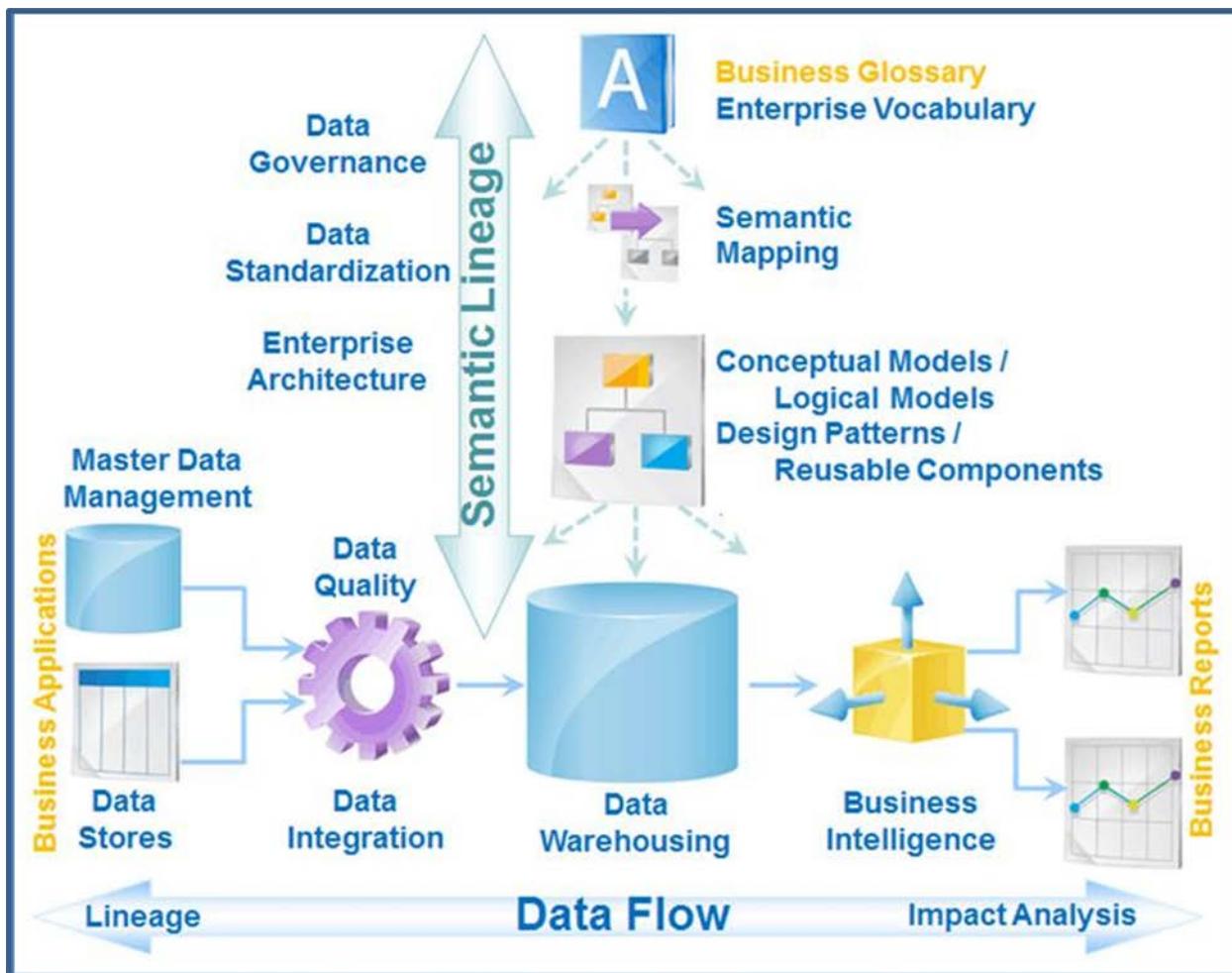
メタデータ・マネージャ概要	3
ユーザー・インターフェース	10
ユーザー・インターフェースの一般的概念	10
ユーザー・インターフェース・コンポーネント	13
ユーザー・プリファレンス	28
特別な UI 機能	29
メタデータの調査	30
モデルの参照	30
任意のメタデータ・オブジェクトの検索	31
コラボレーション用のブックマークと URL の作成	33
検索およびレビュー用のラベル配置	34
フィードバック/コメントの送信とレビュー	35
モデルのダイアグラムの視覚化	37
モデルを外部メタデータ形式にエクスポート	38
リポジトリ・オブジェクトのデータ・フローとセマンティック系統のトレースと分析	39
添付ドキュメントの表示	43
ページ内容の印刷	43
データ・プレビュー	43
メタデータの収集/インポート	45
モデルの一般原則の収集	45
コンテンツへのファイルの添付	50
コンテンツの公開	50
自動収集のスケジューリング(スケジューリングされたモデルの Oracle Metadata Management (OMM) 同期)	50
メタデータのバージョンと構成の管理	52
モデル・バージョンの管理	52
構成の管理	53
Oracle Metadata Management (OMM)への外部メタデータの公開	58
ビジネス用語集によるデータ・ガバナンス	59
ビジネス用語集の表示と編集	63

用語の検索	64
用語管理ダッシュボードの表示	64
セマンティック使用状況のトレース	65
用語の追加	65
用語の編集	66
ワークフロー・ロールの割当て	66
スチュワードの割当て	69
用語のステータスの設定	69
用語のステータスをリスト	69
スチュワード割当て別に用語をリスト	70
バルク編集	70
複数編集	70
用語を他のモデルのオブジェクトにマッピング(分類)	70
ビジネス用語集で定義された属性の拡張	71
ビジネス用語集の作成	71
ビジネス用語集のワークフロー・プロセスの指定	71
モデルからのビジネス用語集の移入(ポートストラップ)	72
CSV ファイルへのビジネス用語集のエクスポート	72
CSV ファイルからのビジネス用語集のインポート	72
ログの生成と監査	73
データ・フロー系統および影響分析のためのデータ・マッピング仕様	73
データ・マッピング仕様の作成	74
データ・マッピング仕様の編集	74
構成へのデータ・マッピング仕様の追加	76
データ・マッピング仕様の作業のスコープとステータス	76
セマンティック系統と定義のセマンティック・マッピング	77
セマンティック・マッピングの作成:	78
セマンティック・マッピングの編集	78
構成へのセマンティック・マッピングの追加	79
マッピング・エディタの一般的な機能	79
マッピングに関するレポート	79

構成へのマッピングの追加	80
Excel へのマッピングのエクスポート	80
Excel からのマッピングのインポート	80
ビジネス用語集からのセマンティック・マッピングの場合の特別な機能	81
管理	82
ユーザー・グループの管理	82
ユーザー認証ログイン・モード	85
ユーザー・グループの割当て	88
同時ユーザーの管理	91
ユーザー統計とサーバー監査ログ	92
システム・ログのレビュー	92
スケジュール済タスクの管理	92
ユーザ一定義属性の管理	93
ライセンスの管理	94
データベースの管理	94
DB の構成	95
システムのバックアップ	95
インストール	95
HostInfo ファイルとライセンス	95
トラブルシューティング	96
一般的なトラブルシューティング手順	96
レポートの問題	97

メタデータ・マネージャ概要

多くの大企業では、洗練された正確なメタデータ管理の必要性が大きな悩みの種となっています。CASEツール、ETLエンジン、ウェアハウス、BI、EAI環境のほとんどすべてのコンポーネントに最新の情報テクノロジが組み込まれていますが、それらはメタデータ・リポジトリと同様にメタデータを含んでおり、メタデータから処理を導出することも珍しくありません。これらの環境のメタデータは分散、重複しており、アクティブであることも多く、通常、基礎をなす表示テクノロジに応じて、様々な方法論で表されます。



Oracle Metadata Management (OMM)は、メタデータ管理の多くの側面で、次に示すように、非常に広範囲の機能を提供します。

- データ・ガバナンス
- メタデータの注釈とラベリング
- メタデータの比較、統合およびマッピング
- バージョンと構成の管理
- データ・ライフサイクルに関連するメタデータの管理
- 系統および影響分析
- 企業アーキテクチャの開発、管理およびデプロイメント。

Oracle Metadata Management (OMM)の中心には、モデルやマッピングなどのリポジトリ・オブジェクトが含まれたリポジトリがあり、フォルダ構造になっています。モデルは、データベース、データ・モデリング(DM)、データ・ウェアハウス(DW)、データ統合(DI)および Business Intelligence (BI)ツールのための、任意の外部メタデータ・モデルまたは外部メタデータ・リポジトリから収集できます。構成と呼ばれる特定のタイプのリポジトリ・オブジェクトは、モ

ルとマッピングを1つに接続して(メタデータ・スティッチング)、データ・フロー系統および影響分析の完全サポート、セマンティック系統定義など、分析対象となるエンタープライズ・アーキテクチャ(EA)を表します。

免責事項

Oracle Metadata Management (OMM)ソリューションには、Oracle Metadata Management for Oracle Business Intelligence と、Oracle Enterprise Metadata Management の2つの製品が含まれます。これらの製品の各々は、次に示す完全な Metadata Management (MM)ソリューションのサブセットです。このため、このヘルプ・ドキュメントの一部の項は、Oracle Metadata Management (OMM)ソリューションに適用されないことがあります。

モデルのインポート(またはアップロード)

Web上でモデルを表示する場合、まずリポジトリにモデルを追加する必要があります。リポジトリ内に外部メタデータ・モデルを配置するには次の3つの基本的な方法があります。

- 1つ以上のモデルを外部メタデータから直接インポートできます。
- モデルを定義することによってモデルをインポートできます(Oracle Metadata Management (OMM)のメタデータ・マネージャ UI を使用して外部メタデータ・モデルの場所を特定します)。
- 単に外部メタデータ・ツールで開き、Oracle Metadata Management (OMM)にエクスポートすることによって、モデルをアップロードできます(外部メタデータ・ツールのユーザー・インターフェースでサポートされている場合)。

それぞれの場合、モデルが作成されるので、構成に配置して、Web上で公開および参照または分析できるようにできます。

スケジュールされた Oracle Metadata Management (OMM) モデル同期

Oracle Metadata Management (OMM)を構成して、モデルまたはマートの更新と同期するようにできます。これにより、ファイル・システム上またはマート内のモデルへの更新が定期的に Oracle Metadata Management (OMM)に反映されるようになります。

構成

モデルをリポジトリにインポートまたはアップロードした後、結果として生じたモデルを構成内に配置する必要がある場合があります。構成はモデルの階層的なコレクションで、次の特徴があります。

- Oracle Metadata Management (OMM)でモデルを相互接続(スティッチング)して、エンドツーエンド系統および影響分析を可能にする
- 公開したり、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーが利用できるようにする
- リポジトリ全体における参照、検索および分析のスコープを提供する

構成のステイッキング

有効な構成は、モデル・バージョン、マッピング・バージョン、用語集およびステイッキングのコレクションです。モデル・バージョンは、Oracle Metadata Management (OMM)に収集されたデータ・ストアおよびデータ・プロセスに関連しています。リポジトリ・オブジェクトは、それぞれにおける接続定義がどのように相互に関連しているかを指定することにより、ステイッキングされます。検証されると、エンドツーエンド系統および影響分析、定義参照やセマンティック使用状況レポートが、構成全体で可能になります。さらに、ステイッキングはリポジトリ・オブジェクトのバージョンが変更されると、自動的に順行移行されます。

構成の公開

構成を使用することにより、リポジトリの管理者は極度に複雑なリポジトリ内であっても、ビジネス・ユーザーに表示される内容や、すべてのユーザーの検索および分析方法について完全性と正確性を確保できます。

最後に、構成は新しいリポジトリ・オブジェクト・バージョンの自動更新(公開)のために定義できます。これにより、モデルの新しいバージョンが外部メタデータ・ツールを使用して収集される(たとえばスケジュールに基づいて)、またはアップロードされるたびに、モデルのその新しいバージョンが、公開済の構成のメンバーとして反映されます。

構成の検索

ユーザーは、システムで定義される任意の構成全体を通じて最も詳細なレベル(属性のデータ型など)で、Webベースでメタデータを検索できます。

構成の管理

Oracle Metadata Management (OMM)を使用して管理者は次の操作を行うことができます。

- 構成の数を定義
- 様々なユーザーの集合(グループによる)に対して構成を公開
- 構成を非公開化、一部公開またはすべて公開

これにより、リポジトリの管理者は誰に対してどのようなときに何が表示されるかを、際限なく微調整できます。

モデル・バージョン

場合によっては、リポジトリを使用して、モデルの毎回の収集またはアップロードに関するバージョン履歴を維持する必要があります。これらのバージョンはリポジトリ内では個別のオブジェクトであり、特定の時点のリポジトリ・オブジェクトのコンテンツを表します。

管理者は、任意の数のバージョンを管理できます。ただしデフォルトでは、メタデータ・マネージャ UI には1つのバージョンのモデルのみが表示されます。技術知識のあるユーザーは、いつでも複数バージョン・ユーザー・インターフェース・モードに変更できます。さらに、特定のバージョンをデフォルトのバージョンに指定することもできます。それが、メタデータ・マ

ネージャ UI が単一バージョン・モードになっている場合に使用されるモデルのデフォルト・バージョンです。

また、構成にモデルを含める場合、実際にはそのモデルの特定のバージョンを構成に含めていくことになります。これは、どのモデルのどのバージョンを公開するかについていつでも制御できることを意味します。たとえば、データ・モデルの作成者は編集を継続し、新しいバージョンを作業中(未公開)としてアップロードし続けている間も、モデルの承認済バージョンを公開済の構成に配置することができます。

メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーは单一の構成に制限されるため、すべての場合においてメタデータ・エクスプローラ UI には 1 つのバージョンのモデルのみが表示されます。

構成バージョン

場合によっては、構成のバージョン履歴を維持する必要があります。たとえば、履歴分析を行うためにバージョンの構成の履歴を保持する場合です。また、最新ではあるが未承認のバージョンのリポジトリ・オブジェクトを、新しい(しかし未公開の)バージョンの構成に配置することによって *What-If* 分析を実行する場合もあります。

モデルと同様に、これらの構成のバージョンは、リポジトリ内では個別のオブジェクトであり、特定の時点のコンテンツの構成を表します。

管理者は、任意の数の構成バージョンを管理できます。ただしデフォルトでは、メタデータ・マネージャ UI には 1 つのバージョンの構成のみが表示されます。メタデータ・マネージャ UI は、いつでも複数バージョンのユーザー・インターフェース・モードに変更できます。

さらに、ある構成のバージョンを公開済ステータスに設定すると、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーはそれを利用できるようになります。つまり、実際にはその構成の特定のバージョンを公開済バージョンとして指定することになります。これは、複数のコンテンツ・バージョンの正確なコレクションを公開できることを意味します。

いずれの場合も、メタデータ・エクスプローラ UI には公開済バージョンの構成のみが表示され、それが単に構成として表示されます。

ユーザー、グループおよび権限

基本的に、Oracle Metadata Management (OMM) にはユーザーと権限が存在します。ユーザーは、与えられている権限の結合から権限を導出します。多数のユーザーと多数の権限が存在する大規模なシステムでは、多数のユーザー・グループにセキュリティ、ワークフロー・ロールおよびセキュリティ・ポリシーを割り当てる機能なしでは、各権限を各ユーザーに付与することは管理不可能です。ユーザーを論理的にグループ化し、セキュリティおよびワークフロー・ロールによって複数の権限を表すことができます。ロールおよびグループは複雑性を減少させ、管理を容易にします。

ユーザー・フィードバック、コラボレーションおよびレビュー

Oracle Metadata Management (OMM)のモデルが、適切な権限を持つユーザーによるレビューまたは承認(あるいはその両方)が可能な環境を提供します。これらのツールを使用して、表や列などの各オブジェクトにコメント(メモ)およびラベルを追加できます。コメントは、Oracle Metadata Management (OMM)の外にある外部メタデータ(外部メタデータ・ツールのユーザー・インターフェースでサポートされている場合)と同期させることもできます。

データ・フロー系統および影響分析のためのデータ・マッピング仕様

データ・フロー・プロセスの中には収集不可能なものがありますが、これらのプロセスが Oracle Metadata Management (OMM)でモデル化されていない場合、系統および影響分析の答えにギャップが発生し、システムの物理的アーキテクチャの完全な全体像が得られなくなります。これらのギャップに対処し、正しい系統および影響分析が得られるようするため、Oracle Metadata Management (OMM)にはいくつかのソース・モデルからのデータがターゲット・モデルの要素内に「流れる」仕組みについて高度な論理的(または観念的)定義を作成するデータ・マッピング仕様の編集と管理のためのツールセットが備わっています。これらのマッピングは単純な Web ベースのドラッグ・アンド・ドロップ形式のマッピング仕様エディタを使用して指定され、説明テキストを使用して定義されており、演算エディタを使用して擬似演算を定義することもできます。

ビジネス用語集

完全なデータ・アーキテクチャの開発および管理にはビジネス用語集が重要です。Oracle Metadata Management (OMM)には ISO 11179 ベースのビジネス用語集が備わっており、用語、データ定義、コード・セット、ドメイン、検証ルールといった、企業のビジネス用語集の取得、定義、維持および実装を行うことができます。さらに、セマンティック・マッピングでは、ソース・モデル(ビジネス用語集のように概念的)内の要素によって、どのようにターゲット・モデル(実装または表現に近い)内の要素が定義されるかについて記述されます。

ビジネス用語集は、ビジネス資産(たとえば用語)について、またそれらがどのようにデータ資産(たとえばデータベース表)や技術資産(たとえば ETL マッピング)と関連するかについて、すべてのステークホルダーの間で合意に達するのに役立ちます。ビジネス用語集は、IT 部署間で共同で論理的または物理的数据・エンティティおよび属性についてドキュメント化するのに使用できます。この場合でも、ビジネス資産と技術資産間の依存性のトレースが含まれます。

セマンティック・マッピング

セマンティック・マッピングは、ソース・モデル内(より概念的)の要素によって、ターゲット・モデル内(より実装または表現に近い)の要素がどのように定義されるかについて記述したものです。言い換えると、ターゲット・モデル内の要素は、関連付けられているソース・モデル内の要素の表現または実装です。

主な用途には次の 3つがあります。

- データの同期とコンプライアンス

メタデータ・マネージャのヘルプ[®]

- 概念的なものから論理的、いくつかのサブ・ケースを持つ物理的データ・モデルまで、セマンティックな関係の複数レベル・モデリング
- ビジネス用語集の用語分類

ユーザー・インターフェース

ユーザー・インターフェースの一般的概念

アクション・アイコンの配置

ユーザー・インターフェースのレイアウトに関しては、整合性とナビゲーションしやすさを可能にするため、いくつかの基本的なルールがあります。特に、アクション・アイコン(たとえば、 「Search」)は、次の2つのカテゴリに整理されています。

- パネル全体に関連するアクション(たとえば、モデルまたは構成)
 - パネル内で選択した要素(たとえば、モデルの表または列)に適用するアクション
- UIにはそれに応じて配置されています。
- 全体的なパネル・アイコンは、パネルのヘッダーの右側に配置
 - 選択した要素のアイコンは、パネル(ヘッダーの下)のツールバーで左側に配置

ワークスペースの分割

2つのワークスペース・パネルを重ねて同時に表示しながら作業することが可能です。ただブラウザ・ウィンドウの下部にドッキングするワークスペースのタブを右クリックして、選択します。

標準的なグラフィカル・ナビゲーション・ツールバー

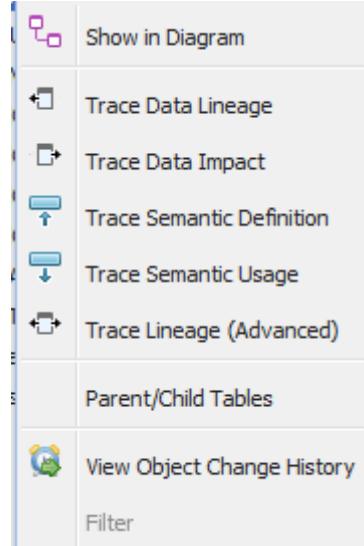
系統概要、系統トレースおよびモデル・ダイアグラムは、非常にグラフィカルな結果であり、そのため、これらのグラフィカル・プレゼンテーション内での移動には、Oracle Metadata Management (OMM)全体で一貫して標準的なグラフィカル・ナビゲーション・バーが使用されます([「ダイアグラム視覚化またはグラフィカル系統のUI」](#)を参照)。

特に、次の操作が可能です。

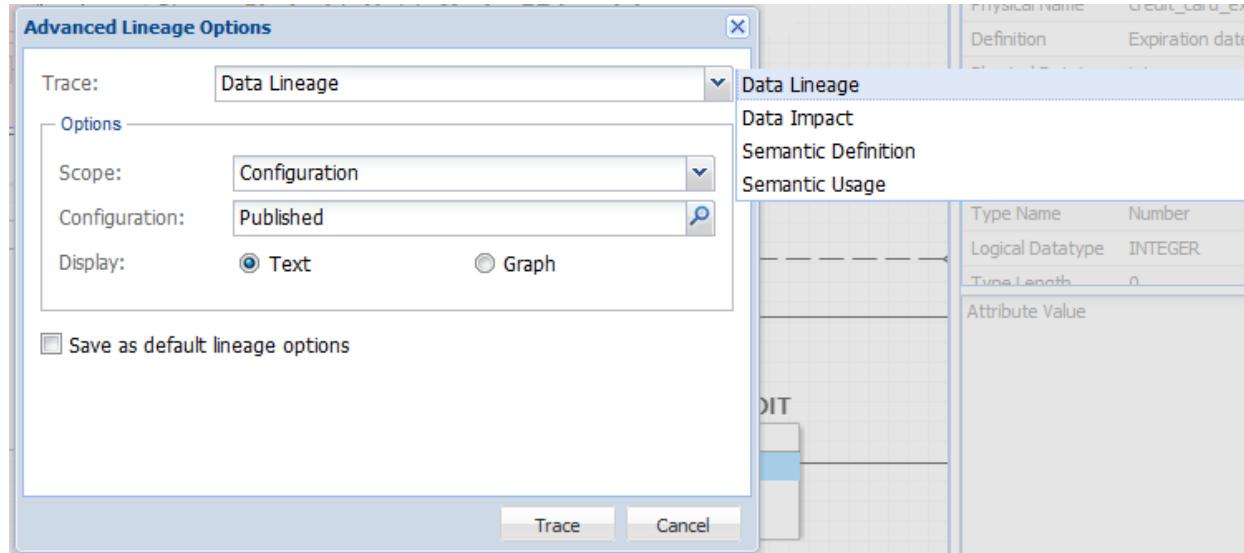
- 「Overview」で場所をクリックすると、リポジトリ・オブジェクトのその部分に素早く移動できます。
- 「Overview」でマウスをドラッグして、ダイアグラムをパンできます。
- 「Overview」のトグルを使用して、概要を表示または非表示にします。
- 「Overview」パネルの右下隅をドラッグして、概要の大きさを変更できます。
- 拡大・縮小するには、拡大および( 74% )コントロールを使用します。

- 「Fit Contents」(Fit)アイコンをクリックすると、最大限に縮小されます。
- ダイアグラム内の任意の場所で、カーソルをドラッグすると、画面外の部分が現在のグラフィカル・コンテキストに表示されます。

標準オブジェクト・ポップアップ・メニュー

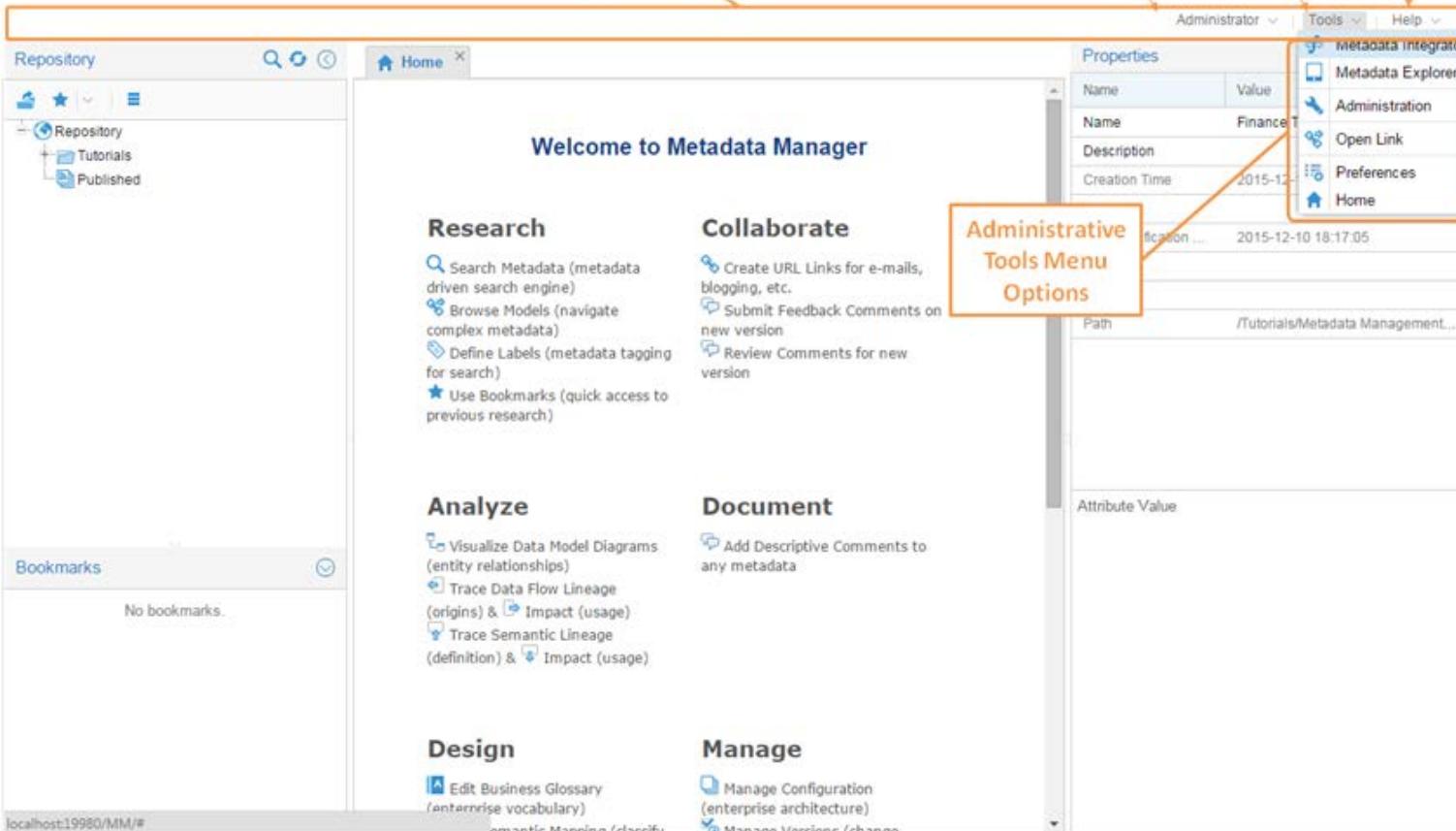


オブジェクト系統トレーシング・アクション



ユーザー・インターフェース・コンポーネント

グローバル・メニューを持つヘッダー

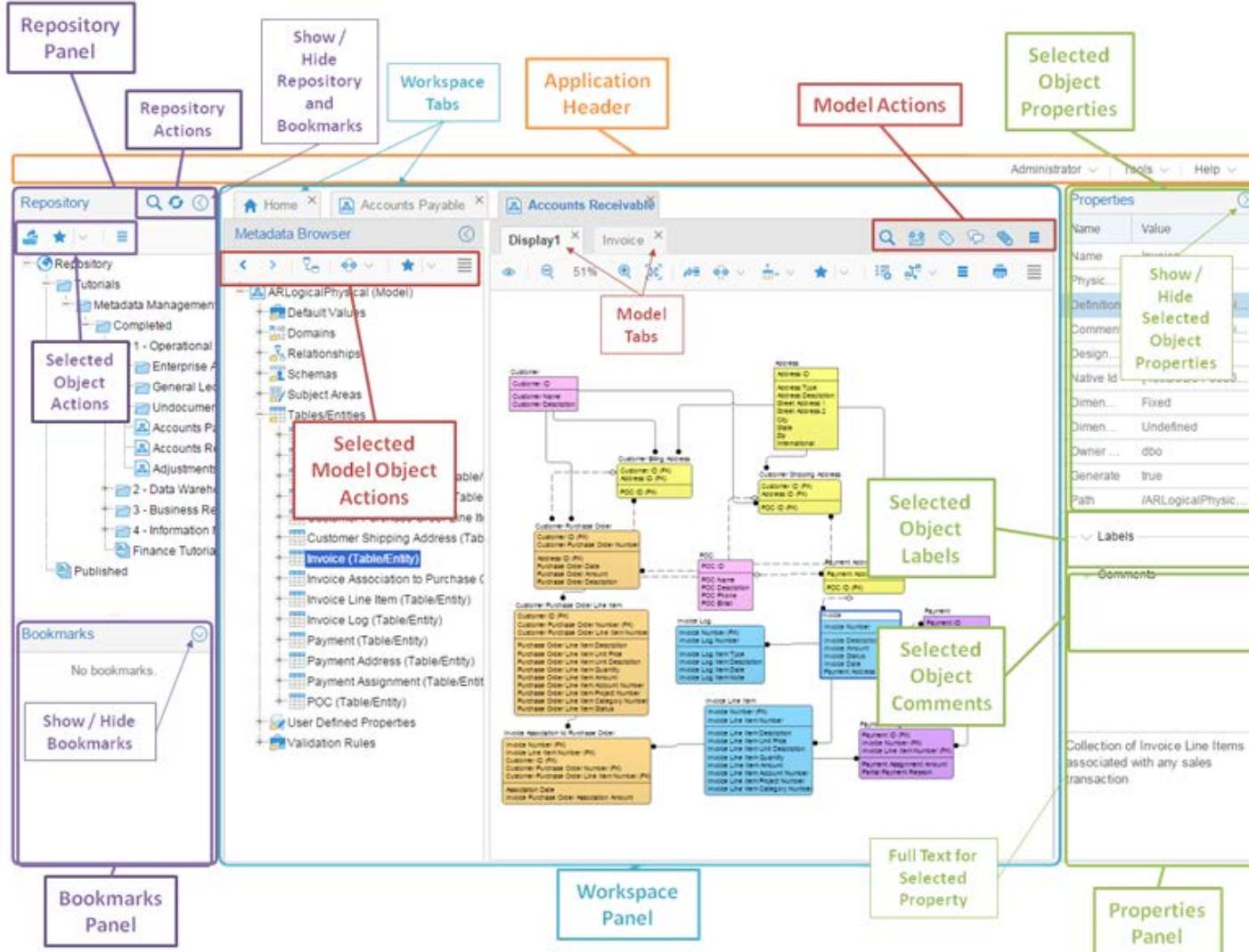


The screenshot shows the Oracle Fusion Middleware Metadata Management application interface. At the top, there is a global header menu with several options:

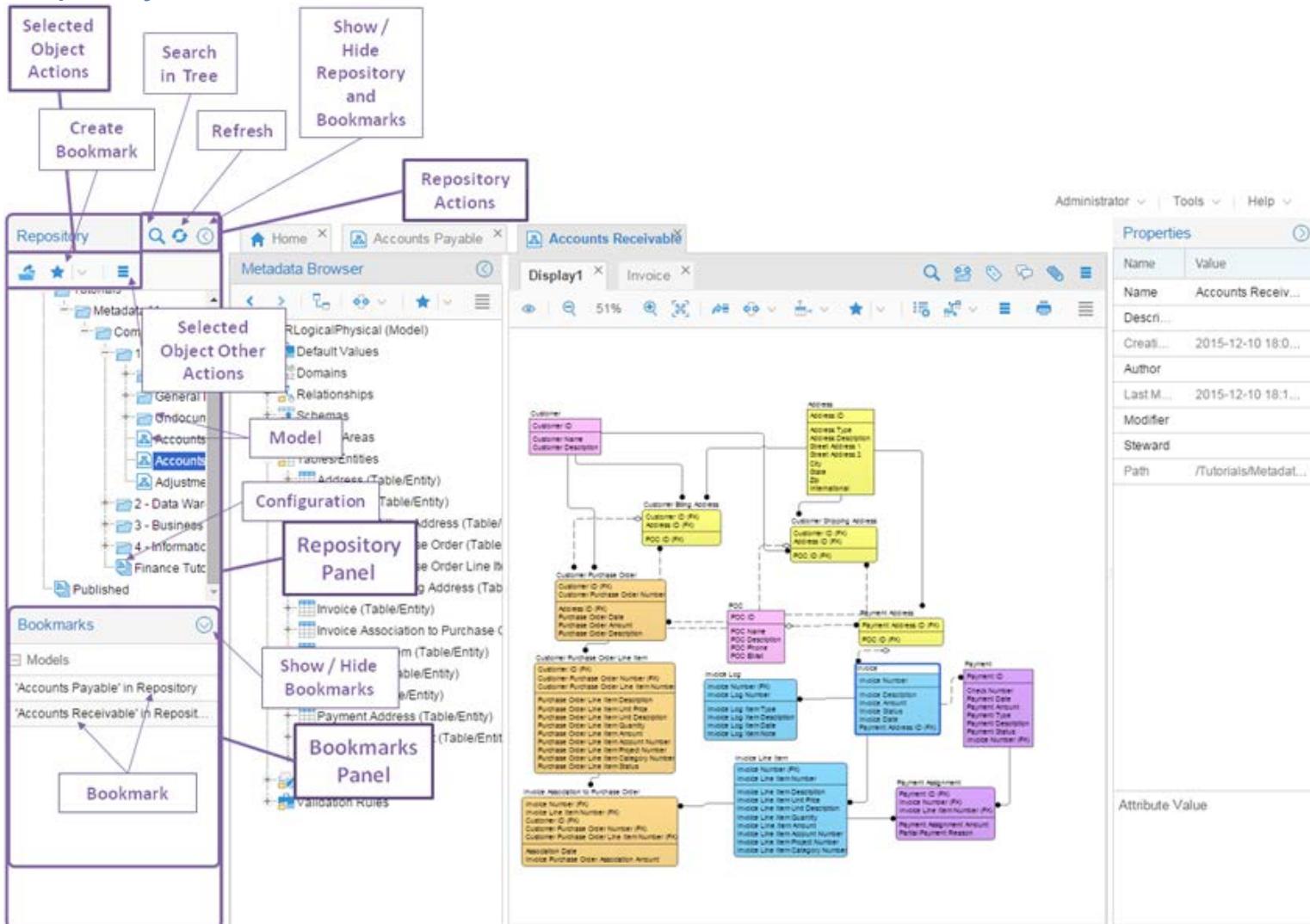
- Application Header** (highlighted with an orange box)
- Log In / Log Out**
- Administrative Tools**
- Help / About**
- Administrator** (dropdown menu)
- Tools** (dropdown menu) - This menu is expanded, showing the following options:
 - Metadata Integrator
 - Metadata Explorer
 - Administration
 - Open Link
 - Preferences
 - Home
- Help** (dropdown menu)

The main content area displays the "Welcome to Metadata Manager" page. It includes sections for Research, Collaborate, Analyze, Document, Design, and Manage. On the left, there is a sidebar with a Repository tree and a Bookmarks section.

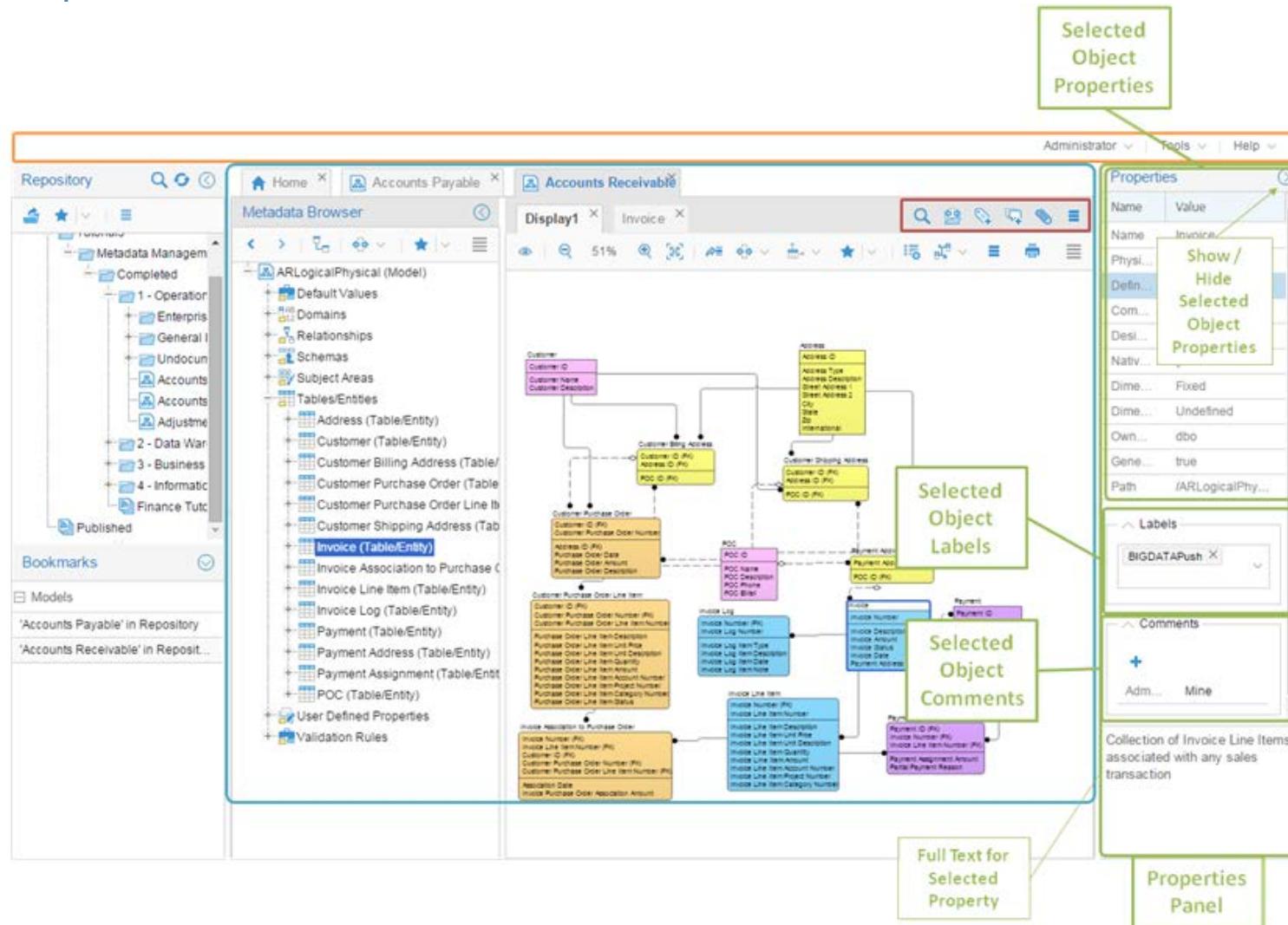
一般的なユーザー・インターフェース・コンポーネントのレイアウト



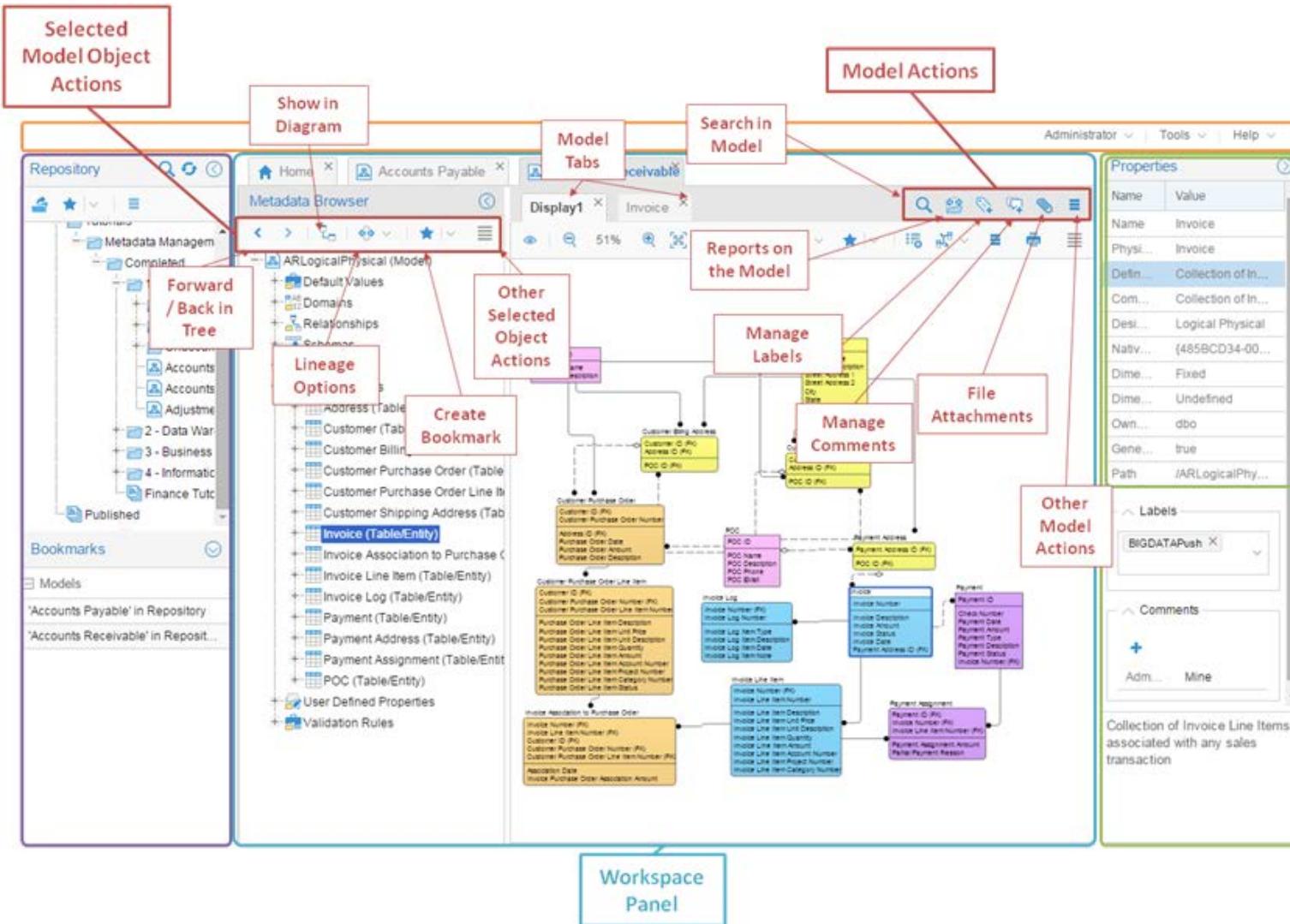
「Repository」パネルのユーザー・インターフェース・コンポーネント



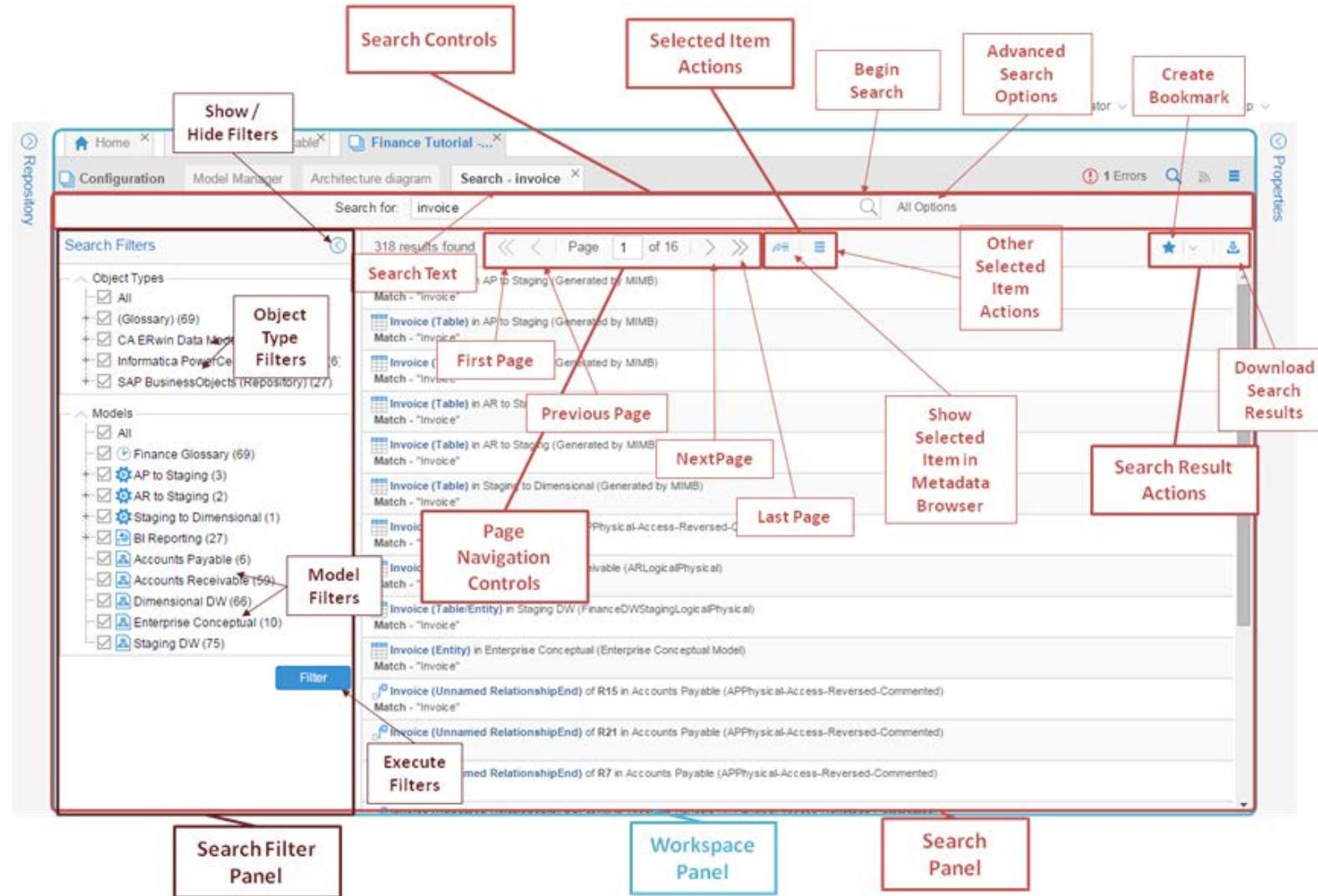
「Properties」パネルのユーザー・インターフェース・コンポーネント



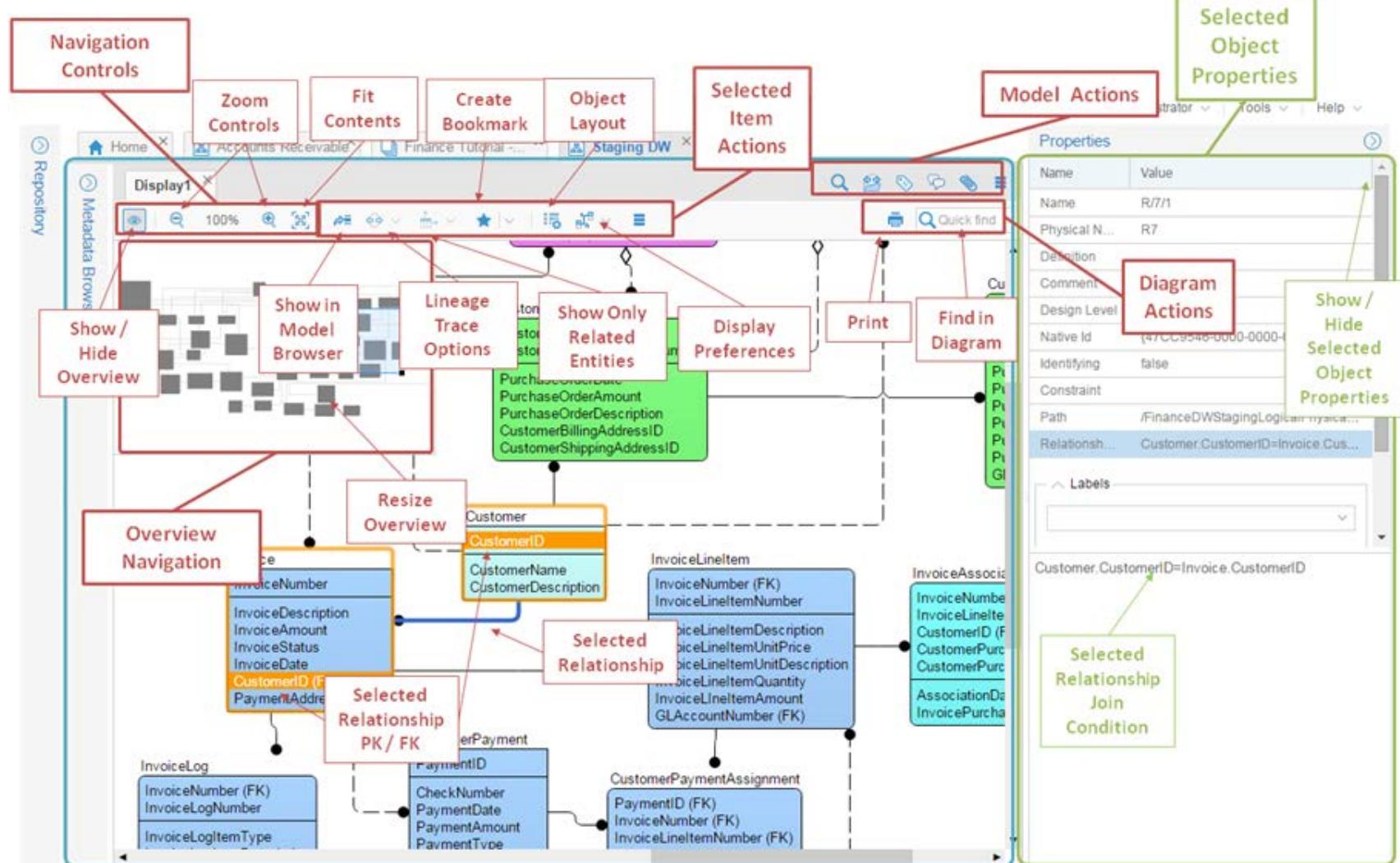
ワークスペースとコンテンツのユーザー・インターフェース・コンポーネント



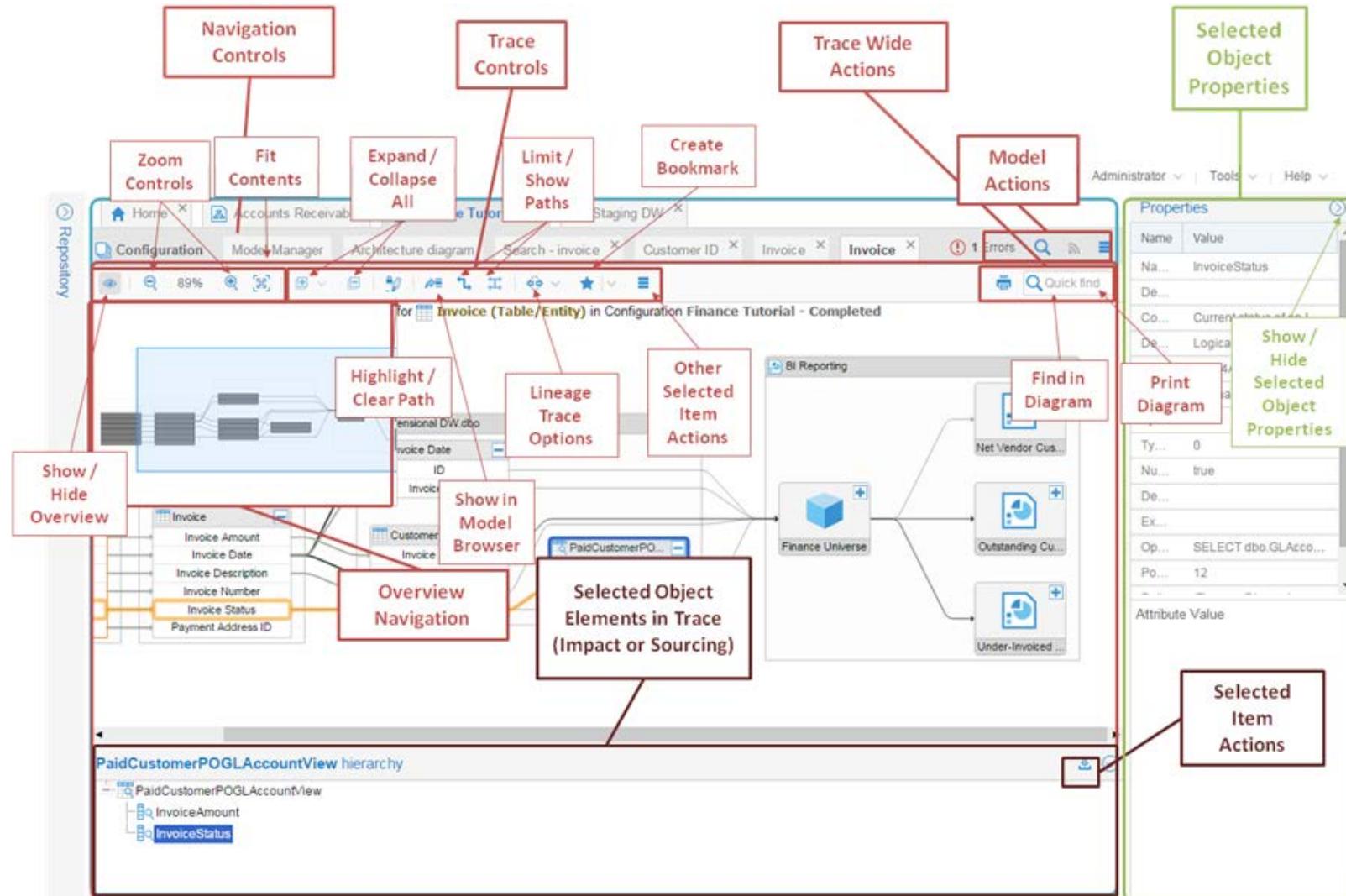
検索のユーザー・インターフェース・コンポーネント



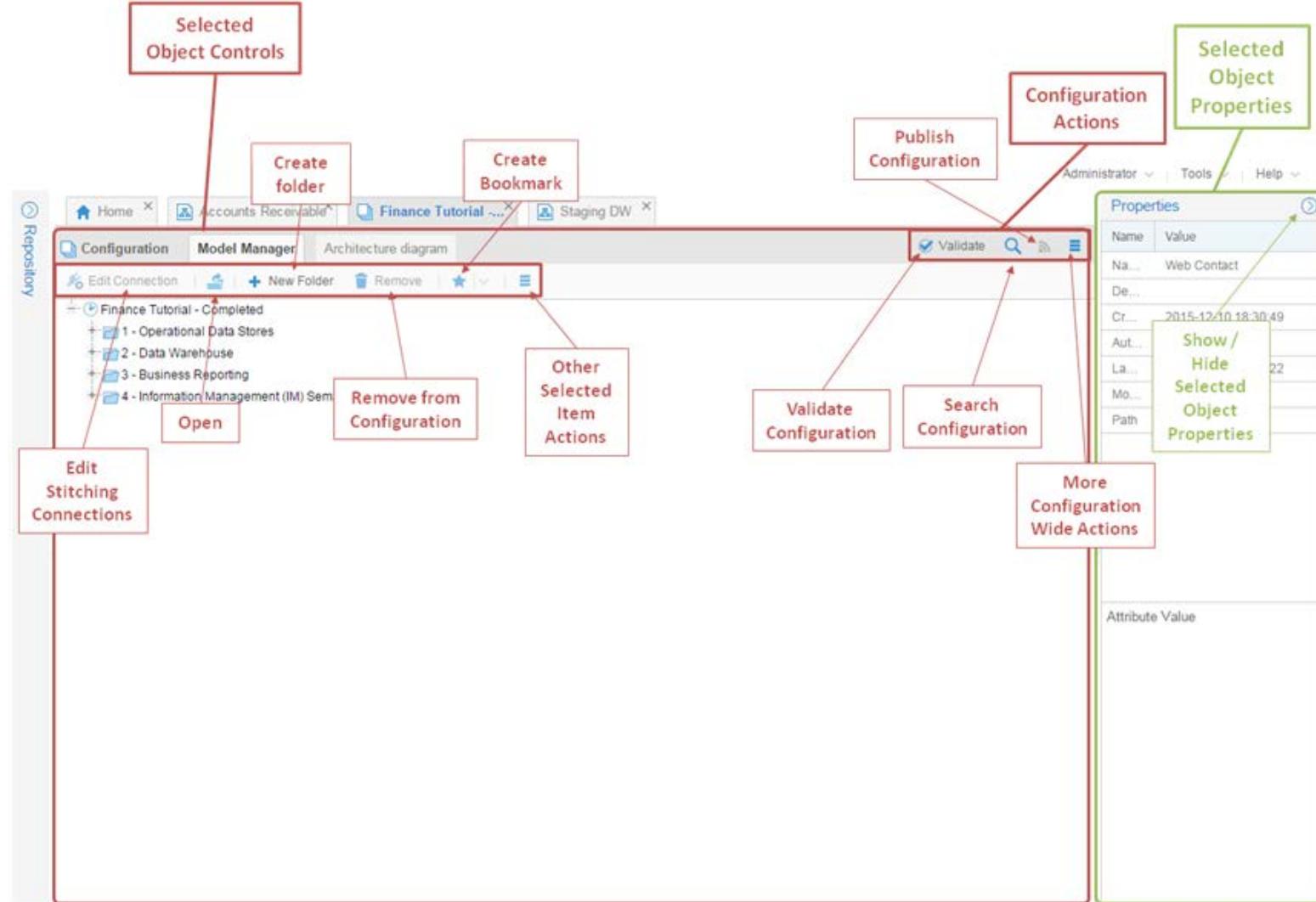
ダイアグラム視覚化のユーザー・インターフェース・コンポーネント



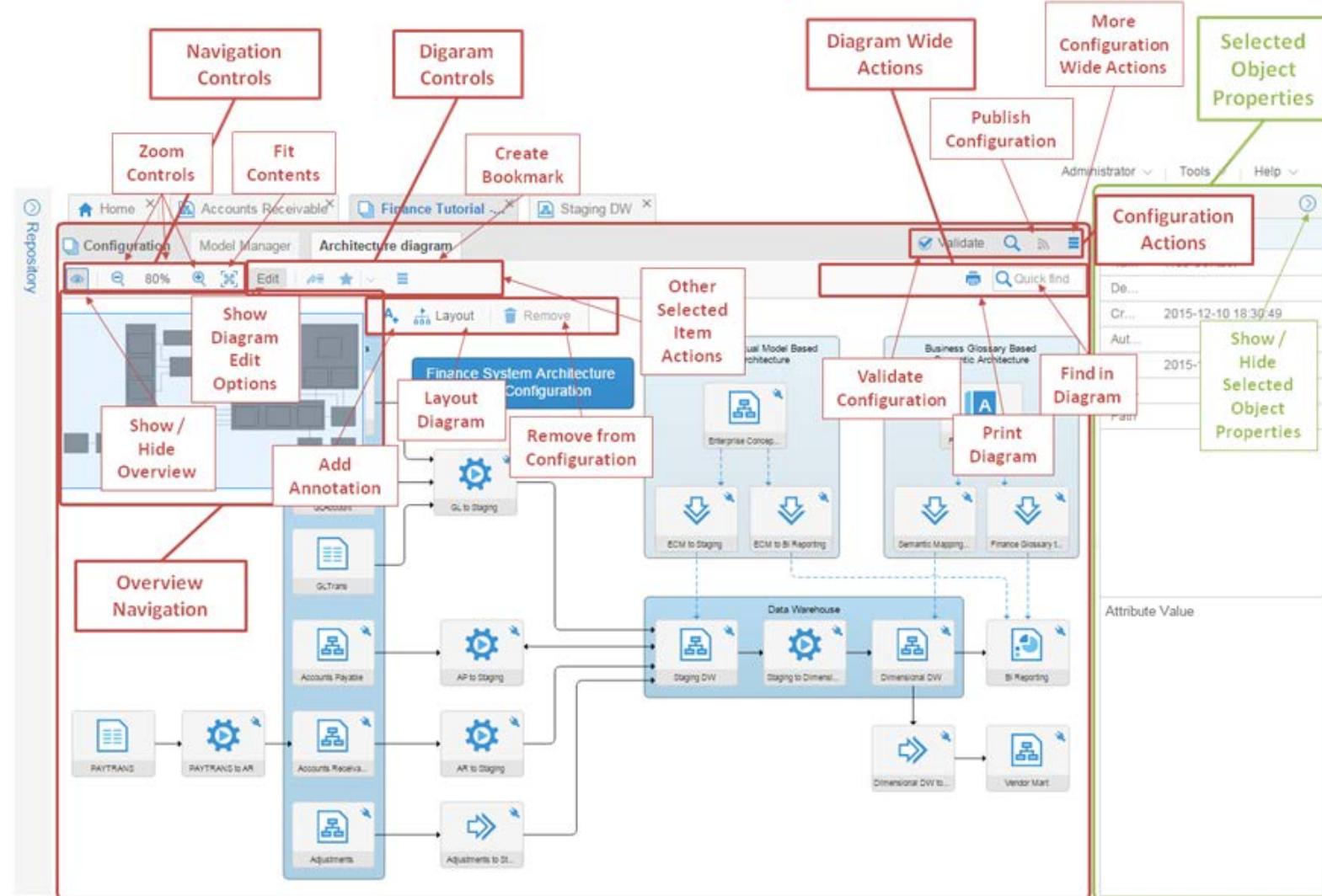
系統トレースのユーザー・インターフェース・コンポーネント



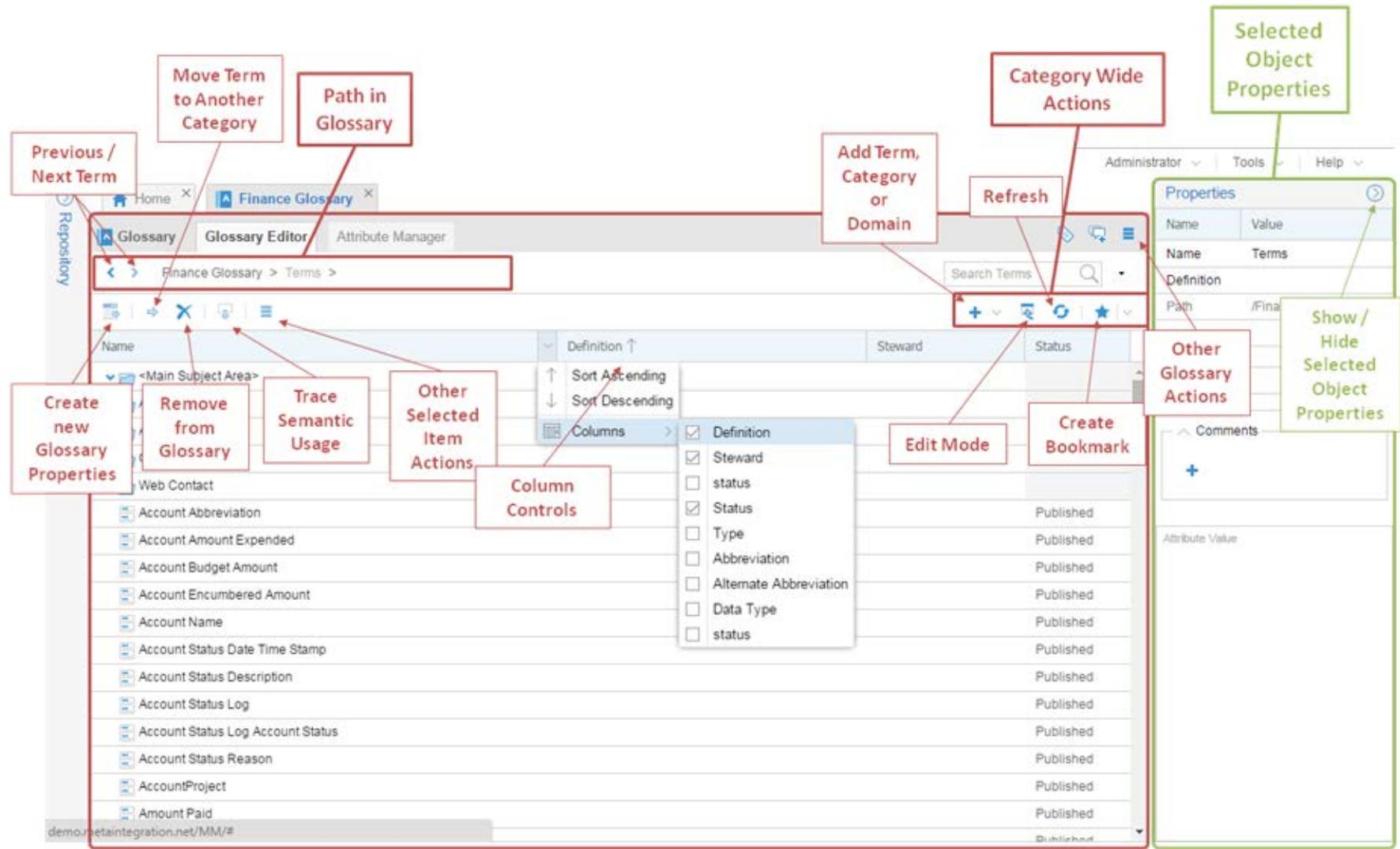
構成モデル・マネージャのユーザー・インターフェース・コンポーネント



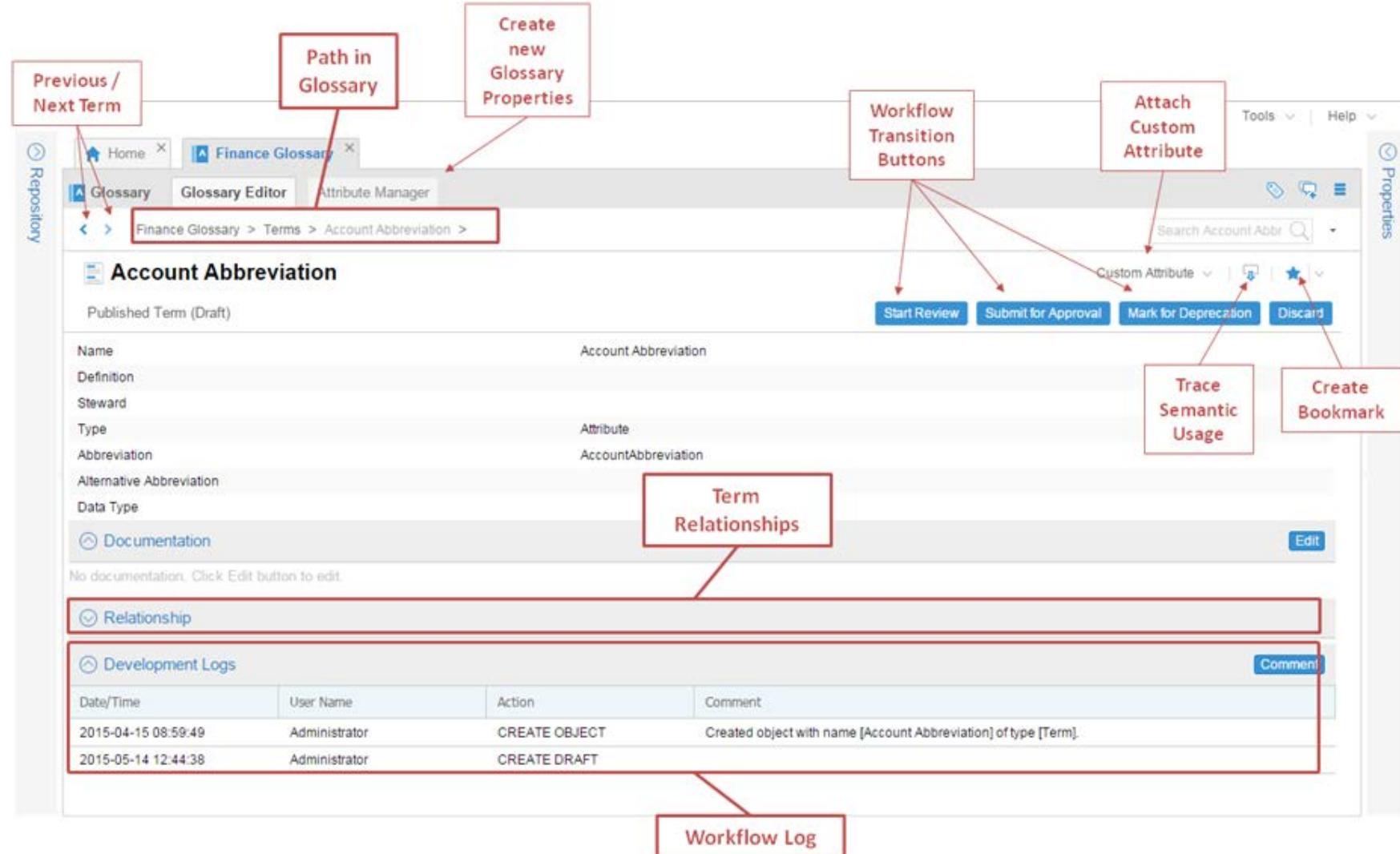
構成アーキテクチャ・ダイアグラムのユーザー・インターフェース・コンポーネント



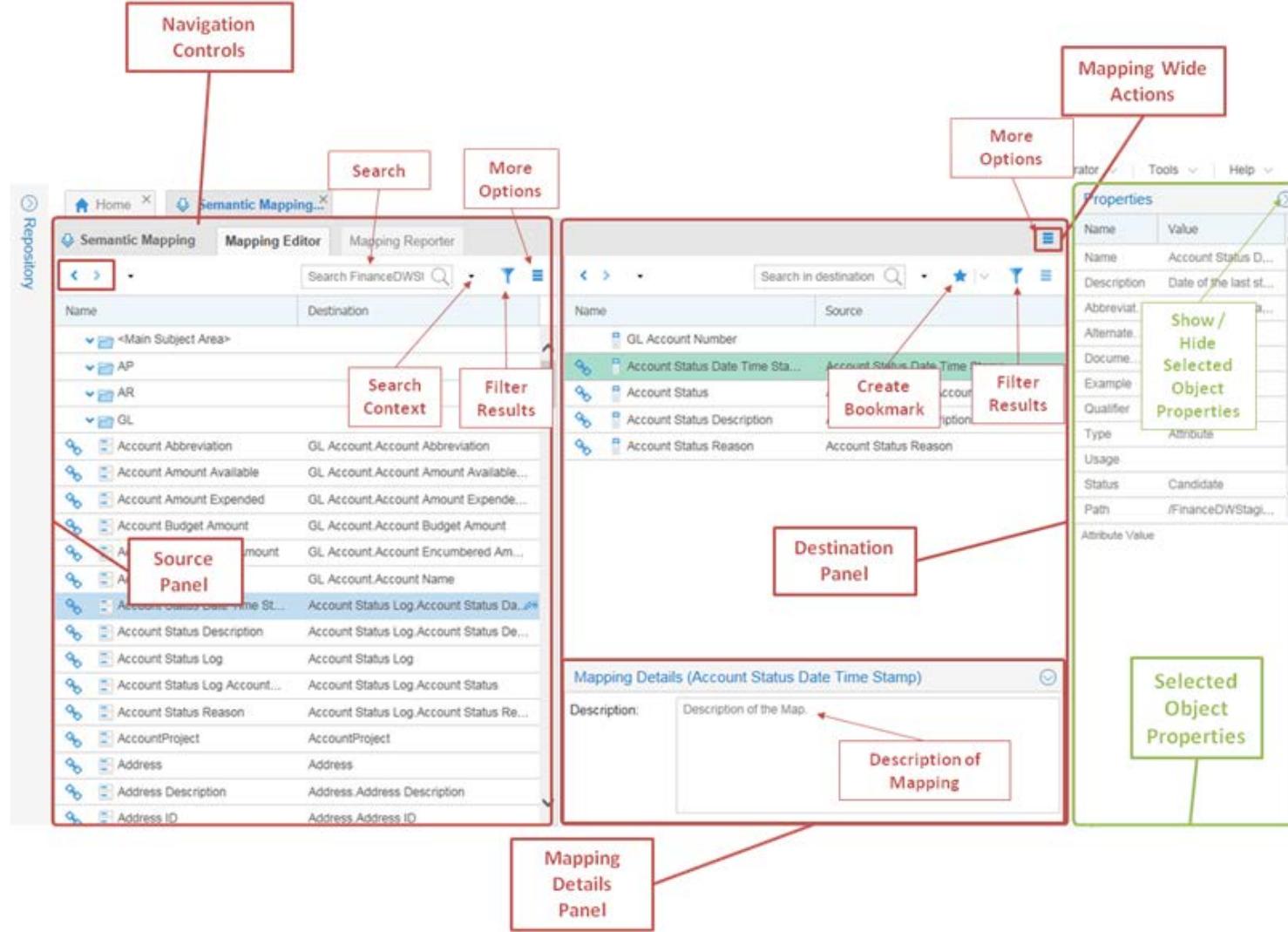
ビジネス用語集のカタログと用語のユーザー・インターフェース・コンポーネント



ビジネス用語集の用語のユーザー・インターフェース・コンポーネント



セマンティック・マッピングのマッピング・エディタのユーザー・インターフェース・コンポーネント



Mapping Reporterのユーザー・インターフェース・コンポーネント

Report Header

Links to Source and Destination

Report Panel

More Options

Create Bookmark

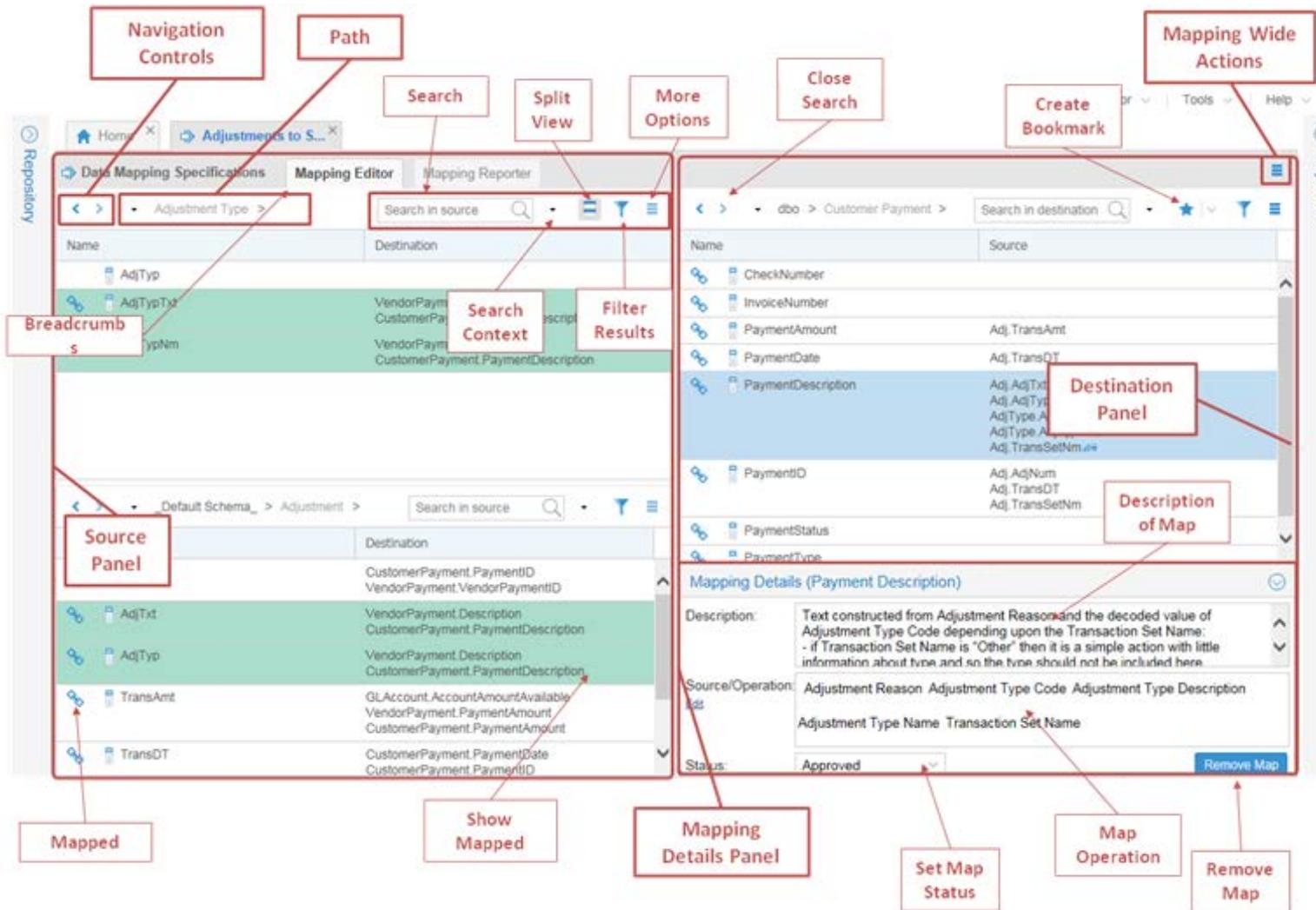
Download Report

Print Report

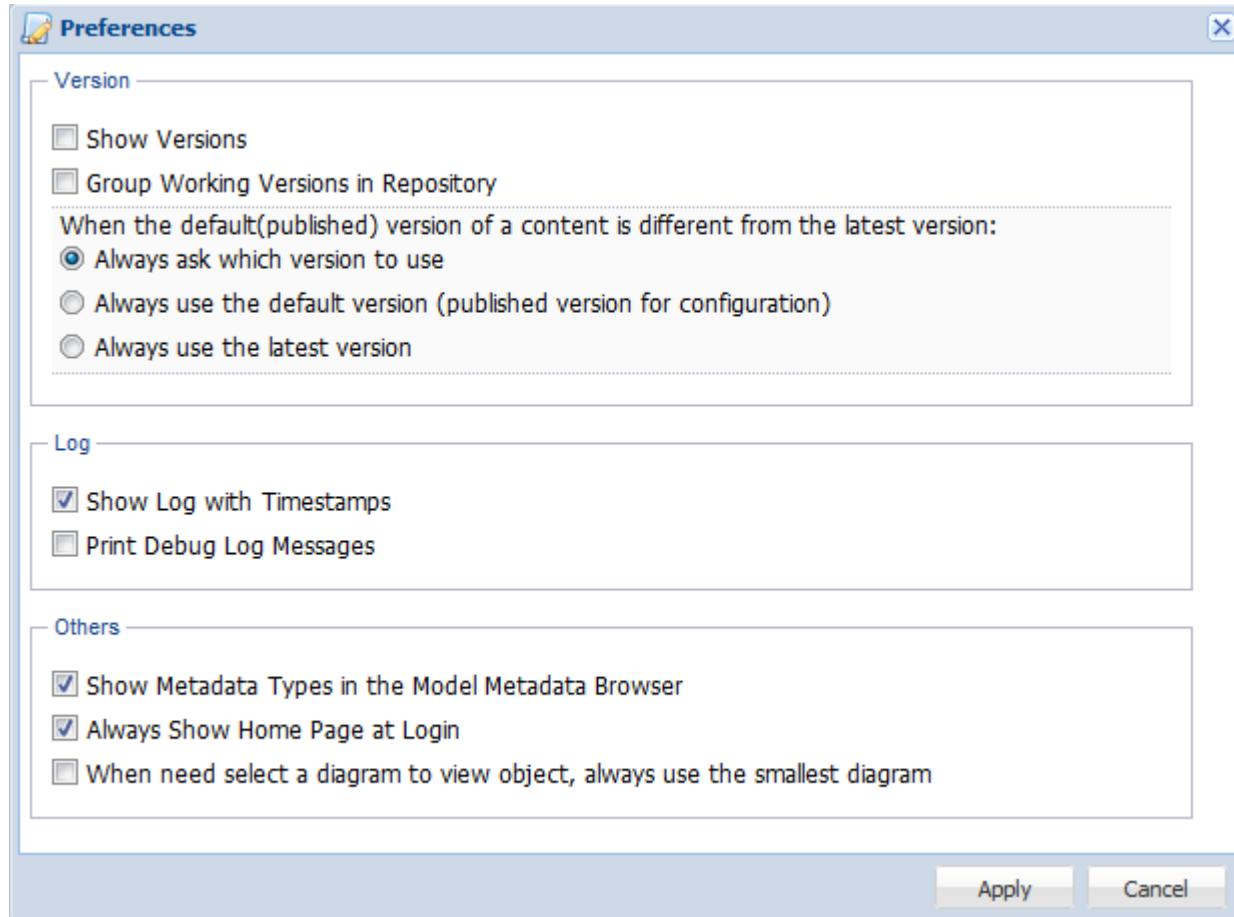
Column Controls

Source Feature	Source Path	Destination Name	Destination Path	Description
UnitPrice	/Finance Glossary/FinanceD...	UnitPrice	/FinanceDWStagingLogicalPh...	Sort Ascending
Account Status Log Account...	/Finance Glossary/FinanceD...	Account Status	/FinanceDWStagingLogicalPh...	Sort Descending
POLineItemView Quantity	/Finance Glossary/FinanceD...	Quantity	/FinanceDWStagingLogicalPh...	Columns
Vendor Description	/Finance Glossary/FinanceD...	Vendor Description	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
ShippingS...	/Finance Glossary/FinanceD...	ShippingState	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Vendor Invoice Invoice Date	/Finance Glossary/FinanceD...	Invoice Date	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Status	/Finance Glossary/FinanceD...	Status	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
ShippingCity	/Finance Glossary/FinanceD...	ShippingCity	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
International	/Finance Glossary/FinanceD...	International	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Purchase Order Line Item Nu...	/Finance Glossary/FinanceD...	Purchase Order Line Item Nu...	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
LineItemAmount	/Finance Glossary/FinanceD...	LineItemAmount	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
PO Line Item Item Description	/Finance Glossary/FinanceD...	Item Description	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Payment Description	/Finance Glossary/FinanceD...	Payment Description	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
City	/Finance Glossary/FinanceD...	City	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Customer Shipping Address	/Finance Glossary/FinanceD...	Customer Shipping Address	/FinanceDWStagingLogicalPh...	
Zip	/Finance Glossary/FinanceD...	Zip	/FinanceDWStagingLogicalPh...	

データ・マッピング仕様エディタのユーザー・インターフェース・コンポーネント



ユーザー・プリファレンス



ログ・メッセージへのタイムスタンプの表示/非表示

1. 管理者権限を持つユーザーとして、リポジトリにサインインします。
2. 「Tools」→「Preferences」と移動します。
3. 「Show Log with Timestamps」チェック・ボックスを選択します。

デバッグ・レベルのログ・メッセージの表示/非表示

1. 管理者権限を持つユーザーとして、リポジトリにサインインします。
2. ヘッダーで、「Tools」→「Preferences」と移動します。
3. 「Print Debug Log Messages」チェック・ボックスを選択します。

特別なUI機能

タブのドッキング

メタデータ・マネージャ UI の [ワークスペース・パネル](#) にあるタブは、ブラウザの上半分、下半分のいずれにもドッキングできます。

例: 上半分から下半分にタブを移動する手順:

1. [ワークスペース・パネル](#) のヘッダーでタブを右クリックして、「**Dock tab to south**」を選択すると、ブラウザ・ウィンドウの下側に移動します。
2. 下半分にドッキングされているタブがすでにいくつかある場合、ドラッグしているものを、必ず既存のタブの隣にドロップしてください。

「Properties」パネルからのドッキング解除

「Properties」パネルからドッキングを解除して、ブラウザ・ウィンドウの右端にドッキングされないようにすることができます。続いて、大きさを変更して、ブラウザ・ウィンドウの中の任意の場所に配置できます。

「Properties」パネルからドッキングを解除する手順:

1. [「Properties」](#) パネルのヘッダーを右クリックします。
2. 「**Detach all properties**」を選択します。

パネルを再びドッキングするには、単にフローティング・ウィンドウを閉じます。

メタデータの調査

モデルの参照

1. メタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 「Configuration」パネルを使用してモデルに移動します(「[メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント](#)」を参照)
3. モデルを参照するために開くには、次の方法があります。
 - 「Configuration」パネル(<https://sites.google.com/a/metaintegration.info/middleware/users/john-friedrich/ca-erwin-web-portal/getting-started/concepts-and-overview/using-the-repository-panel>)でモデルを右クリックし、「Open」を選択します。
 - 「Configuration」パネルでモデルをダブルクリックします。
 - 「Configuration」パネルにあるモデルを、タブがある[ワークスペース・パネル](#)のヘッダーにドラッグします。
4. [メタデータ・ブラウザ](#)が表示されます。

ここでは、次の操作が可能です。

- 要素をクリックして、そのプロパティを「Properties」パネルで表示。「Show / Hide Selected Object Properties」コントロールを使用して「Properties」パネルを展開する必要があることがあります(ページの右端)。
- このアイコンをクリックして、任意のハイパーリンク要素(左下隅に矢印があるアイコン)に直接移動。
- 全体的なモデルに適用されるアクション(モデル・ヘッダーの右側):
 - 「Search」()アイコンで、テキスト文字列を含む[モデル内のオブジェクトを検索](#)
 - 「Data Flow Overview」()アイコンで、モデル内の[データ・フローの概要](#)を表示
 - 「Labels」()アイコンで、[モデルのラベルをレビュー](#)
 - 「Comments」()アイコンで、[モデルのコメントを管理](#)
 - 「Attachments」()アイコンで、[モデルにアタッチされるファイルを表示](#)。
 - 「Actions」アイコンを使用して、次に示す他のオプションを選択。
 - **Show in Configuration** - 構成内でのこのモデルの特定の場所を表示
 - **Export** - モデルを外部メタデータ形式に[エクスポート](#)
 - **View Log** - モデルに対して実行された任意のアクションのログを表示
- モデルで選択されたオブジェクトに適用されるアクション:
 - 表示されるツリーは実際にはハイパーリンク・ツリーであり、ツリー内的一部のオブジェクトには、アイコンの左下隅に小さい矢印があります。この場合、ツ

メタデータ・マネージャのヘルプ

リー内のエントリは、ツリー構造の別の場所へのリンクになります。オブジェクトをダブルクリックするか、右クリックして「**Go To Reference**」を選択すると、オブジェクトが完全に定義されているこの別の場所に移動します。次のハイパーリンクに移動するには、ナビゲーション・アイコンが便利です。

- 「Forward」(↗)アイコンは、移動先のオブジェクトに進みます
- 「Back」(↖)アイコンは、移動元のオブジェクトに戻ります
- 「Open」(🔗)アイコン – ダイアグラムについて、[モデルのダイアグラムを視覚化](#)
- 「Show in Diagram」(🕒)で、選択したオブジェクトの[モデル・ダイアグラムを視覚化](#)
- 「Trace Lineage」(👉)アイコンで、[選択したオブジェクトの系統をトレース](#)
- 「Bookmark」(⭐)アイコンで、[この結果へのブックマークまたはリンクを作成](#)
- 要素の上で右クリックするか、要素を選択し、「Actions」アイコンを使用して、次に示す他のオプションを選択。
 - **Open** – ダイアグラムについて、[モデルのダイアグラムを視覚化](#)
 - **View Object Change History** – 選択された要素について、このモデルのすべての旧バージョンの範囲内の変更履歴を表示。
 - **Open in Metadata Explorer** – メタデータ・エクスプローラで要素を開く。オブジェクトが定義されている構成バージョンが複数ある場合、選択リストが表示されます。

任意のメタデータ・オブジェクトの検索

コンテンツ範囲内の特定オブジェクトの検索

1. 特定のモデルに移動します([「モデルの参照」](#)を参照)。
2. 「Search」(🔍)アイコンをクリックします。
3. 検索テキスト・ボックスに検索テキストを入力します([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#)を参照)。詳細検索については、[検索の問合せ言語](#)も必ず参照してください。
4. 任意の事前フィルタリング基準を選択します。
5. **Search**ボタンをクリックします。
6. [検索のインターフェース・コンポーネント](#)が表示されます。

ここでは、次の操作が可能です。

- 検索結果の要素に直接移動するには、その要素の名前をクリック。
- ツールバーで:
 - 結果の上にあるコントロールを使用して結果ページ内を移動。
 - 「**All Options**」を使用して検索オプションを選択し、追加の検索基準を指定。

- 「**Filters**」 パネルを使用して検索結果をフィルタリング。
 - 次を選択および選択解除することができます
 - 1. オブジェクトのタイプ
 - 2. 検索結果の範囲内のモデル
 - 展開(▽)アイコンをクリックして、これらのオプションを表示することもできます
- 「**Bookmark**」 ()アイコンで、[この結果へのブックマークまたはリンクを作成](#)
- 「**Download**」 ()アイコンで、リンクを使用して検索結果をダウンロード。
- 要素を右クリックするか、「**Actions**」 アイコンを選択して、他のオプションを表示。

多数のリポジトリ・オブジェクト間での検索

1. メタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 「**Repository**」 パネルの右上にある「**Search**」 コントロールをクリックします([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#) を参照)。
3. 検索テキストを入力します。
4. 任意の事前フィルタリング基準を選択します。
5. 検索ボタンをクリックします。
6. [検索のユーザー・インターフェース・コンポーネント](#) が表示されます。

ここでは、次の操作が可能です。

- 検索結果の要素に直接移動するには、その要素の名前をクリック。
- 要素をクリックして、そのプロパティを「**Properties**」 パネルで表示。
- 「**Filters**」 パネルを使用して検索結果をフィルタリング。
- 結果の上にあるコントロールを使用して結果ページ内を移動。
- [この結果へのブックマークまたはリンクを作成](#)。
- リンクを使用して検索結果をダウンロード。
- 任意の結果を右クリックして、[標準モデル・オブジェクト・ポップアップ・メニュー](#)から選択。
- 要素を右クリックするか、「**Actions**」 アイコンを選択して、他のオプションを表示。

問合せ言語

事前フィルタリングおよび事後フィルタリングに加えて、組込みの問合せ言語を使用して検索を指定することにより、非常に正確な結果を得ることができます。これは、大部分の Web ベースの検索エンジンとよく似ています。

メタデータ・マネージャのヘルプ

次の基準タイプを使用して、特定の検索を行うことができます。

検索対象	例	結果
任意の語	sales order	「sales」または「order」という語を含むすべての結果
完全一致のフレーズ	“sales order”	「sales order」というフレーズを正確に含むすべての結果
すべての語を含む	+sales +order	「sales」と「order」の両方の単語を含むすべての結果
この語を含まない	sales -order	「sales」の語を含むが「order」の語は含まないすべての結果
末尾にワイルド・カード	sale*	先頭に「sales」が付く語を含むすべての結果
親子関係	sales.order	親の名前が「sales」で、子の名前が「order」であるすべての結果。たとえば、属性「order」がエンティティ「sales」に含まれている場合。
完全一致名	.order	「order」という語のみを含むすべての結果
オブジェクト・タイプ	type:Column	タイプが「Column」であるすべての結果
プロパティ・タイプ	property:name	検索基準が名前と一致するすべての結果

もちろん、これらを組み合わせて1つの検索文字列にすることもできます。例:

Sales +order -date property:physicalname type:column

コラボレーション用のブックマークとURLの作成

現在のページのブックマークの定義

1. 任意のページで、そのページの任意のオブジェクトを選択して、「Bookmark」(アイコンをクリックします(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
2. 次の操作が可能です。
 - 共有する URL の取得。
 - 「Bookmarks」パネルに追加するブックマークの追加(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
 - 「Mail Link」で、その URL を含んだ状態でデフォルトの電子メール・クライアントを起動。

URLの取得。

1. 任意のページから、次のいずれかを実行します。
 - 「Bookmark」(アイコンをクリックします(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
 - オブジェクトを右クリックして、「Get Link」を選択します。

2. URL テキストを右クリックし、他の任意のアプリケーション(電子メール、文書など)に貼り付けます。
3. 「Email Link」ボタンを使用して、その URL を含んだ状態でデフォルトの電子メール・クライアントを起動することもできます。

検索およびレビュー用のラベル配置

ラベルは、Oracle Metadata Management (OMM)を範囲とするメタ・タグで、モデル内の任意のオブジェクトに適用でき、検索やレビューの対象になったり、モデルまたは構成によって集中管理されたりします。

オブジェクト上でのラベルの割当てと表示

オブジェクトにラベルを割り当てる手順:

1. 任意のモデルに直接移動します。
2. オブジェクトをクリックして、そのプロパティを「Properties」パネルに表示します。
3. 必要に応じて「Properties」パネルを下にスクロールして、必要に応じて「ラベル」を展開します。
4. 単一語のラベルを「Labels」コンボ・ボックスに入力するか、すでに定義されているラベルを選択します。

注意: ラベルの定義範囲は Oracle Metadata Management (OMM)全体です。任意のユーザーが定義したラベルのプールは、すべてのユーザーによって参照および利用可能であることに注意してください。

ラベル割当ての削除

オブジェクトへのラベルの割当てを解除する手順:

1. 任意のモデルに直接移動します。
2. オブジェクトをクリックして、そのプロパティを「Properties」パネルに表示します。
3. 必要に応じて「Properties」パネルを下にスクロールして、必要に応じて「ラベル」を展開します。
4. 「Labels」コンボ・ボックスをクリックします。
5. 割当てを解除するラベルの隣にある「x」をクリックします。

注意: ラベルの定義範囲は Oracle Metadata Management (OMM)全体です。ラベル割当てを削除しても、ラベルはシステムから削除されません。

ラベル割当てのレビュー

モデルまたは構成全体にわたってラベル割当てをレビューできます。

1. モデルまたは構成の場合
 - モデルの場合、「Configuration」パネルにある任意のモデルに直接移動して開きます。「Review Labels」()アイコンをクリックします。
 - 構成の場合、「Configuration」パネル・ツールバーにある「More actions」()アイコンをクリックして、「Review Labels」を選択します。

2. 任意の数の單一語ラベルを「**Labels**」コンボ・ボックスに入力することも、コンボ・ボックス選択を使用して任意の数を選択することもできます。レビューするラベルは、任意の数だけ選択できます。
3. ラベルを追加または削除する手順:
 - オブジェクトのリストにある任意の項目を右クリックして、「**Add Label**」あるいは「**Remove Label**」を選択します。
 - または,
 1. その項目を右クリックします
 2. 「**Show in Metadata Browser**」を選択します
 3. そのプロパティを「**Properties**」パネルに表示します
 4. 必要に応じて「**Properties**」パネルを下にスクロールします
 5. 必要に応じて「**Labels**」を展開します。
4. レビューに含めないようにするラベルの隣にある「x」をクリックします。

ラベル割当ての検索

モデルまたは構成内で検索する場合、次の操作が可能です:

- 特定のラベルに対応する「**Filters**」パネルを使用して検索結果をフィルタリング。

フィードバック/コメントの送信とレビュー

コメントとは、モデルによる問合せ、レポート、レビューおよび管理の対象となる、自由形式のテキスト・ノートです。コメントは、作成者、作成時間、更新時間、重要度およびステータスを追跡します。ユーザーは、写真やマルチメディアなどの任意のファイルをモデルに添付でき、コメントにその参照を含めることができます。オブジェクト当たり 1つ以上のコメントを残したり、他の人が残したコメントを参照したりできます。

ラベルとは異なり、コメントは、それが入力されたモデルの特定のバージョンにのみ適用されます。ただし、コメントは、モデル全体でのコメント・レビュー・プロセスの一部として、新しいバージョンに移行できます。

さらに、これらのコメントを後で Oracle Metadata Management (OMM)からエクスポートして、外部メタデータ・ツールで開き、そこで元の外部メタデータ・モデルの形式でレビューおよび編集できます(外部メタデータ・ツール・ユーザー・インターフェースでサポートされている場合)。

コメントの追加

オブジェクトにコメントを追加する手順:

1. 任意のモデルに直接移動します。
2. オブジェクトをクリックして、そのプロパティを「**Properties**」パネルに表示します。
3. 必要に応じて「**Properties**」パネルを下にスクロールして、必要に応じて**コメント**を展開します。
4. 「**Comment**」ダイアログ・ボックスに任意の量のテキストを入力します。
5. 「**Save**」をクリックします。

個々のオブジェクト上でのコメントの管理

オブジェクトにコメントを追加する手順:

1. 任意のモデルに直接移動します。
2. オブジェクトをクリックして、そのプロパティを [「Properties」パネル](#) に表示します。
3. 必要に応じて [「Properties」パネル](#) を下にスクロールして、必要に応じて **コメント** を展開します。
4. 特定の既存のコメントをクリックします。
5. 次の操作が可能です:
 - [「Properties」パネル](#) の下部にあるコメント・テキスト・ボックスでのコメントの表示。
 - 新しいコメントの **追加**。
 - 選択したコメントの編集。
 - コメントの **重要度** を1つから5つまでの星の数で指定。
 - 選択したコメントの **削除**。これは永続的なアクションです。
 - 選択したコメントの作成者への電子メールの **送信**。

モデル全体でのコメントのレビュー

モデル内のすべてのコメントを管理する手順:

1. [「Configuration」パネル](#) にある任意のモデルに直接移動して開きます。
2. [「Review Comments」](#) (アイコン) を右クリックします。
3. コメントがあるモデル内のすべてのオブジェクトのリストが表示されます。ここでは、次の操作が可能です。
 - [「Properties」パネル](#) の下部にあるコメント・テキスト・ボックスでのコメントの表示。
 - このリストへの列の追加または削除と、列を基準としたソート。
 - リストを Excel にダウンロード。
 - 次のいずれかを右クリックするか、リスト・ヘッダーにあるアクションを使用して、選択したオブジェクトに対して次の操作を行います。
 - 新しいコメントの **追加**。
 - 選択したコメントの編集。
 - コメントのステータスの設定。
 - コメントの重要度の設定。
 - 選択したコメントの削除。これは永続的なアクションです。
 - 選択したコメントの作成者への電子メールの送信。
 - 別のバージョンのモデルへのコメントの移行。これにより、新しいバージョンをインポートする際にコメントを移行できます。
 - 一度に複数のコメントを選択できることに注意してください。

コメント内容の検索

モデルまたは構成内で検索する場合、次の操作が可能です:

- コメント・テキストの [「Filters」パネル](#) を使用して検索結果をフィルタリング。

モデルのダイアグラムの視覚化

1. 特定のモデルに移動します(「[モデルの参照](#)」を参照)。
2. 次のいずれかを実行します。
 - ダイアグラムに表示される任意のオブジェクト(表、関係など)に移動し、右クリックして「**Show in Diagram**」を選択。モデルで利用できるダイアグラムの選択肢が表示され、いずれかを選択すると、そのダイアグラムが新しいタブに表示されます。
 - 「ER Diagrams」を展開して、任意のダイアグラムに移動し、右クリックして「**Open**」を選択。そのダイアグラムが新しいタブに表示されます。
 - 「Subject Areas」を展開して、任意のダイアグラムに移動し、右クリックして「**Open**」を選択。そのダイアグラムが新しいタブに表示されます。

一度に任意の数のダイアグラムを開くことができ、モデルのワークスペース・パネルでそれぞれにタブが割り当てられることに注意してください。

ここでは、次の操作が可能です。

- 要素をクリックして、そのプロパティを「[Properties](#)」パネルで表示。「Show / Hide Selected Object Properties」コントロールを使用して「Properties」パネルを展開する必要があることがあります(ページの右端)。
- [標準的なグラフィカル・ナビゲーション・ツールバー](#)を利用
 - [概要の表示または非表示](#)
 - [縮小](#)
 - [拡大](#)
 - [コンテンツに合せる](#)
- 「[Options](#)」選択リストを使用して、モデルの表示オプションを指定。
- 全体的なモデルに適用されるアクション(モデル・ヘッダーの右側):
 - 「[Search](#)」(アイコンで、テキスト文字列を含む[モデル内のオブジェクトを検索](#)
 - 「[Data Flow Overview](#)」(アイコンで、モデル内の[データ・フローの概要](#)を表示)
 - 「[Labels](#)」(アイコンで、[モデルのラベルをレビュー](#)
 - 「[Comments](#)」(アイコンで、[モデルのコメントを管理](#)
 - 「[Attachments](#)」(アイコンで、[モデルにアタッチされるファイルを表示](#)
 - 「[Actions](#)」(アイコンを使用して、次に示す他のオプションを選択。
 - [Show in Configuration](#) – 構成内でのこのモデルの特定の場所を表示
 - [Export](#) – モデルを外部メタデータ形式にエクスポート
 - [View Log](#) – モデルに対して実行された任意のアクションのログを表示
- モデルで選択されたオブジェクトに適用されるアクション:
 - 「[Bookmark](#)」(アイコンで、[この結果へのブックマークまたはリンクを作成](#)

- 要素の上で右クリックするか、要素を選択し、「Actions」(≡)アイコンを使用して、次に示す他のオプションを選択。
 - **Show in Metadata Browser** - 「Metadata Browser」タブに要素を表示。
 - 使用可能なオブジェクト系統トレーシング・オプションから選択
 - この結果へのブックマークまたはリンクを作成。
 - それ以降の他のオプション

自動レイアウト

モデルを見つけ、モデルのダイアグラムの視覚化を行った後は、**自動レイアウト**機能を使用して、特定のアルゴリズムに合わせてダイアグラムを再度レイアウトできます。「Show original」ボタンをクリックして、いつでも元の公開済レイアウトに戻すことができます。

動的ダイアグラムのサブセット生成とレイアウト

ダイアグラム内の特定の表またはエンティティを選択し、「Show only related entities」オプションを使用して、次のような表あるいはエンティティのみが含まれている小さなダイアグラムを再表示できます。

- **直接関連している**(関係定義で設定)
- **2つの分離レベルを持つ**
- **何らかの形で関連している。**

モデルのダイアグラムにある関係の分析

モデルを見つけ、モデルのダイアグラムの視覚化を行った後は、ダイアグラム内の関係を選択して次の分析を実行できます。

- 関連付けられている主キーと外部キーをダイアグラム内の関連した表の中で強調表示する。複数のPK/FKペアがある場合、それぞれが異なる色で強調表示されます。
- 「Properties」パネルで**関係結合式**をコピーして貼り付け、レポート・ツールで直接、同等の結合を定義するために使用できます。

モデルを外部メタデータ形式にエクスポート

1. 特定のモデルに移動します(「モデルの参照」を参照)。
2. 「More actions」(≡)アイコンをクリックします(「メタデータ・マネージャ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
3. 「Export」を選択します。
4. 「Export to」プルダウンで外部メタデータ・エクスポート形式を選択します。
5. 各「Parameters」で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。各「Parameters」で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。必ず、リモート・リポジトリ参照機能(パラメータ入力ボックス内のQアイコン)を使用して、含めるフォルダおよびモデルを含めます。
6. 「Export」をクリックします。モデルをインポートするように求めるダイアログが表示されます。「Yes」をクリックします。「OK」をクリックします。
7. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、エクスポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。

8. 「Operation Successful」 という結果が表示されたら、 「Close」 をクリックしてモデルを開きます。 「Operation Failed」 という結果が表示されたら、 ログ・メッセージを調べ、それに応じて問題を修正します。 「Operation Successful」 という結果が表示されたら、 「Close」 をクリックしてモデルを開きます。 「Operation Failed」 という結果が表示されたら、 ログ・メッセージを調べ、それに応じて問題を修正します。

これで、外部メタデータでモデルを開くことができるようになりました。

コメントを外部メタデータ・モデルにエクスポートして戻す

これらのコメントを外部メタデータ形式にエクスポートして戻すことができます(たとえば、同じオブジェクト上のノートとして組み込む)。このためには次の操作を行います。

1. [モデル全体でのコメントのレビュー](#)
2. [モデルを外部メタデータ形式にエクスポート。](#)
3. コメントが外部メタデータ・ツールにエクスポートされる方法を必ず指定してください。

リポジトリ・オブジェクトのデータ・フローとセマンティック系統のトレースと分析

外部メタデータ・リポジトリの接続概要

ソース外部メタデータ・リポジトリで定義されている相互接続の上位レベルの概要を取得するには、モデルの接続概要を表示します。

1. [「configuration」パネル](#)で次のいずれかを実行します。
 - 外部メタデータ・リポジトリとモデルの 「Connection Overview」 を右クリック。
 - 「configuration」ツールバーでモデルの 「Connection Overview」  アイコンをクリック。
2. あるいは、外部メタデータ・リポジトリを開き、続いて、モデルの 「Directory」 ツールバーで、モデルの 「Connection Overview」  アイコンをクリックします([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#)を参照)。

ここでは、次の操作が可能です。

- オブジェクトをクリックして、そのプロパティを [「Properties」パネル](#)に表示します。
- 任意の結果を右クリックして、[標準モデル・ポップアップ・メニュー](#)から選択。
- [標準的なグラフィカル・ナビゲーション・ツールバー](#)を利用
- [この結果へのブックマークまたはリンクを作成。](#)
- 表示されているダイアグラムの[コンテンツ内で特定のオブジェクトを検索。](#)
- 要素を右クリックするか、 「Actions」 ()アイコンを選択して、他のオプションを表示。

モデル系統アナライザ

ソース・モデルで定義された系統の完全な分析を取得するには、モデルの [系統アナライザ](#) を表示します。

- 特定のモデルに移動します([「モデルの参照」](#)を参照)。
- モデルを開きます。
- [「Lineage Overview」タブをクリックします\(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照\)](#)。

ここでは、次の操作が可能です。

- オブジェクトをクリックして、そのプロパティを[「Properties」パネル](#)に表示します。
- 任意の結果を右クリックして、[標準モデル・オブジェクト・ポップアップ・メニュー](#)から選択。
- [標準的なグラフィカル・ナビゲーション・ツールバー](#)を利用
- [この結果へのブックマークまたはリンクを作成](#)。
- 表示されているダイアグラムの[コンテンツ内で特定のオブジェクトを検索](#)。
- 要素を右クリックするか、[「Actions」\(≡\)アイコン](#)を選択して、他のオプションを表示。

オブジェクト系統トレーシング・アクション

系統トレースとは、詳細分析のためのセマンティック系統またはデータ・フロー系統(あるいはその両方)の完全詳細なトレースです。モデルの概要または[「Lineage Analyzer」タブ](#)とは異なり、このプレゼンテーションでは、特定の要素に絞り込み、モデル、外部メタデータ・リポジトリ(データ・フローのみ)あるいは構成の中で、それらがデータ・フロー系統またはセマンティック系統(あるいはその両方)に関してどのように関連しているかを把握できます。

データ・フロー系統トレーシング・オプション

データ・フロー・トレースのオプションには、次のようなものがあります。

- Trace Data Flow in model** – 現在参照している特定のモデルの範囲内で選択した要素のデータ・フロー・トレースを表示します(影響または前方、および系統または後方のどちらも可)。
- Trace Data Flow in Configuration** – 現在参照しているか、選択リストから選択した、特定の構成の範囲内で選択した要素のデータ・フロー・トレースを表示します(影響または前方、および系統または後方のどちらも可)。
- Trace Data Flow (Advanced)** – 選択した要素のデータ・フロー・トレースを表示します(オプションを完全制御可能)。
 - Trace:**
 - Data Impact**(前方)
 - Data Lineage**(後方)
 - Semantic Definition**(上方)
 - Semantic Usage**(下方)
 - Scope**
 - Model:**開いているモデル内のみ
 - Model directory:**開いているモデルが含まれているモデルのディレクトリ内

- **configuration:**選択した構成全体
- **構成**
 - 構成を選択
- **Display**
 - **Text/List**
 - **Graph/Flow**
- 「**Graph/Flow**」を選択した場合、次のオプションがあります。
 - **Show Control Links** – 制御フロー・リンクを表示(下の黄色の線を確認)
 - **Show Internal Objects** – 統系内のすべてのオブジェクトを表示
- Save as default lineage options
 - 前述の選択したオプションが今後デフォルトとなるように保存します。デフォルトにリセットするには、「**Trace Data Flow (Advanced)**」オプションを再度使用します。

セマンティック系統トレーシング・オプション

セマンティック系統トレーシングのオプションには、次のようなものがあります。

- **Trace Semantic Definition in Configuration** – セマンティック・トレースをオブジェクトの定義に向かって後方に表示します。言うまでもなく、多くの要素には定義に戻る直接のセマンティック・リンクは存在しません。このため、このトレースは、定義へのセマンティック・リンクを持つ要素に戻る(1対1の)データ・フロー系統も参照します。したがって、セマンティック定義リンクを持つ要素が真に同等である(1対1の関係のみを持ち式を持たないデータ・フロー系統を介して後方トレースする)と示せる場合、その要素の定義のセマンティック情報が表示されます。

- **Trace Semantic Usage in Configuration** – 選択した要素のすべての意味的な用法を表示するセマンティック・トレースを前方に表示します。

一般に、2つのタイプの系統があります。

- データ・ストアへの接続定義と、データを変換および移動する物理的変換ルールに基づいたデータ・フロー
- セマンティック(たとえば、概念的から論理的モデルまで、または論理的から物理的モデルまでの関係の詳細)

Oracle Metadata Management (OMM)では、両方のタイプの系統を表示および分析できます。

一般に、Oracle Metadata Management (OMM)機能内の系統ツールは、どちらもまったく同じで、データ・フロー系統、セマンティック系統のいずれか、または両方を分析します。ただし、次のようにプレゼンテーションが異なります。

		Thick Line	Thin Line
Data Flow Link	Black	Underlying Process (which may be expanded separately)	No Underlying Process
		Underlying Process with Transformation of the Data	Transformation of the data without an Underlying Process
	Grey	Underlying Process but simple pass-through	Simple pass-through and no underlying process
		Control Flow which directly impacts values of columns (e.g., Lookup) and represents and underlying process	Control Flow which directly impacts values of columns (e.g., Lookup)
	Yellow Dashed	Control Flow which does not directly impact values of columns (e.g., Filter) and represents and underlying process	Control Flow which does not directly impact values of columns (e.g., Filter)
		Semantic link such as a derivation where there is an underlying process	Semantic Link such as a derivation
Semantic Link	Blue Dashed		

さらに、Oracle Metadata Management (OMM)には4つのレベルのプレゼンテーションがあります。

- 構成モデルの **Connections Overview** – 構成内に含まれる様々なモデル、および Oracle Metadata Management (OMM)に手動で割り当てられている接続定義に基づいてどのように相互関連(ステイッキング)しているかを表すダイアグラム。
- 外部メタデータ・リポジトリ・モデルの **Connections Overview** – 外部メタデータ・リポジトリのディレクトリ内に含まれる様々なモデル、および外部メタデータ・リポジトリで、すでに与えられている接続定義に基づいてどのように相互関連(ステイッキング)しているかを表すダイアグラム。
- モデルの **Lineage Overview** – 特定のモデル内の系統の概要を表すダイアグラム。
- 構成もしくはモデル・レベルでの系統トレース分析 - 詳細分析のためのセマンティックまたはデータ・フロー系統(あるいはその両方)の完全詳細なトレース。
-

添付ドキュメントの表示

1. 特定のモデルに移動します([「モデルの参照」](#)を参照)。
2. モデルを開きます。
3. 「**Attachments**」タブをクリックします([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#)を参照)。

ページ内容の印刷

1. 任意のページから、次のいずれかを実行します。
 - 「**More Actions**」 (アイコンをクリックし([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#)を参照)、「**Print**」を選択します。
 - または、利用可能であれば「**Print**」 (アイコンをクリック。
2. インターネット・ブラウザに印刷ダイアログが表示されます。

注意: 印刷するページのソート順と列の選択や、ダイアグラム内の選択箇所は、印刷された結果で維持されます。

データ・プレビュー

データ・プレビュー機能によって、メタデータの収集元の実際のデータ・ソースを表示できます。これが可能なのは、データベース・ソースまたは大きいデータ・ソースから直接インポートされたモデルの場合のみです。

この機能を利用するには、[「マネージャ・セキュリティ・ロール」](#)を持つユーザーは、次を実行する必要があります。

1. モデルの設定を開きます
2. 「**Data Preview Setup**」タブをクリックします
3. 「**Show Data Preview Options**」ボタンをクリックします
4. 「**Enable data preview**」チェック・ボックスをクリックします

5. 接続情報を定義します。これは独立しており、「Import Setup」タブの接続情報とは異なるものにすることができます。
6. 特定の表に表示する行数を指定します
7. 「Save」ボタンをクリックします。

これらの設定を保存すると、次の操作が可能です:

1. モデルを開きます
2. 表に移動します
3. 表名を右クリックし、「Data Preview」を選択します。

メタデータの収集/インポート

モデルの一般原則の収集

モデルをソース・ツールおよび形式から収集する際の考慮事項がいくつかあります。

- 外部形式のメタデータ・ソースに対して適切な接続性があることを確認する。これには次のものが考えられます。
 - 1つ以上のファイル
 - 外部ツール・アプリケーション・プログラミング・インターフェース(API)
 - クライアント・インストールに基づく外部ツールの API
- 必要に応じて、補助的なリソースへの完全アクセスがあることを確認する。これは、接続しようとする外部形式によって異なりますが、一般的な例には次のものがあります。
 - 置換変数がソース・メタデータで定義可能であり、正しく解析するために必要である、ツールの置換パラメータ定義ファイル
 - データベース接続名などのデータ・ソースへの接続情報

これらの要件はすべて、**「Import Setup」** タブの **「Help」** パネルにあるプリッジ・ツール・チップに記載されています。

外部メタデータからのモデルの収集

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. モデルを配置するフォルダを 「Repository」 パネルで右クリックし、**「New」** → **「Model」** を選択します。
3. **「Create Model」** ダイアログで、**「General」** タブを選択します。
4. モデルの **「Name」** と **「Description」** を入力します。
5. **「Import From」** プルダウンで、外部メタデータ・インポート形式を選択します。
6. **「Import Setup」** タブを選択します。
7. **「Execute On」** プルダウンで(リモート)サーバー名を選択し、リモート・プリッジ・サーバーを使用することもできます。
8. 各 **「Parameters」** で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。各 **Parameters** で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。必ず、リモート・リポジトリ参照機能(パラメータ入力ボックス内の  アイコン)を使用して、目的のモデルの場所を特定します。
9. 新しくインポートされたバージョンを自動的にデフォルト・バージョンとして設定する場合は、「Set as default」チェック・ボックスを選択します。
10. **「Create」** をクリックします。
11. モデルをインポートするように求めるダイアログが表示されます。 **「Yes」** をクリックします。
12. 続いて **「Log Messages」** ダイアログが表示され、インポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。

13. 「Import Successful」という結果が表示されたら、**「Yes」** をクリックしてモデルを開きます。「Import Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じてソース・モデル・ファイルを修正します。
14. これでモデルを参照できるようになりました。

外部メタデータ・リポジトリからの単一モデルの収集

インストールの説明と『Readme』で定義されているように、サービスに対するログインを割り当てたことを確認します。

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 外部メタデータ・リポジトリを配置するフォルダを 「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Havestable model」を選択します。
3. 「Create Model」ダイアログで、「General」タブを選択します。
4. 外部メタデータ・リポジトリの「Name」と「Description」を入力します。
5. 「Import From」プルダウンで、正しいソース形式を選択します。
6. 「Import Setup」タブを選択します。
7. 「Execute On」プルダウンで(リモート)サーバー名を選択し、リモート・ブリッジ・サーバーを使用することもできます。
8. 各「Parameters」で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。
9. 新しくインポートされたバージョンを自動的にデフォルト・バージョンとして設定する場合は、「Set as default」チェック・ボックスを選択します。
10. 「Create」をクリックします。
11. 外部メタデータ・リポジトリをインポートするように求めるダイアログが表示されます。「Yes」をクリックします。「OK」をクリックします。
12. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、インポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。
13. 「Import Successful」という結果が表示されたら、**「Yes」** をクリックして外部メタデータ・リポジトリを開きます。「Import Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じてインポート・ブリッジのパラメータを修正します。
14. これで外部メタデータ・リポジトリを参照できるようになりました。

外部メタデータ・リポジトリからの複数モデルの収集

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. モデルを配置するフォルダを 「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Model」を選択します。
3. 「Create External Content」ダイアログで、「General」タブを選択します。
4. モデルの「Name」と「Description」を入力します。
5. 「Import From」プルダウンで、外部メタデータ・リポジトリ複数モデル・インポート形式を選択します。

6. 「Import Setup」タブを選択します。
7. 「Execute On」プルダウンで(リモート)サーバー名を選択し、リモート・ブリッジ・サーバーを使用することもできます。
8. 各「Parameters」で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。必ず、リモート・リポジトリ参照機能(パラメータ入力ボックス内のQアイコン)を使用して、含めるフォルダおよびモデルを含めます。
9. 新しくインポートされたバージョンを自動的にデフォルト・バージョンとして設定する場合は、「Set as default」チェック・ボックスを選択します。
10. 「Create」をクリックします。Oracle Metadata Management (OMM)内の1つの場所の内側にあるモデルのコレクションとなることに注意してください。
11. モデルをインポートするように求めるダイアログが表示されます。「Yes」をクリックします。
12. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、インポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。
13. 「Import Successful」という結果が表示されたら、「Yes」をクリックしてモデルを開きます。「Import Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じてソース・モデル・ファイルを修正します。
14. これでモデルを参照できるようになりました。
15. モデルのコレクションが外部メタデータ・リポジトリと同期する(変更がある場合に再インポートされる)ように、同期スケジュールを定義することもできます。

外部メタデータ・ファイルのディレクトリからの複数モデルの収集

一般に、組織では多数の外部メタデータ・ファイルがあつても、外部メタデータ・リポジトリを使用していません。このような組織が、Oracle Metadata Management (OMM)にファイルを自動化された方式でバッチ・インポートしたいと考えていることがよくあります。Oracle Metadata Management (OMM)は、収集スクリプトを利用してこのシナリオをサポートできます。

この場合、ファイルは、Oracle Metadata Management (OMM)アプリケーション・サーバーにアクセス可能なファイル・ディレクトリ下に格納されます。スクリプトは、ディレクトリとそのサブディレクトリをスキヤンして特定の外部メタデータ・タイプのファイルを探し、Oracle Metadata Management (OMM)内の特定のフォルダで、一致するモデルを検索します。Oracle Metadata Management (OMM)のリポジトリ・フォルダとモデル構造は、ファイル・システム上でのファイルとディレクトリの構造に一致します。必要なモデルが存在しない場合、スクリプトはそれを作成してファイルをインポートします。コンテンツが存在し、ファイルのバージョンが未収集の場合、スクリプトにより再インポートされます。

「Tools」→「Administration」→「Schedules」タブを使用してスクリプトを定期的に実行するよう、MMをスケジューリングできます。それにより、顧客はファイルをディレクトリ内に配置できるようになり、Oracle Metadata Management (OMM)によって確実に自動インポートされるようになります。任意の単一モデル・ファイル・ベースのブリッジで機能します。

ファイルがインポートされる方法(ソース・ツールとブリッジ・パラメータ)を制御するには、「Settings」という名前の特別なモデルを定義することも必要です。

Oracle Metadata Management (OMM) フォルダの作成:

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. インポートの結果を含むフォルダを配置するフォルダを 「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Folder」を選択します。
3. それに応じてフォルダを命名します。

モデルのインポートを制御する設定ファイルの作成:

4. 「Repository」パネルで新しいフォルダを右クリックし、「New」→「Model」を選択します。
5. 「Create Model」ダイアログで、「General」タブを選択します。
6. モデルの「Name」に「Settings」と入力します。
7. 「Import From」プルダウンで、正しいソース形式を選択します。
8. 「Import Setup」タブを選択します。
 - 各「Parameters」で、ダイアログの右側パネルに表示されるツールチップに従い入力します。特に、「File」パラメータについては次のようにします。
 1. アイコンをクリックして、ファイル・システムのディレクトリ構造内にあるファイルを参照します。
 2. 「File:」パラメータを更新して、パスがファイル・システムのディレクトリ構造の最上位レベルのみを参照するようにします(つまり、ファイル名とすべてのサブディレクトリ名を削除します)。
9. 新しくインポートされたバージョンを自動的にデフォルト・バージョンとして設定する場合は、「Set as default」チェック・ボックスを選択します。
10. 「Create」をクリックします。
11. モデルをインポートするように求めるダイアログが表示されます。これは非常に重要です: 「No」をクリックします。

オンデマンドでのモデルの収集:

1. 「Repository」パネルで新しいフォルダを右クリックし、「Scripts」→「Import new versions from folder」を選択します。
2. 「Run Script」ボタンをクリックします。
3. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、インポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。

4. 「Import Successful」という結果が表示されたら、「**Yes**」をクリックしてモデルを開きます。「Import Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じてソース・モデル・ファイルを修正します。
5. これでモデルを参照できるようになりました。

収集スケジュールの定義:

6. モデルのコレクションが外部メタデータと同期する(変更がある場合に再インポートされる)ように、収集スケジュールを定義することもできます。

ファイルはインポート時に自動的に添付されることに注意してください([コンテンツへのファイルの添付](#))。

リモート収集(リモート・ブリッジの実行)

特定の外部ツール・クライアント・ソフトウェア(および関連する API)が、ローカルで Oracle Metadata Management (OMM) アプリケーション・サーバー上で利用できない場合、このクライアント・ソフトウェアが利用可能ならリモート・ブリッジ・サーバーを作成し、利用するオプションがあります。

リモート・ブリッジ・サーバーのインストールは、ライセンスが不要で、そのため利用可能な Web ベースの UI を持たない以外は、アプリケーション・サーバー上に Oracle Metadata Management (OMM) をインストールするのと同等です。詳細は、インストール手順を参照してください。

インストールおよび稼働後に、リモート・ブリッジ・サーバーを Oracle Metadata Management (OMM) に追加する手順:

1. 「**Tools**」→「**Administration**」→「**Servers**」と移動します
2. 「**Add**」をクリックします。
3. 次の値を指定します。
 - a. **Name** - このリモート・サーバーが参照する名前
 - b. **URL** - このリモート・サーバーの URL(一般に、URL 署名内でマシン名を更新する必要があるのみ)
 - c. **Server Location** - リモート・ブリッジ・サーバーとのファイルの転送方法を制御するサーバー・ロケーション。
 - Local - ファイルのコピー
 - Remote - アップロードまたはダウンロード
 - Remote over WAN - アップロードまたはダウンロード前にファイルを圧縮
 - d. 説明
4. 「**Save**」をクリックします

リモート・ブリッジ・サーバーを使用して収集する際、「**Execute On**」プルダウンでサーバー名を選択する以外は、他の収集アクティビティと同じ手順を実行します。

コンテンツへのファイルの添付

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 添付するファイルを追加する 「Repository」パネルでコンテンツを右クリックし、「Open」を選択します。
3. 「Manage attachments」 ()アイコンをクリックします。
4. 「Add」 (+) アイコンをクリックします。
5. 添付するファイルを参照し、選択します。
6. 一覧表示されたファイルの横の 「Description」 テキスト・ボックスを編集できます。

添付ファイルを削除するには、添付ファイルを選択して 「Delete」 アイコンを使用するか、添付ファイル上で右クリックし、「Delete」を選択します。

後で添付ファイルの説明を編集()することもできます。

コンテンツの公開

コンテンツをリポジトリにインポートまたはアップロードした後、結果として生じたモデルを構成内に配置する必要がある場合があります。構成はモデルの階層的なコレクションで、次の特徴があります。

- 公開したり、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーが利用できるようにする
- リポジトリ全体における参照、検索および分析のスコープを提供する

つまり、構成を使用することにより、リポジトリの管理者は極度に複雑なリポジトリ内であっても、ビジネス・ユーザーに表示される内容や、すべてのユーザーの検索および分析方法について完全性と正確性を確保できます。

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 公開済の構成を開きます。
3. 公開するコンテンツを、「Repository」パネルから 公開済の構成にドラッグ・アンド・ドロップします。
4. これで、メタデータ・エクスプローラ UI にサインインすると、コンテンツが表示されるようになります。

自動収集のスケジューリング(スケジューリングされたモデルのOracle Metadata Management (OMM)同期)

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルでモデルまたはフォルダを右クリックし、「Settings」を選択します。
3. 「Settings」ダイアログで、「Schedule」タブを選択します。

4. スケジュール情報を指定します。
5. 変更を**保存**します。

前述の手順を使用すると、コンテンツが収集されるたびに、新しいバージョンが確実に作成されます。ただし、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザー や構成ベースの分析に利用可能になるようにするには、この最新バージョンで、マートを含んでいるすべての構成を更新(および検証)する必要もあります。そのためには、まず[自動更新](#)の構成を定義します。次に、構成の自動検証をスケジューリングします。

1. 「**Tools**」 → 「**Administration**」 → 「**Schedules**」と移動します。
2. 「**Add**」をクリックします。
3. 「**Add a new schedule**」ダイアログが表示されます。
4. スケジュールの適切な名前と説明を入力します。
5. 「[Repository](#)」パネルから「**Object**」ボックスに構成(または、それを含むフォルダ)をドラッグします。
6. 「**Update configurations**」スクリプトを選択します。
7. スケジュール情報を指定します。一般に、これはマートの収集の直後にスケジューリングされます。
8. 新しいスケジュールを**追加**します。

メタデータのバージョンと構成の管理

モデル・バージョンの管理

場合によっては、リポジトリを使用して、モデルの毎回の収集またはアップロードに関するバージョン履歴を維持する必要があります。これらのバージョンはリポジトリ内では個別のオブジェクトであり、特定の時点のオブジェクトのコンテンツを表します。

管理者は、任意の数のバージョンを管理できます。ただしデフォルトでは、メタデータ・マネージャ UI には 1 つのバージョンのモデルのみが表示されます。技術知識のあるユーザーは、いつでも複数バージョン・ユーザー・インターフェース・モードに変更できます。さらに、特定のバージョンをデフォルトのバージョンに指定することもできます。それが、メタデータ・マネージャ UI が単一バージョン・モードになっている場合に使用されるモデルのデフォルト・バージョンです。

また、構成にモデルを含める場合、実際にはそのモデルの特定のバージョンを構成に含めていることになります。これは、どのモデルのどのバージョンを公開するかについていつでも制御できることを意味します。たとえば、データ・モデルの作成者は編集を継続し、新しいバージョンを作業中(未公開)としてアップロードし続けている間も、モデルの承認済バージョンを公開済の構成に配置することができます。

メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーは単一の構成に制限されるため、すべての場合においてメタデータ・エクスプローラ UI には 1 つのバージョンのモデルのみが表示されます。

コンテンツや構成のバージョンの表示/非表示

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. [アプリケーション・ヘッダー](#)で「Tools」→「Preferences」と移動します。
3. チェック・ボックスを使用して、バージョンを表示または非表示にします。

モデルへの新バージョンの追加

モデルに新しいバージョンを追加するとは、単にモデルを[収集](#)するか、または再度[アップロード](#)することです。

インポート・ログのレビュー

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. ログ・メッセージを表示するモデルを右クリックして、「View Log」を選択します。
3. モデルは複数回インポートできるので、問題のインポートの具体的な日付と時刻のログを選択して、「View Log」をクリックします。

あるバージョンのコンテンツの公開

4. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
5. [公開済](#)の構成を開きます。
6. [「Repository」パネルがコンテンツ・バージョンを表示するようにフィルタリングされている](#)ことを確認します。
7. 公開するコンテンツを、[「Repository」パネル](#)から[公開済](#)の構成にドラッグ・アンド・ドロップします。
8. これで、メタデータ・エクスプローラ UI にサインインすると、コンテンツが表示されるようになります。

構成の管理

構成とはきわめて重要な概念です。それは系統分析、検索、バージョン管理など、多くの操作のスコープのことです。これにより、それがなければ情報過多(リポジトリ内のものすべて)になりかねないものが、分析や操作の対象とするメタデータの構成によって、適切に管理されます。構成という名前は「バージョンと構成の管理」の概念に由来し、そこでは構成は、特定のバージョンの複数のモデルが関連付けられたものです。

有効な構成は、モデル・バージョン、マッピング・バージョン、用語集およびスティッチングのコレクションです。モデル・バージョンは、Oracle Metadata Management (OMM)に収集されたデータ・ストアおよびデータ・プロセスに関連しています。

構成は、次のいずれの形態もとります。

- リポジトリ・ワークスペース - テクニカル・スコープ、または同じアクセス権スコープのビジネス・エリアとして一緒に分析されるリポジトリ・オブジェクトのコレクション(検索、参照、レポート、など)。
- 企業アーキテクチャ - データ・フロー・スティッチングを介して一緒に接続される、データ・ストア・モデル(ODS、データ・ステージング領域、データ・ウェアハウス、データ・マートなど)やデータ・プロセス・モデル(ETL/DI と BI)のコレクション。
- 設計ワークフロー - 設計プロセスをモデル化するセマンティック・マッピングを介して一緒に接続された(意味的にスティッチングされた)、概念モデル、論理モデル、物理モデルのコレクション。

構成には、1つ以上の構成バージョンがあります。構成バージョンとはそれぞれ、リポジトリ・オブジェクトの、異なったバージョンのコレクションのことです。これにより、それぞれがリポジトリ・オブジェクトの様々なバージョンを含む、いくつかの構成バージョンを定義できます。その結果、次を実行する場合があります:

- 過去のある時点でデプロイされたモデルの以前のバージョンを含む構成バージョンを使用した履歴の分析
- 将来にデプロイされる可能性があるモデルの以前のバージョンを含む構成バージョンを使用した What-If 分析。

構成バージョンを公開したり、またはメタデータ・エクスプローラ UI のユーザーが利用ができるようにしたりできます。つまり、構成を使用することにより、Oracle Metadata Management (OMM) の管理者は極度に複雑なリポジトリ内であっても、ビジネス・ユーザーに表示される内容や、すべてのユーザーの検索および分析方法について完全性と正確性を確保できます。

Oracle Metadata Management (OMM) では、Configuration Manager という UI 内でこの管理が行われます。このツールには、リポジトリ・オブジェクトの構成を作成するための、ドラッグ・アンド・ドロップ・ベースの視覚的インターフェースが備わっています。次の操作が可能です。

- 構成の数を定義
- 様々なユーザーの集合(グループによる)に対して構成を公開
- 構成を非公開化、一部公開またはすべて公開

これにより、誰に対してどのようなときに何が表示されるかを、際限なく微調整できます。

新しい構成の作成

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 構成を配置するフォルダを 「Repository」パネル で右クリックし、「New」→「Configuration」を選択します。

構成へのグループの割当て

グループを特定の構成に割り当てることができます。これにより、そのグループに関連付けられたすべてのユーザーに対し、その構成のみが含まれたメタデータ・エクスプローラ UI が表示されます。

構成の公開

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 実行済でなければ次の操作を行います。
 - 新しい構成を作成します。
3. 「Repository」パネル で構成を右クリックし、「Publish」を選択します。
4. その構成にグループを割り当てます。

任意の構成へのコンテンツの公開

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 実行済でなければ次の操作を行います。
 - 新しい構成を作成します。
 - その構成にグループを割り当てます。
 - 「Repository」パネル で構成を右クリックし、「Publish」を選択します。
3. 構成を開きます。

4. 公開するコンテンツを、[「Repository」パネル](#)から構成にドラッグ・アンド・ドロップします。
5. これで、前述のようにグループが割り当てられたユーザーとしてメタデータ・エクスプローラ UI にサインインすると、コンテンツが表示されるようになります。

構成構造の管理

構成に含まれるコンテンツは、構成フォルダ内に整理できます。この整理構造は、コンテンツを参照する際、メタデータ・エクスプローラ UI に反映されます。

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 構造を定義または更新する構成を開きます。
3. フォルダを追加するには構成エディタの[「Add」](#)アクションを、削除するには[「Delete」](#)アクションを使用します。
4. コンテンツをフォルダまたはルートにドラッグ・アンド・ドロップして再編成します。

データ・フロー・マッピングのためのモデルのスティッ칭

一部の外部メタデータ・モデルには、データ移動ソース仕様とデータ移動ルールが含まれることがあります。これらは、Oracle Metadata Management (OMM)にインポートされます。多くの場合、これらのデータ移動ソース仕様は、別にインポートされた他の外部メタデータ・モデルと一致させることができます。続いてそのようなデータ移動仕様モデルを構成に追加して、その2番目のモデルと「スティッチング」することができます。この場合、データ移動仕様により、1つのモデルはもう片方で定義されているソースの完全な表現となります。

このためには次の操作を行います。

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. これらのスティッチング済のモデルを含める構成を開きます。
3. これらのデータ移動ルールを含んでいるモデルを構成にドラッグします。
4. 最初のモデル(データ移動ルールを含んでいる方)のデータ・ソース仕様と同じデータ・ストアを完全に定義している構成に、別のモデルをドラッグします。
5. 最初のモデル(データ移動ルールを含んでいる方)を右クリックし、[「Edit Connections」](#)を選択します。
6. [「Edit Connections」](#) ダイアログで、各データ移動ソース仕様を、そのソースを表現しているか、またはそれに一致するモデル(この場合は2番目のモデル)に関連付けます。
7. 「OK」をクリックします。
8. 「Validate」アクションをクリックします。

これら2つの(またはそれ以上の数の)モデル間の[データ・フロー系統](#)についてレポートすることができます。

構成アーキテクチャの参照

構成内のリポジトリ・オブジェクトの間でされたスティッチング関係は、データ・フローとセマンティック・ベースのアーキテクチャ・ダイアグラムを作成して視覚化できます。構成マネージャを使用して、これらのダイアグラムのレイアウトを編集したり、注釈を付けたりできます。

構成によって定義されたアーキテクチャの上位レベル構成の概要を取得するには、次のようにして[アーキテクチャ・ダイアグラム](#)を表示します。

1. これらのスティッチング済のリポジトリ・オブジェクトを含める構成を開きます。
2. 「**Architecture Diagram**」タブを選択します。

ここでは、次の操作が可能です。

- オブジェクトをクリックして、そのプロパティを[「Properties」パネル](#)に表示します。
- 任意の結果を右クリックして、[標準モデル・popupアップ・メニュー](#)から選択。
- [標準的なグラフィカル・ナビゲーション・ツールバー](#)を利用
- [この結果へのブックマークまたはリンクを作成。](#)
- 表示されているダイアグラムの[コンテンツ内で特定のオブジェクトを検索。](#)
- 要素を右クリックするか、「**Actions**」(アイコンを選択して、その他のオプションを表示。
- 「**Edit**」アクションをクリックして、[ダイアグラムを編集。](#)

構成アーキテクチャ・ダイアグラムの編集

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. これらのスティッチング済のリポジトリ・オブジェクトを含める構成を開きます。
3. 「**Architecture Diagram**」タブを選択します。
4. 「**Edit**」アクションをクリックします。

ここでは、次の操作が可能です。

- 要素をクリックして、そのプロパティを[「Properties」パネル](#)で表示。
- ダイアグラム内の新しい位置への要素のドラッグ。「**Subject Areas**」要素を右クリックして、サブジェクト・エリアを追加します。
- 「**Annotation**」(アイコンをクリックして、ダイアグラムの注釈を作成および編集。
- 「**Layout**」(アイコンをクリックして、ダイアグラムを自動的にレイアウト。これはブラウザをリフレッシュしないかぎり元に戻せないため、このセッション内のすべての変更が失われます。

自動更新のための構成の設定

構成は、新しいコンテンツ・バージョンの自動更新(公開)のために定義できます。これにより、モデルの新しいバージョンが外部メタデータ・ツールを使用して収集される(たとえばスケジュールに基づいて)、またはアップロードされるたびに、モデルのその新しいバージョンが、公開済の構成のメンバーとして反映されます。

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 新しい構成を作成する場合
 - 新しい構成を作成します。
 - 「**Automatic Update**」 チェック・ボックスを選択します。
3. 既存の構成を更新する場合
 - 「Repository」 パネルで構成を右クリックし、「**Settings**」を選択します。
 - 「**Automatic Update**」 チェック・ボックスを選択します。

構成バージョンの管理

場合によっては、構成のバージョン履歴を維持する必要があります。たとえば、履歴分析を行うためにコンテンツ・バージョンの構成の履歴を保持する場合です。また、最新ではあるが未承認のバージョンのコンテンツを、新しい(しかし未公開の)バージョンの構成に配置することによって *What-If* 分析を実行する場合もあります。

コンテンツと同様に、これらの構成のバージョンは、リポジトリ内では個別のオブジェクトであり、特定の時点のコンテンツの構成を表します。

管理者は、任意の数の構成バージョンを管理できます。ただしデフォルトでは、メタデータ・マネージャ UI には 1 つのバージョンの構成のみが表示されます。メタデータ・マネージャ UI は、いつでも複数バージョンのユーザー・インターフェース・モードに変更できます。

さらに、ある構成のバージョンを公開済ステータスに設定すると、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーはそれを利用できるようになります。つまり、実際にはその構成の特定のバージョンを公開済バージョンとして指定することになります。これは、複数のコンテンツ・バージョンの正確なコレクションを公開できることを意味します。

いずれの場合も、メタデータ・エクスプローラ UI には公開済バージョンの構成のみが表示され、それが単に構成として表示されます。

あるバージョンのコンテンツの任意の構成バージョンへの公開

ある構成のバージョンを公開済ステータスに設定すると、メタデータ・エクスプローラ UI のユーザーはそれを利用できるようになります。つまり、実際にはその構成の特定のバージョンを公開済バージョンとして指定することになります。これは、複数のコンテンツ・バージョンの正確なコレクションを公開できることを意味します。

いずれの場合も、メタデータ・エクスプローラ UI には公開済バージョンの構成のみが表示され、それが単に構成として表示されます。

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」 パネルが コンテンツ・バージョンを表示するようにフィルタリングされていることを確認します。

3. 実行済でなければ次の操作を行います。
 - [新しい構成を作成します。](#)
 - [その構成にグループを割り当てます。](#)
 - [「Repository」パネル](#)で構成バージョンを右クリックし、「Publish」を選択します。
4. 作成できます。
5. 構成を開きます。
6. 公開するコンテンツを、[「Repository」パネル](#)から構成にドラッグ・アンド・ドロップします。
7. これで、前述のようにグループが割り当てられたユーザーとしてメタデータ・エクスプローラ UI にサインインすると、コンテンツが表示されるようになります。

Oracle Metadata Management (OMM)への外部メタデータの公開

モデルのアップロード(外部メタデータからの公開)

1. 外部メタデータ内のモデルを開きます(行った変更内容が保存されていることを確認してください)。
2. 「File」→「Portal」→「Publish」と移動します。
3. 各「Parameters」で、下部のパネルに表示されるツールチップに従い入力します。次に例を示します。
 - **Repository URL:** http://portalhostname:19980/MM/services
 - **User name:** Administrator ([管理者権限](#)を持つユーザーを選択していることを確認してください)
 - **Password:** password
 - **Repository content path:** <空>
 - **Publish to configuration:** True
 - **Repository configuration path:** <空>
 - **Attachment files:** <空>
 - **Wait for repository operation completion:** True

前述の例では、モデルはデフォルトの構成(「Published」)に含まれると同時に、public フォルダ内にも配置されます。

4. 「Finish」をクリックします。
5. ログ・ファイルを調べ、エラーが発生しなかったことを確認します。また、元のモデル・ファイル内のあらゆる警告の修正を検討し、再公開します。
6. 「OK」をクリックします。

これで、モデルが指定された構成にアップロードされ、公開されます。

ビジネス用語集によるデータ・ガバナンス

データ・ガバナンス

完全なデータ・アーキテクチャの開発および管理にはビジネス用語集が重要です。Oracle Metadata Management (OMM)には ISO 11179 ベースのビジネス用語集が備わっており、用語、データ定義、コード・セット、ドメイン、検証ルールといった、企業のビジネス用語集の取得、定義、維持および実装を行うことができます。さらに、セマンティック・マッピングでは、ソース・モデル(ビジネス用語集のように概念的)内の要素によって、どのようにターゲット・モデル(実装または表現に近い)内の要素が定義されるかについて記述されます。

ビジネス用語集は、ビジネス資産(たとえば用語)について、またそれらがどのようにデータ資産(たとえばデータベース表)や技術資産(たとえば ETL マッピング)と関連するかについて、すべてのステークホルダーの間で合意に達するのに役立ちます。ビジネス用語集は、IT 部署間で共同で論理的または物理的データ・エンティティおよび属性についてドキュメント化するのに使用できます。この場合でも、ビジネス資産と技術資産間の依存性のトレースが含まれます。

ビジネス用語集

Oracle Metadata Management (OMM)では、ビジネス用語集とは自己完結型のカテゴリのコレクションと、各カテゴリ内に含まれている用語サブカテゴリのことです。さらに、用語はデータ・モデルの表や列のように、リポジトリ全体でオブジェクトと意味的にマッピングできます。マッピング後は、ビジネス用語集、マッピングおよびマッピングされたオブジェクトを含んだ、あらゆる構成全体で、定義参照、用語セマンティック使用状況といったセマンティック系統トレースが可能になります。

ビジネス用語集の構築は、CSV ファイル形式を介した他のソースからのインポートによって十分にドキュメント化された既存データ・モデル内にドラッグするという単純な方法か、またはユーザー・インターフェースを介して直接か、あるいは他のデータ・ストア・モデル内のオブジェクトの分類中に移入によって行うことができます。一般には、そのような方法の組み合わせが使用されています。

ビジネス用語集が確実に正確で最新なものであり、アクセスを必要とするすべての人が利用でき、また、リポジトリ内のメタデータ全体と適切に統合されるようにするために、Oracle Metadata Management (OMM)には強力な一連のデータ・ガバナンスのツールおよび方法も装備されています。Oracle Metadata Management (OMM)のビジネス用語集には、かなり洗練性の高いものから単純なものまで、ニーズに応じて非常に柔軟に設定が可能なワークフローおよび公開プロセスが備わっています。さらに、それぞれ異なるワークフローおよび公開特性を持つ、任意の数のビジネス用語集を保持できます。

ビジネス用語集は系統に含めることができます。リポジトリ・パネル内に表示されます。ビジネス用語集を開くと、他の(収集可能な)モデル用のものとは別の UI が表示されます。

カテゴリ

ビジネス用語集はカテゴリに分類され、用語または他のカテゴリを含むことができます。用語は多種多様な方法でクロスリンクできます。それを行うには単に特定の用語を編集するだけです。

用語集のワークフロー

デフォルトでは、ビジネス用語集にはワークフロー要件は存在しません(承認プロセスも含まれない)。この単純な状態では、ビジネス用語集に行った変更はただちにシステム全体に反映されます。これは、複雑なワークフロー・プロセスを好まない組織の場合に非常に便利なモードです。また、まずビジネス用語集を構築し、それと関連するセマンティック・マッピングを移入する組織の場合にも便利です。

Oracle Metadata Management (OMM)には、非常に柔軟で、考えられるすべてのワークフローおよび公開プロセス式も備わっています。これらのプロセスをいったん選択した後は元に戻したり、変更したりできないため、選択する際は注意してください。

企業内で複数のユーザーが関与する正式な用語集の開発プロセスを設定する場合は、用語集のワークフローを有効にすることができます。そのワークフローは、用語の提案、レビュー、承認、公開および非公開に関する事前パッケージ済の一連の用語集アクティビティです。公開アクティビティのみを必要とする、承認にレビューを含めるまたは含めない、1人あるいは複数のユーザーが承認およびレビューを行う、というようにカスタマイズが可能な柔軟なプロセスです。

ワークフロー・ロール

管理者のセキュリティ・ロールを持つユーザーは、ワークフローを有効にし、次のワークフロー・ロールをカテゴリに割り当てることができます。

- エディタ
- レビューア
- 承認者
- パブリッシャ

ワークフロー・ロールはユーザーに割り当てられ、カテゴリ内のすべての用語に適用できます。カテゴリは親カテゴリからのすべてのユーザーとロールの割当てを継承し、また、追加のものを持つことができます。

スチュワード

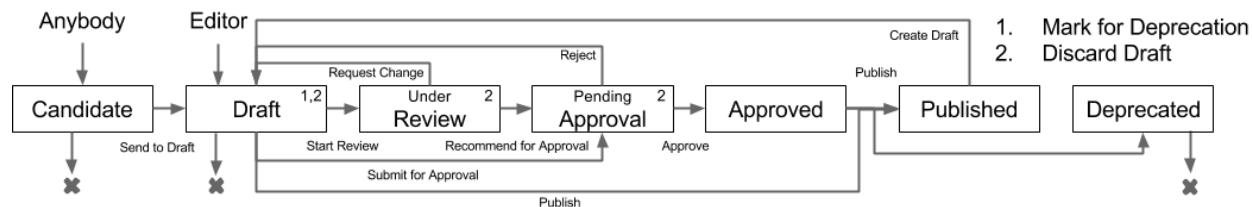
スチュワードは、特別の用語またはカテゴリ全体に関する質問の問合せ先として割り当てられるユーザーあるいはグループです。彼らにはスチュワードシップの割り当てに基づいた特別なワークフロー・ロールはありません。

メタデータ・マネージャのヘルプ

ワークフロー・プロセス・オプション

ワークフロー・プロセスは用語に適用されますが、カテゴリには適用されません。マネージャUIでカテゴリに対して行った変更はすべて、ただちにエクスプローラUIに表示(公開)されます。ワークフローが有効な場合、公開済の用語が含まれているカテゴリは削除できません。

考えられる最も完全なワークフローを次のダイアグラムに示します。



ワークフローは、用語集の作成時または作成後に有効にできます。有効になったワークフローを無効にすることはできません。

ワークフロー・アクション	ワークフロー・ロール			
	エディタ	レビューア	承認者	パブリッシャ
Propose Candidate	X	X	X	X
Create Draft	X			
Discard	X			
Start Review	X			
Mark for Deprecation	X			
Submit for Approval	X			
Send to Draft	X			
Recommend Approval		X		
Request Change		X		
Reject (Awaiting Approval)			X	
Approve			X	
Reject (Approved)				X
Publish				X
Publish (Deprecate)				X
Create, edit or remove attributes and relations	X	X	X	
Create comments	X	X	X	X
Edit or remove comments	X	X	X	
Create, edit or remove attachments	X		X	
Assign roles to users and groups			X	
Start/stop workflows and reassign tasks	X		X	

用語管理ダッシュボード

ワークフロー・ドリブンの検索基準を利用して、用語を効率的に整理し、特定の時期に必要なアクションを識別できます。これらには次のようなものがあります。

- Show all my candidate terms

- Show all my draft terms
- Show all terms under my review
- Show all terms pending my approval
- Show all term ready for me to publish

ワークフロー遷移ボタン

ワークフロー・プロセスのある時点で個別の用語を操作する際、可能なアクションを示すワークフロー遷移ボタンが表示されます。たとえば、用語が ドラフト・ステータスの場合のアクション・アイコンは、次のようなものになります。

- Start Review
- Submit for Approval
- Mark for Deprecation
- Discard

バージョン

ビジネス用語集は Oracle Metadata Management (OMM) でサポートされているコンテンツ・タイプの 1 つです。1 つのコンテンツとして、複数のバージョンを持つことができます。1 つバージョンの用語集、2 つ以上のバージョンの用語集など、異なるビジネス用語集のワークフロー方法を使用できます。たとえば、次のようなオプションがあります。

- Simple - 単一バージョン
- Dev vs. Prod - 開発バージョンと公開済バージョン
- Snapshots - 過去のバージョン

ビジネス用語集は系統に含めることができます。リポジトリ・パネル内に表示されます。ビジネス用語集を開くと、他の(収集可能な)モデル用のものとは別の UI が表示されます。

カテゴリ

ビジネス用語集はカテゴリに分類され、用語または他のカテゴリを含むことができます。カテゴリ化は次の場合に役立ちます。

- 内容または組織構造別にサブセット化
- スチュワードシップ割当ての管理(カテゴリ・レベルによる)

関係

用語は、次のような多種多様な関係タイプでクロスリンクできます。

- Synonyms
- See Also
- More General
- More Specific
- Contains
- Contained By
- Represents

- Represented By

それを行うには単に特定の用語を編集するだけです。

ビジネス用語集の表示と編集

ビジネス用語集を編集する手順:

1. ドキュメント化するビジネス用語集のエディタ・ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルを使用してビジネス用語集に移動します
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルのヘッダーにドラッグ。
4. ビジネス用語集エディタが表示されます。

ここでは、次の操作が可能です。

- 収集可能なモデルで利用できるすべてのアクションは、ここでビジネス用語集に対しても利用できる。
- 用語をクリックし、そのプロパティを「Properties」パネルに表示。ここでは多くのプロパティを編集することもできます。
- 任意の用語またはカテゴリを右クリックして「Open」を選択し、さらに表示および編集。
- 任意のカテゴリの横にある「Open Category」(拡張用の三角形)をクリックし、そのコンテンツを表示。
- 用語を他のカテゴリに移動。
- 任意の用語またはカテゴリ、「Delete」(ごみ箱)をクリックして、選択した用語およびカテゴリを削除。
- 用語をクリックし、その用語の「Trace Semantic Usage」を選択して、選択した用語のセマンティック使用状況レポートを生成。
- 用語をクリックし、その用語の「Assign Workflow Roles」を選択して、ユーザーおよびユーザーのグループにワークフロー内のロールを割り当てる。
- 用語またはカテゴリをクリックし、「Download Audit Log」を選択して、監査ログを生成。
- 用語またはカテゴリをクリックし、「Export to CSV File」を選択して、選択した要素のCSVを生成。
- 「Add」(+)アイコンをクリックして、用語またはカテゴリを追加。
- 「Edit」(+)アイコンをクリックしてバルク編集モードに変更し、スプレッドシートと同様、ビジネス用語集パネル内の各行を編集。列の追加および削除や、編集を容易にするためのソートはいつでも行うことができます。
- ビジネス用語集全体に適用される追加のアクション(ヘッダーの右端):

- 「Import from a CSV File」 (アイコンで、エクスポートと同じ形式で csv ファイルからインポート。
- 「Bookmark」 (アイコンで、この結果へのブックマークまたはリンクを作成)
- ワークフロー・ダッシュボード(ワークフロー・ドリブン検索基準)を選択するなど、ヘッダー内の検索ボックスを使用して、ビジネス用語集内の特定のオブジェクトを検索。
- 「Actions」 (アイコンを使用して、次に示す他のオプションを選択。
 - **Show in Repository** - 構成内でのこのモデルの特定の場所を表示
 - **Set Default** - これをビジネス用語集のデフォルト・バージョンに指定
 - **Edit Semantic Usage Mapping** - マッピング・エディタを使用して、ビジネス用語集と他のモデル間のセマンティック・マッピングを編集。

用語の検索

用語を検索する手順:

1. ドキュメント化するビジネス用語集のワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルを使用してビジネス用語集に移動します
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルヘッダーにドラッグ。
4. ビジネス用語集エディタが表示されます。
5. 検索基準にテキストを入力し、検索アイコンをクリックします。
6. 検索結果のリストが表示されます。ここでもバルク編集および複数編集機能を使用できます。

用語管理ダッシュボードの表示

検索機能の1つにワークフロー・ベースの検索基準(ダッシュボード)があります。それらは、ビジネス用語集にワークフロー・プロセスが指定されている場合にのみ表示されます(そして、その場合にのみ意味がある)。

1. ドキュメント化するビジネス用語集のワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルを使用してビジネス用語集に移動します
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。

- 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがある[ワークスペース・パネル](#)のヘッダーにドラッグ。
- 4. [ビジネス用語集エディタ](#)が表示されます。
- 5. 検索基準の横のプルダウンを使用し、ダッシュボードの1つをクリックします。
 - Show all my candidate terms
 - Show all my draft terms
 - Show all terms under my review
 - Show all terms pending my approval
 - Show all term ready for me to publish

割り当てられている[ワークフロー・ロール](#)によっては、項目を有効化できるものとできないものがあります。

セマンティック使用状況のトレース

ビジネス用語集内の特定の用語に意味的にマッピングされているすべてのデータ要素を表示する系統レポートを生成できます。

1. ビジネス用語集を開きます。
2. レポートのコンテキストに指定する適切な場所(用語)に移動します。
3. いずれかを選択。
 - 右クリックして「Trace Semantic Usage」を選択
 - 用語を開き、「Trace Semantic Usage」を選択。

用語の追加

1. ドキュメント化するビジネス用語集のエディタ・ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルを使用してビジネス用語集に移動します。
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがある[ワークスペース・パネル](#)のヘッダーにドラッグ。
4. [ビジネス用語集エディタ](#)が表示されます。
5. 「Add」(+)アイコンをクリックして、用語またはカテゴリのいずれを追加するかに応じて用語またはカテゴリを選択します。
 - ビジネス用語集内の用語を編集します
 - カテゴリの場合は、[Properties](#)パネルの名前を単に指定するだけです。

注意: ビジネス用語集に[ワークフロー・プロセス](#)が定義されている場合は、用語は候補用語となり、ドラフトで作業することになります。

用語の編集

1. ドキュメント化するビジネス用語集のエディタ・ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルを使用してビジネス用語集に移動します。
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「**Repository**」パネルでモデルを右クリックし、「**Open**」を選択。
 - 「**Repository**」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「**Repository**」パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルのヘッダーにドラッグ。
4. ビジネス用語集エディタが表示されます。
5. いずれかの操作が可能です。
 - 用語に移動し、その用語を選択して開く
 - 用語を検索し、その用語を選択して開く
 - 用語のリストまたは検索結果でバルク編集を使用する
6. 用語に移動すると、次の操作を行うことができます。
 - リンク・タイプの横の「**Add**」(+)アイコンをクリックしてリンク付きの用語を追加。
 - 「**Add**」(+)アイコンをクリックしてノートを追加。
 - プルダウンをクリックし、特定の定義済のカスタム属性を選択してカスタム属性を追加。

注意: ビジネス用語集にワークフロー・プロセスが定義されている場合、編集プロセスを開始するには、かわりに **Create Draft** アクション・ボタンを使用する必要があります。

ワークフロー・ロールの割当て

管理者のセキュリティ・ロールを持つユーザーは、ワークフローを有効にし、次のワークフロー・ロールをカテゴリに割り当てることができます。

- エディタ
- レビューア
- 承認者
- パブリッシャ

ワークフロー・ロールはユーザーに割り当てられ、カテゴリ内のすべての用語に適用できます。カテゴリは親カテゴリからのすべてのユーザーとロールの割当てを継承し、また、追加のものを持つことができます。

ワークフロー・プロセスは用語に適用されますが、カテゴリには適用されません。マネージャUIでカテゴリに対して行った変更はすべて、ただちにエクスプローラ UIに表示(公開)されます。ワークフローが有効な場合、公開済の用語が含まれているカテゴリは削除できません。

ワークフローは、用語集の作成時または作成後に有効にできます。有効になったワークフローを無効にすることはできません。

メタデータ・マネージャのヘルプ

1. ドキュメント化するビジネス用語集の承認者ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「[Repository](#)」パネルを使用してビジネス用語集に移動します。
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「[Repository](#)」パネルでモデルを右クリックし、「[Open](#)」を選択。
 - 「[Repository](#)」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「[Repository](#)」パネルにあるモデルを、タブがある[ワークスペース・パネル](#)のヘッダーにドラッグ。
4. [ビジネス用語集エディタ](#)が表示されます。
5. ワークフロー・ロールを割り当てるカテゴリに移動します。
6. カテゴリを右クリックして、「Assign Workflow Roles」を選択します。

ワークフロー・アクション	ワークフロー・ロール			
	レビューア	エディタ	承認者	パブリッシャ
Create, edit or remove an asset		X	X	
Create, edit or remove attributes and relations	X	X	X	
Create, edit or remove comments	X	X	X	
Create, edit or remove comments/attachments		X	X	
Assign roles to users and groups			X	
Start/stop workflows and reassign tasks		X	X	
Publish an asset				X

エディタ・ワークフロー・ロール

エディタは、承認プロセスを通じて用語の作成、修正およびシェバードを行います。エディタは、ファイルから用語を用語集にインポートしたり、手動でそれらを作成したりできます。これらの用語はドラフト・ステータスで始まります。ワークフローにより、あらゆる用語集のユーザーが用語を提案できるようになります。提案された用語は候補ステータスで始まります。用語が提案されたカテゴリのエディタは、その用語をドラフトにプロモートするか、または削除することによって承認できます。用語を作成したユーザーは、候補であるかぎり、編集および削除することができます。

承認アクティビティが無効な場合、エディタはその用語のワークフロー全体で完全に責任を負います。この場合、エディタはパブリッシャの責任も持ち、エディタが準備完了であると判断したときに用語を公開できます。

レビューア・ワークフロー・ロール

レビューアは開発中のアセットについて評価およびコメントを行う内容領域専門家(SME)です。レビューアは、レビューおよびコメントをするために自分に割り当てられたアセットをリストし、個別に承認または却下します。レビューアには、アセットごとに [Comment](#)、[Recommend for Approval](#) および [Request Change](#) ボタンが表示されます。ボタンを押すことにより、ユーザーはコメントを使用して決定を説明できます。

管理者は、必要な数の推奨に達すると承認アクティビティに自動的に進むように、レビュー・アクティビティを構成できます。自動進行は、数値を 0 に設定することによって無効にできます。この場合、エディタがレビュー結果を集計し、適切であればアセットを承認のために発行します。

Request Change アクションはアセットをドラフトに戻します。エディタは、要求された変更を実装するか、または詳細を提供し、再レビューのためにアセットを再発行します。レビューは反復的なアクティビティです。

承認者ワークフロー・ロール

承認者は、新規アセットあるいは公開済のアセットへの変更の却下または承認を行う説明責任を持つ意思決定者です。**Approve** アクションはアセットを承認済ステータスに進めます。

Reject アクションはアセットをドラフト・ステータスに戻します。

承認アクティビティは、デフォルトではワークフロー・プロセスの一部です。管理者は、「Allow approval of terms」を「No」に設定して無効にしたり、必要な承認者の数を指定したり、必要な数の推奨に達すると承認アクティビティに自動的に進むように承認アクティビティを有効および構成したりできます。自動進行は、数値を 0 に設定することによって無効にできます。この場合、エディタがレビュー結果を集計し、適切であればアセットを承認のために発行します。

パブリッシャ・ワークフロー・ロール

パブリッシャは、新規アセットあるいは公開済のアセットへの変更の却下または承認を行う説明責任を持つ意思決定者です。Oracle Metadata Management (OMM)には、マネージャとエクスプローラの 2 つの UI があります。マネージャ UI はリポジトリ開発環境です。エクスプローラ UI は、ビジネス・ユーザーによるリポジトリ・コンテンツのレビュー用に設計されています。マネージャ UI を使用して、用語集オブジェクトを新規作成したり、既存の用語集オブジェクトを編集したりできます。エクスプローラ UI で、ビジネス・ユーザーに未完の用語集の変更が表示されないようにする場合、ワークフローを有効にすることができます。常にワークフローには公開が含まれます。

ワークフローが有効な場合、様々な用語集オブジェクトに複数の変更を行い、すべての変更や、一連の変更を一度に公開したりできます。ワークフローが無効な場合、マネージャ UI で行った変更はすべて、ただちにエクスプローラ UI に表示されます。属性(説明など)を編集したり、関係(含む、など)を追加または削除したりしてオブジェクトを変更できます。ワークフローがマネージャ UI で有効な場合、すべての未公開の変更が特別に表示されます(黄色っぽい背景色など)。これにより、公開済と未公開のバージョンの属性および関係間の差異を確認できます(ポップアップ・ダイアログまたはインラインで差異を表示するボタンなど)。

ワークフローが有効な場合、マネージャ UI には用語の公開ステータスが表示されます。属性の値はアプリケーションにより自動的に設定されます。新しい用語は未公開です。承認アク

ティビティが有効な場合、パブリッシャのみが承認済の用語を公開できます。管理者は、承認されたら自動的に用語を公開するようにワークフローを構成できます。

スチュワードの割当て

1. ドキュメント化するビジネス用語集のエディタ・ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」 パネルを使用してビジネス用語集に移動します。
3. 表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」 パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」 パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」 パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルのヘッダーにドラッグ。
4. ビジネス用語集エディタが表示されます。
5. いずれかの操作が可能です。
 - 用語に移動し、それを選択して開く
 - 用語を検索し、それを選択して開く
 - 用語のリストまたは検索結果でバルク編集および複数編集を使用する。
6. 参照()アイコンをクリックして、ユーザーをスチュワードとして選択します。

スチュワードに選択可能として識別されたユーザーか、またはスチュワードに選択可能として識別されたユーザー・グループのメンバーであるユーザーのいずれかのみ、プルダウン・リストから選択できることに注意してください。

用語のステータスの設定

用語のステータスは編集では設定できません。かわりに、次の状況に応じて表示されるワークフロー遷移ボタンを使用します。

- 特定のビジネス用語集で有効なワークフロー・プロセス
- 編集中の用語集のステータス。

注意: ビジネス用語集にワークフロー・プロセスが定義されていない場合は、用語は常に公開済ステータスとなり、それを設定する必要はありません。

用語のステータスをリスト

カテゴリ・コンテンツのリストか、検索結果としてのいずれかから複数の用語のステータスを設定できます。いずれかの操作が可能です。

- 列ヘッダーをクリックし、表示する列にステータスを含め、その列でソート
- 「More Search Options」をクリックし、検索フィルタでステータスを選択。

スチュワード割当て別に用語をリスト

カテゴリ・コンテンツのリストか、検索結果としてのいずれかから複数の用語のスチュワードを設定できます。いずれかの操作が可能です。

- 列ヘッダーをクリックし、表示する列にスチュワードを含め、その列でソート
- 「More Search Options」をクリックし、検索フィルタでスチュワードを選択。

バルク編集

カテゴリ内で用語を参照する、または検索結果を参照する際、バルク編集機能を使用できます。

- 「Edit」(アイコン)をクリックしてバルク編集モードに変更し、スプレッドシートと同様、ビジネス用語集パネル内の各行を編集。列の追加および削除や、編集を容易にするためのソートはいつでも行うことができます。
- バルク編集モードを終了し、通常のビジネス用語集編集動作に戻るには、「Edit」(アイコン)を再度クリックします。

複数編集

バルク編集モードの場合、複数の用語を同時に編集することもできます。

- 「Edit」(アイコン)をクリックし、バルク編集モードに切り替えます。
- 次を使用して、複数の行を選択します。
 - 左側のチェック・ボックス
 - すべてを選択する場合はリストの上にあるチェック・ボックス
 - [Shift]キーを押しながらクリック、および[Ctrl]キーを押しながらクリック

用語を他のモデルのオブジェクトにマッピング(分類)

- ドキュメント化するビジネス用語集のエディタ・ワークフロー・ロールが割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
- 「Repository」パネルを使用してマッピングに直接移動できます
- もしくは、次のいずれかの操作によって、表示または編集する(あるいはその両方)ビジネス用語集を開くことができます。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルのヘッダーにドラッグ。続いて、「Edit Semantic Usage Mapping」を選択し、マッピングを選択します。
- 次に、マッピング・エディタが表示されます。
- ここから、マッピング・エディタを使用してマッピングされた用語はそれぞれ、その用語の分類となり、その用語から他のモデル内の要素へのセマンティック系が提供されます。

ビジネス用語集で定義された属性の拡張

ビジネス用語集は拡張性がかなり高く、用語およびカテゴリに任意の数の追加属性を定義できます。

1. ドキュメント化するビジネス用語集のメタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. Repository パネルを使用してビジネス用語集に移動します。
3. ビジネス用語集を開くには、次の方法があります。
 - 「Repository」パネルでモデルを右クリックし、「Open」を選択。
 - 「Repository」パネルでモデルをダブルクリック。
 - 「Repository」パネルにあるモデルを、タブがあるワークスペース・パネルのヘッダーにドラッグ。
4. 「Attribute Manager」タブをクリックします。
5. 「Add」(+)アイコンをクリックし、次の操作を行います
 - 属性の**名前**を入力。
 - 新しい属性を用語か、カテゴリのいずれかに追加するかにより、**用語またはカテゴリ**を選択。
 - 次のように属性の**データ型**を指定。
 - **String**: 任意のテキスト
 - **Date**: 日付フィールド
 - **Enumeration**: 可能な値のリスト。その下に指定
 - この属性を最初に割り当てる**デフォルト値**。
 - 「Add」をクリックします。

ビジネス用語集の作成

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. ビジネス用語集を配置するフォルダを「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Business Glossary」を選択します。
3. 「Create Business Glossary」ダイアログで、「Properties」タブを選択します。
4. ビジネス用語集の「Name」と「Description」を入力します。
5. ビジネス用語集のワークフロー・プロセスを指定できます。
6. 「Create」をクリックします。
7. ビジネス用語集が自動的に開きます。

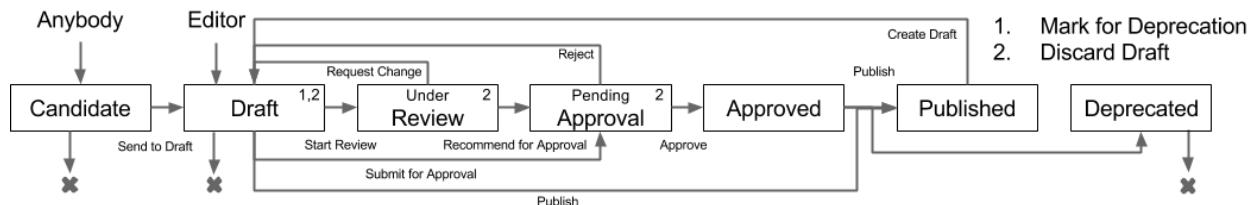
ビジネス用語集のワークフロー・プロセスの指定

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. ビジネス用語集を配置するフォルダを「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Business Glossary」を選択します。
3. 「Business Glossary」ダイアログで、「Workflow」タブを選択します。

メタデータ・マネージャのヘルプ[®]

4. 指定するワークフロー・エントリを選択します。
5. 「Save」をクリックします。

考えられる最も完全なワークフローを次のダイアグラムに示します。



モデルからのビジネス用語集の移入(ブートストラップ)

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 移入するビジネス用語集を開きます。
3. [「Repository」パネル](#)からビジネス用語集へモデルをドロップします。
4. 移入されるすべての用語を割り当てる [「Term Status」](#) (ライフサイクル内)を指定します(元のモデルから作成)。
5. ビジネス用語集で、移入された用語がすべて作成される [「Create a new Category」](#) するか、しないかを選択します。
6. その用語と元のモデル内のオブジェクトとの間でセマンティック系統がトレースできるように、ビジネス用語集と元のモデル(移入されたすべての用語の派生元)間について [「Create a semantic mapping」](#) を選択するか、しないか、いずれかを指定します。
7. セマンティック・マッピングの [「Name」](#) を入力します。
8. [「Import」](#) をクリックします。
9. 続いて [「Log Messages」](#) ダイアログが表示され、インポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。
10. 「Import Successful」という結果が表示されたら、[「Yes」](#) をクリックしてモデルを開きます。 「Import Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じてソース・モデル・ファイルを修正します。
11. これで [ビジネス用語集を編集](#)できるようになりました。

CSVファイルへのビジネス用語集のエクスポート

1. 編集するビジネス用語集を開きます。
2. エクスポートする適切なサブセット(カテゴリ)に移動します。
3. [「Actions」](#) (≡)アイコンをクリックして、[「Export to CSV」](#) を選択します。
4. CSV 形式のファイルがローカルにダウンロードされます。

CSVファイルからのビジネス用語集のインポート

事前定義済の CSV ファイル形式を使用して、ビジネス用語集をブートストラップ(既存のビジネス用語集タイプ・システムからインポート)できます。このサンプルは、アプリケーション・

サーバーのインストール・フォルダに含まれています(<installation-folder>\conf\Glossary\GlossaryImportSample.csv)

1. 編集するビジネス用語集を開きます。
2. インポート先のコンテキストに指定する適切な場所(カテゴリ)に移動します。
3. 「More」アクションをクリックして、「Import」を選択します。
4. ローカルに保存されている CSV 形式のファイルを選択します。
5. このファイルの形式を確認するには、単に既存のビジネス用語集のサブセットを Excel にエクスポートします。

サンプルの CSV ファイルには形式に関する説明文が含まれています。

ログの生成と監査

ビジネス用語集の任意のレベルで、アクティビティに関するログを生成し、監査できます。

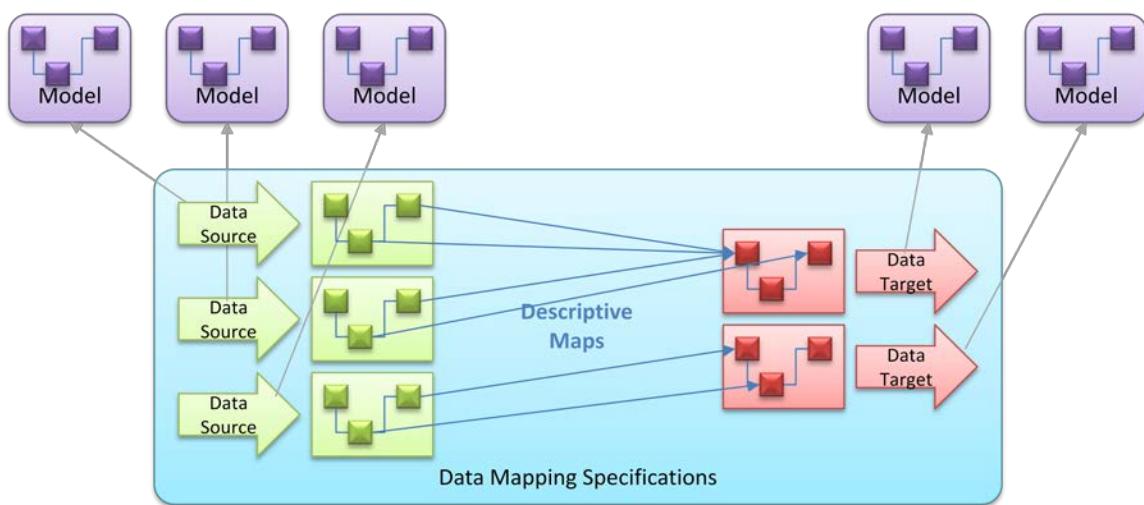
4. ビジネス用語集を開きます。
5. レポートのコンテキストに指定する適切な場所(カテゴリまたは用語)に移動します。
6. 右クリックして「Download Audit Log」を選択します。

データ・フロー系統および影響分析のためのデータ・マッピング仕様

一部のデータ・フロー・プロセスは、メタデータ・インポート/エクスポート・ツール・スイートの一部として提供されるプリッジを使用して収集できません。言うまでもなく、これらのプロセスが Oracle Metadata Management (OMM)でモデル化されていない場合、系統および影響分析の答えにギャップが発生し、システムの物理的アーキテクチャの完全な全体像が得られなくなります。

これらのギャップに対処し、正しい系統および影響分析が得られるようにするため、Oracle Metadata Management (OMM)には、データ・マッピング仕様の編集と管理のためのツールセットが用意されています。データ・マッピング仕様とは、本質的には単に、いくつかのソース・モデルからのデータがターゲット・モデルの要素内に「流れる」仕組みに関する高度な論理的(または観念的)定義です。これらのマッピングは単純な Web ベースのドラッグ・アンド・ドロップ形式のマッピング仕様エディタを使用して指定され、説明テキストを使用して定義されており、演算エディタを使用して擬似演算を定義することもできます。

データ・マッピング仕様は、ソースおよびターゲットのデータ・ストア間の論理マッピングを定義する Oracle Metadata Management (OMM)の範囲内でコンテンツを形成します。このダイアグラムに示すように、データ・ストア自体はモデル・コンテンツとして、Oracle Metadata Management (OMM)内に独立してモデル化されますが、データ・マッピング仕様の外部に存在します。



データ・ストアの各モデル・コンテンツは、ソース、ターゲット、またはソースとターゲットの両方として参照されます。データ・ソースのオブジェクト(たとえば、スキーマ、表または列)をデータ・ターゲットのオブジェクト上にドラッグ・アンド・ドロップして、マップを作成できます。これらのマップは、説明またはより明示的な演算を使用してドキュメント化できます。

データ・マッピング仕様の作成

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. マッピングを配置するフォルダを[「Repository」パネル](#)で右クリックし、「New」→「Data Mapping Specifications」(タイプは任意)を選択します。
3. 「Create Mapping」ダイアログで、「Properties」タブを選択します。
4. マッピングの「Name」と「Description」を入力します。
5. 「Create」をクリックします。
6. マッピングのソースをマッピング・ワークスペース内の[「Source」](#)にドラッグします。
7. マッピングのターゲットをマッピング・ワークスペース内の[「Destination」](#)にドラッグします。
8. これで[マッピングを編集](#)できるようになりました。

データ・マッピング仕様の編集

1. 編集するマッピングの[メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つメタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「configuration」パネルを使用してマッピングに直接移動します([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」](#)を参照)。
3. 「Mapping Editor」タブをクリックします。

- マッピングを作成するには、左のパネルのソース要素と右の要素のターゲット要素に移動し、左の要素を右の要素の上にドラッグします。

マッピングが定義されると、次のことが可能になります。

- 「Destination」パネルの下にある [「Mapping Details」パネル](#) で、マップの説明、演算およびステータスを編集。次の操作が可能です。
 - 「Source/Operation」テキスト・ボックスの横にある [「Edit」アクション](#) をクリックして、次のように式を編集。
 - テキスト・ボックスに **「Source」** 要素をドラッグして演算に含める
 - 任意の演算テキストを入力
 - 「Source」** 要素を **「Description」** テキスト・ボックスにドラッグして **ビジネス名を説明** に含め、任意のテキストを入力。
- マップの **ステータス** の更新または設定。
- マップを選択して [「Remove Map」ボタン](#) をクリックして、任意の **「Source」** 要素マッピングを削除。

「Source」パネルと「Destination」パネルの両方で、次の操作が可能です。

- [ナビゲーション用の矢印](#)を使用して、参照した要素の履歴を前後に移動。
- [ブレッドクラムのブル・ダウン](#)で、移動先のレベルを選択。
- 次の両方を使用した要素の検索
 - ビジネス用語集の検索**
 - 現在の場所の検索**
- 次のみを表示するように、表示される要素の **フィルタリング**:
 - Show Mapped**
 - Show UnMapped**
 - Show InScope Objects**
 - Show out of Scope Objects**
- Show in Repository** - 選択したソース・モデルまたはターゲット・モデルのこのバージョンの場所を [「Repository」パネル](#) に表示。
- Include/Exclude** - [データ・マッピング仕様スコープ](#) 内で選択された要素を含めるまたは除外する。
- Set Default** - 開かれているバージョンのマッピングをデフォルトに設定

「Destination」パネルでは、次の操作が可能です。

- マップの **ステータス** の更新または設定。
- ブックマークおよび電子メールを作成する、またはマップへのリンクを取得。
- ソートの基準となる「Destination」列と、ソートする順序を選択して、マップのソート基準を定義。

「Source」パネルでは、次の操作が可能です。

- 「Source」パネルを複数の参照パネルに **分割** し、複数の分類子を参照および選択。
- 任意のレベルの列を右クリックして、**メタデータ・ブラウザで表示**。

構成へのデータ・マッピング仕様の追加

系統を視覚化するためには、データ・マッピング仕様を構成に含める必要があります。

1. [メタデータ・マネージャ UI 権限](#)を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. マッピングを配置する [「Repository」パネル](#) で構成を開きます。
3. [「Repository」パネル](#) でマッピングを構成にドラッグします。
4. 表示されるダイアログで、任意のソースまたはターゲット・モデルを含めます。
5. これで通常どおり [構成を管理](#)できるようになりました。

データ・マッピング仕様の作業のスコープとステータス

通常、マッピングのタスクを定義する際、まずマッピング作業のスコープを定義することが重要です。一般に、このスコープとは単に、マッピング結果に含めるソース要素とターゲット要素を指定したものです。

次に、作業の進捗として進捗状況を追跡します。ドキュメント化に適切な情報を収集し、マッピング定義(および場合により演算も)すべてを認証するには、時間がかかることがあります。このため、各マッピングのステータスを追跡し、これに関してレポートを生成します。

データ・マッピング仕様のスコープの設定

1. 特定のデータ・マッピング仕様コンテンツを参照して、開きます。
2. [「Target」パネル](#) で、特定の列に移動します。
3. 要素を右クリックして、[「Exclude」](#) または [「Include」](#) を選択します。
 - 注意: [Ctrl]キーや[Shift]キーを押しながらクリックする、複数選択アクションを使用して、要素のグループを一度に含めたり、除外したりできます。

データ・マッピング仕様のスコープによるフィルタリング

1. 特定のデータ・マッピング仕様コンテンツを参照して、開きます。
2. [「Source」](#) または [「Target」パネル](#) で、[「Filter」](#) (アイコン)をクリックして、[「Show Out of Scope Objects」](#) の選択を解除します。

データ・マッピング仕様でのマッピングのステータス設定

1. 特定のデータ・マッピング仕様コンテンツを参照して、開きます。
2. [「Target」パネル](#) で、特定の列に移動します。
3. [「More actions」](#) (アイコン)をクリックするか、要素を右クリックして [「Status」](#) → 割り当てるステータスの順に選択します(次を参照)。
 - [In Progress](#)
 - [Completed](#)
 - [Approved](#)

データ・マッピング仕様のステータスによるフィルタリング

1. 特定のデータ・マッピング仕様コンテンツを参照して、開きます。
2. [「Source」](#) または [「Target」パネル](#) で、[「Filter」](#) (アイコン)をクリックして、フィルタで非表示または表示する特定のステータスを選択解除または選択します。

データ・マッピング仕様のレビュー・ステータス

- 特定のデータ・マッピング仕様コンテンツを参照して、開きます。
- 「Target」パネルで、特定の列に移動します。
- 「More actions」(≡)アイコンをクリックして、「View Column Status」を選択するか、要素をクリックして、「View Column Status」ボタンを選択します。

セマンティック系統と定義のセマンティック・マッピング

モデル・マッパーは、Oracle Metadata Management (OMM)のモデル間のセマンティックな(意味的な)関係またはデータ・フロー関係のいずれかを定義するために使用できます。マッピング・エディタおよびマッピング・リポータで構成されています。

一般に、セマンティック・マッピングは、ソース・モデル内(より概念的)の要素によって、ターゲット・モデル内(より実装または表現に近い)の要素がどのように定義されるかについて記述したものです。言い換えると、ターゲット・モデル内の要素は、関連付けられているソース・モデル内の要素の表現または実装です。

セマンティック・マッピングは、リポジトリ内の2つのコンテンツの関係です。1つ以上のマッピング要素から構成されていて、1つのターゲット要素と1つ以上のソース要素の間で定義される関係です。記述情報は、マッピング要素に関連付けることができます。

セマンティック・マッピングの構成には、次の3つの主なユース・ケースがあります。

セマンティック・マッピングの3つのユース・ケースを説明します。

- データの標準化とコンプライアンス:
このケースでは、外部標準データ・モデル(たとえば、ヘルスケア HL7 標準データ・モデル)から、物理的データ・ストア(ライブ・データベースにより収集)および企業データ・モデル(データ・モデリング・ツールから収集)へのセマンティック・リンクを定義
- 概念的なものから論理的、および次に示すいくつかのサブ・ケースを持つ物理的データ・モデルまで、セマンティックな関係の複数レベル・モデリング。
 - オブジェクト・モデルからデータ・モデルへ
UML オブジェクト・モデル(オブジェクト・モデリングまたはコード開発ツールから収集)から IDEF1X データ・モデル(データ・モデリング・ツールから収集)へのセマンティック・リンク
 - 複数ベンダーのデータ・モデル間
概念的データ・モデル(データ・モデリング・ツールから収集)から論理的データ・モデル(別ベンダーのデータ・モデリング・ツールから収集)へのセマンティック・リンク。
 - データ・モデルから、ライブ・データベースから収集される実際のデータベース実装へ
- ビジネス用語集の用語分類:
この場合は、ビジネス用語集から別のモデルへのセマンティック・マッピングを介して、ビジネス用語集内の用語を分類しています。この場合のターゲット・モデルは、任意の

データ・モデリングの単一または複数モデルおよびビジネス・インテリジェンス・レポート・モデル(利用可能なプリッジでサポートされる場合)になります。

セマンティック・マッピングの作成:

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. マッピングを配置するフォルダを「Repository」パネルで右クリックし、「New」→「Mapping」(タイプは任意)を選択します。
3. 「Create Mapping」ダイアログで、「Properties」タブを選択します。
4. マッピングの「Name」と「Description」を入力します。
5. 「Create」をクリックします。
6. マッピングのソースをマッピング・ワークスペース内の「Source」にドラッグします。
7. マッピングのターゲットをマッピング・ワークスペース内の「Destination」にドラッグします。
8. これでマッピングを編集できるようになりました。

ビジネス用語集から BI レポートへのセマンティック・マッピングを定義した後は(これらのプリッジが有効な場合)、「Glossary」タブを使用してメタデータ・エクスプローラ UI でセマンティック・マッピングの更新も可能であることに注意してください。詳細は、メタデータ・エクスプローラ UI のヘルプ・ドキュメントを参照してください。

セマンティック・マッピングの編集

1. 編集するマッピングのメタデータ・マネージャ UI 権限を持つメタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「configuration」パネルを使用してマッピングに直接移動します(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
3. 「Mapping Editor」タブをクリックします。
4. マッピングを作成するには、左のパネルのソース要素と右の要素のターゲット要素に移動し、左の要素を右の要素の上にドラッグします。

マッピングが定義されると、次のことが可能になります。

- 「Description」または「Operation」(あるいはその両方)のテキスト・ボックスを使用したマッピングのドキュмент化
- 「Delete Map」()アイコンのクリックによる、定義済マッピング要素の削除。

ソース・パネルとターゲット・パネルのいずれかで、次の操作が可能です。

- 「Next」および「Previous」(> <)アイコンを使用して移動
- 次の両方を使用した要素の検索
 - ビジネス用語集の検索
 - 現在の場所の検索

- 次のみを表示するように、表示される要素の**フィルタリング**:
 - **Show All**
 - **Show Mapped Only**
 - **Show UnMapped Only**
- 任意のレベルの要素(たとえば、表)の選択および**すべてのマップの削除**。

マップ全体に対しては次の操作が可能です。

- **Show in Configuration** - 構成内でのこのマッピングの特定の場所を表示
- **Set Default** - 開かれているバージョンのマッピングをデフォルトに設定。

ビジネス用語集から BI レポートへのセマンティック・マッピングを定義した後は(これらのブリッジが有効な場合)、「Glossary」タブを使用してメタデータ・エクスプローラ UI でセマンティック・マッピングの更新も可能であることに注意してください。詳細は、メタデータ・エクスプローラ UI のヘルプ・ドキュメントを参照してください。

構成へのセマンティック・マッピングの追加

系統を視覚化するためには、セマンティック・マッピングを構成に含める必要があります。

6. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
7. マッピングを配置する「Repository」パネルで構成を開きます。
8. 「Repository」パネルでマッピングを構成にドラッグします。
9. 表示されるダイアログで、任意のソースまたはターゲット・モデルを含めます。
10. これで通常どおり構成を管理できるようになりました。

マッピング・エディタの一般的な機能

これらは、セマンティック・マッピングとデータ・マッピング仕様の両方に適用される一般的な機能です。

マッピングに関するレポート

1. 編集するマッピングのメタデータ・マネージャ UI 権限を持つメタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「configuration」パネルを使用してマッピングに直接移動します(「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント」を参照)。
3. 「Mapping Reporter」タブをクリックします。

ここでは、次の操作が可能です。

- 任意の要素をクリックして**プロパティ**を表示
- 列の追加または削除とソート
- ソース名またはターゲット名をクリックして、そのコンテンツを開く。

マップ全体に対しては次の操作が可能です。

- **Show in Configuration** - 構成内でのこのマッピングの特定の場所を表示
- **Set Default** - 開かれているバージョンのマッピングをデフォルトに設定。

構成へのマッピングの追加

1. メタデータ・マネージャ UI 権限を持つユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. マッピングを配置する 「Repository」パネルで構成を開きます。
3. 「Repository」パネルでマッピングを構成にドラッグします。
4. 表示されるダイアログで、任意のソースまたはターゲット・モデルを含めます。
5. これで通常どおり構成を管理できるようになりました。

Excelへのマッピングのエクスポート

データ・マッピング仕様またはデータ・マッピング・デザインを Microsoft Excel スプレッドシート形式にエクスポートできます。プロセスは、どちらのデータ・マッピング・オブジェクトでも同じです。

9. 特定のデータ・マッピング・コンテンツを参照して、開きます。
10. 「More actions」(≡)アイコンをクリックします。
11. 「Export to Excel」を選択します。
12. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、エクスポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。
13. 「Operation Successful」という結果が表示されたら、「Close」をクリックして Excel スプレッドシートを開きます。「Operation Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じて問題を修正します。
14. これで、Microsoft Excel でデータ・マッピングを開くことができるようになりました。

Excelからのマッピングのインポート

データ・マッピング仕様またはデータ・マッピング・デザインを Microsoft Excel スプレッドシート形式からインポートできます。プロセスは、どちらのデータ・マッピング・オブジェクトでも同じです。

1. 特定のデータ・マッピング・コンテンツを参照して開くか、または新しく作成します。
2. 「More actions」(≡)アイコンをクリックします。
3. 「Export to Excel」を選択します。
4. 続いて「Log Messages」ダイアログが表示され、エクスポート処理が進行するに従い、ログ・メッセージが表示されます。
5. 「Operation Successful」という結果が表示されたら、「Close」をクリックして Excel スプレッドシートを開きます。「Operation Failed」という結果が表示されたら、ログ・メッセージを調べ、それに応じて問題を修正します。
6. これで、Microsoft Excel でデータ・マッピングを開くことができるようになりました。

ビジネス用語集からのセマンティック・マッピングの場合の特別な機能

ビジネス用語集はリポジトリで作成されるオブジェクト、つまり Oracle Metadata Management (OMM)内で編集および維持されるので、ビジネス用語集から別のモデルにマッピングする際、右側のパネル(ターゲット)から左側のパネル(ビジネス用語集のソース)にドラッグすることにより、ビジネス用語集内に新しい用語を作成するとともに、セマンティック・マッピングを作成できます。

1. 編集するマッピングのメタデータ・マネージャ UI 権限を持つメタデータ・エクスプローラ UI ユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「**configuration**」パネルを使用してマッピングに直接移動します([「メタデータ・エクスプローラ UI ユーザー・インターフェース・コンポーネント](#)」を参照)。
3. [「Mapping Editor」](#) タブをクリックします。
4. 新しい用語および対応するマッピングを作成する手順:
 - ソース内の新しい用語または左側パネルの要素のコンテキスト(ビジネス用語集内のカテゴリ)に移動
 - 用語作成の基礎として使用する右側パネル内のターゲット要素に移動
 - 右側の要素を左側のパネルにドラッグ

管理

ユーザー・グループの管理

システムの各ユーザーには、1つ以上グループが割り当てられます。割り当てられるグループごとに、ユーザー・インターフェースの関連付け(メタデータ・マネージャ UI またはメタデータ・エクスプローラ UI)と、割り当てられるセキュリティ・ロール(ビューア、エディタあるいはマネージャ)が制御されます。セキュリティ・ロールは、Oracle Metadata Management (OMM)内のオブジェクトに対して付与される権限タイプと関連付けられます。

Oracle Metadata Management (OMM)の基本的な構成には1つのグループが定義されていますが、これは削除できません。

- 管理者** - このグループを割り当てられたユーザーにはすべてのセキュリティ・ロールが付与され、メタデータ・マネージャ UI またはメタデータ・エクスプローラ UI を使用できます。

管理者グループに割り当てられたユーザーは、ユーザー・インターフェース割当てとアクセス・セキュリティ・ロール割当てが異なる、任意の数のグループを作成できます。

注意: すべてのセキュリティ・ロール関連の操作は、ユーザーとユーザー・グループの両方で使用できます。

Oracle Metadata Management (OMM)には、2つのタイプのセキュリティ・ロールがあります。

- セキュリティ・ロールはユーザーおよびグループに割り当てられ、フォルダやコンテンツのようなリポジトリ・オブジェクトに適用できます。
- 一般に、ワークフロー・ロールは特定のコンテンツ・タイプおよびワークフローに適用されます(詳細は、ワークフロー・プロセス([ビジネス用語集のワークフロー](#)など)を参照)。

セキュリティ・ロールの割当てとそれによって付与される権限を次の表に示します。

オブジェクト・タイプ別の権限	その権限を持つセキュリティ・ロール		
	ビューア	エディタ	マネージャ
フォルダ			
表示	X		
説明など、フォルダ・プロパティの編集		X	
子フォルダおよびコンテンツの作成、削除および移動			X
任意のコンテンツ			
表示	X		
コメントおよびラベルの追加	X		

説明など、コンテンツ・プロパティの編集		X	
インポート・モデルなど、子バージョンの作成および削除		X	X
バージョン・プロパティの編集		X	
デフォルト・バージョンの設定			X
アーカイブ			X
セキュリティ・ロール割当ての管理			X
収集可能なコンテンツ			
インポート・パラメータの構成		X	
新しいバージョンのインポート		X	
トリガーおよびスケジュールの構成			X
ビジネス用語集のコンテンツ			
ビジネス用語集の編集		X	
ワークフローの有効化および無効化			X
ワークフロー・ロールの割当て			X
ドキュメント化可能なデータ・モデル			
ビジネス用語集の割当ておよびネーミング規則の構成		X	
ビジネス用語集の用語を使用したドキュメント化		X	
セマンティック・マッピングの編集		X	
データおよびセマンティック・マッピング			
マッピング内でのモデルの追加、削除および置換		X	
マップの追加、削除および編集(演算や説明など)		X	
マッピング・ステータスの設定			X
構成			
コンテンツの追加、削除および置換と接続の編集		X	
バージョンの公開			X

新しいグループの作成

- 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
- 「Tools」→「Administration」と移動します。
- 「Groups」タブを選択します。
- ヘッダーで「Add」アクションをクリックします。
- 「Name」と「Description」を入力します。
- 「Steward」を選択し、可能なスチュワードのリストにこのグループのメンバーを含めます。
- 「Use Metadata Explorer」を選択し、このグループのすべてのメンバーをメタデータ・エクスプローラ UI に割り当てます。
- 「Default Configuration」検索ボックスから[公開済の構成](#)を選択します。

メタデータ・マネージャのヘルプ

リポジトリ・オブジェクトへのセキュリティ・ロールの割当て

Oracle Metadata Management (OMM)では、子オブジェクトに任意のセキュリティ・ロールを割り当てるには、その親に対して少なくともビューア・セキュリティ・ロールを持っていなければなりません。このため、グループに対して完全にアクセス不可能なリポジトリ部分を作成するには、[「Repository」パネル](#)のルートで新しいフォルダを作成し、そこに特別なビューア・セキュリティ・ロール割当て権限を割り当てる必要があります。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. セキュリティ・ロール割当てを割り当てるコンテンツ、構成またはフォルダに移動します。
3. 「**Security**」タブに移動します。
4. セキュリティ・ロール割当てをグループ別に割り当てます(次の表を参照)。

注意: 構成に設定するセキュリティ・ロールは、そのコンテンツではなく、構成に適用されます。このため、グループまたはユーザーをその構成のエディタ・セキュリティ・ロールに割り当てるとき、たとえばモデルをその構成に追加することは可能になりますが、その構成内に含まれるモデルを編集する権限は必ずしも付与されるわけではありません。

かわりに、構成内の各モデルにも独自のセキュリティ・ロール割当てを付与できます。このため、含まれているモデルのプロパティを編集できるようにするには、そのユーザーまたはグループにエディタ・セキュリティ・ロールを割り当てる必要があります。これは、セキュリティ・ロール割当てから構成自体まで別に、構成内の各モデルのエディタまたはマネージャを誰にするか制御できるため、非常に強力な機能です。

また、セキュリティ・ロール割当ては構成を通じて継承されないのに対し、セキュリティ・ロール割当ては Oracle Metadata Management (OMM)の実際のフォルダ構造を通じて継承されます。このため、親フォルダ(たとえば「public」)のエディタ・セキュリティ・ロールにグループまたはユーザーを割り当てる場合、フォルダ内のすべてのコンテンツおよびフォルダもこれらのセキュリティ・ロール割当てに含まれます。

セキュリティ・ロールの割当てとそれによって付与される権限を次の表に示します。

オブジェクト・タイプ別の権限	その権限を持つセキュリティ・ロール		
	ビューア	エディタ	マネージャ
フォルダ			
表示	X		
説明など、フォルダ・プロパティの編集		X	
子フォルダおよびコンテンツの作成、削除および移動			X

任意のコンテンツ			
表示	X		
コメントおよびラベルの追加	X		
説明など、コンテンツ・プロパティの編集		X	
インポート・モデルなど、子バージョンの作成および削除		X	X
バージョン・プロパティの編集		X	
デフォルト・バージョンの設定			X
アーカイブ			X
セキュリティ・ロール割当ての管理			X
収集可能なコンテンツ			
インポート・パラメータの構成		X	
新しいバージョンのインポート		X	
トリガーおよびスケジュールの構成			X
ビジネス用語集のコンテンツ			
ビジネス用語集の編集		X	
ワークフローの有効化および無効化			X
ワークフロー・セキュリティ・ロールの割当て			X
ドキュメント化可能なデータ・モデル			
ビジネス用語集の割当ておよびネーミング規則の構成		X	
ビジネス用語集の用語を使用したドキュメント化		X	
セマンティック・マッピングの編集		X	
データおよびセマンティック・マッピング			
マッピング内でのモデルの追加、削除および置換		X	
マップの追加、削除および編集(演算や説明など)		X	
マッピング・ステータスの設定			X
構成			
コンテンツの追加、削除および置換と接続の編集		X	
バージョンの公開			X

グループ・レポートのダウンロード

- 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
- 「Tools」→「Administration」と移動します。
- 「Groups」タブを選択します。
- ヘッダーで「Download」アクションをクリックします。

ユーザー認証ログイン・モード

ネイティブ/LDAP認証モード

このモードでは、ネイティブ(ローカル)またはLDAP認証ユーザーのいずれかとしてユーザーを定義できます。ログイン時に、ユーザー名がネイティブ・ユーザーと関連付けられている場

合、システムはネイティブ認証(ローカル・パスワードに基づいて)でそのユーザーを認証します。そうでない場合、システムは LDAP 認証でユーザー名の認証を試みます(LDAP 接続の構成が必要)。

LDAP 接続が有効である場合、**LDAP** ボタンが黄色で強調表示されます。

LDAP 接続の構成

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「Users」タブを選択します。
4. ヘッダーで「LDAP」アクションをクリックします。
5. 次を事項を入力します。
 - LDAP システムの**タイプ**(たとえば、デフォルトでは「Microsoft Active Directory」)
 - **URL**(たとえば、`ldap://MyLdapServer`)
 - 必要な LDAP ユーザーおよびグループの問合せが可能な権限を持つユーザーの**名前**(および対応する**パスワード**)。

さらに、「Advanced」ボタンを使用して、LDAP ユーザー属性(ログイン・ユーザー名、氏名、電子メール、説明など)が適切な LDAP 属性で自動的に移入される方法をカスタマイズできます(たとえば、Microsoft Active Directory ではデフォルトでログインに sAMAccountName を使用)。

LDAP 認証は、LDAP の **URL** を削除することで無効にできます(**LDAP** アイコンは灰色)。そのような場合、ネイティブ認証のみが有効です。

新しいネイティブ・ユーザーの作成

ネイティブ・ユーザーは、管理者によって手動で作成または更新されます。ネイティブ・ユーザーは、作成時にパスワードが定義される必要があります。ネイティブ・ユーザーは LDAP ユーザーと共に存できます。これは、管理者、サポート、コンサルタントなどの一時ログインを作成する際に便利な場合があります。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「User」タブを選択します。
4. ヘッダーにある「Add」アクションを使用します。
5. このユーザーに、一意のユーザー名を指定します。
6. ユーザーのログイン用パスワードを指定します。
7. 他のユーザー識別情報を指定します。
8. ユーザーにグループを割り当てます。

ユーザーの削除

任意のユーザーを削除できます。ただし、LDAP ユーザーと外部認証ユーザーは、そのユーザーがサインインして、再度正しく認証されると再度作成されます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」 と移動します。
3. 「User」 タブを選択します。
4. リストからユーザーを選択します。
5. ヘッダーにある 「Delete」 アクションを使用します。

新しい LDAP ユーザーの作成

手動で LDAP ユーザーを作成する必要はありません。そのかわり、LDAP 認証ログインが成功すると、その結果として LDAP ユーザーが自動的に作成または更新されます。このため、必要なのは、ユーザーとパスワードの組合せが [LDAP 認証接続定義](#) と問合せルールに対して有効であることだけです。

LDAP ユーザー属性(ログイン、フルネーム、電子メール、説明など)は、選択した LDAP 属性(たとえば、Microsoft Active Directory 上でのログインでは、sAMAccountName がデフォルトで使用される)に、自動的にマッピングされます。さらに、[「Advanced LDAP connection」ボタン](#)を使用して、このマッピングを変更できます。

外部認証モード

外部 SSO 環境をサポートする Oracle Metadata Management (OMM) の構成には、システム管理者と連携する必要があります。このモードでは、システムのデフォルトのログイン・ページは無効化され、表示されません。外部認証ログイン・システムで置換する必要があります。

外部認証モードでも、管理者はいつでも 専用の管理者レスキー用ログイン URL (<http://localhost/MM/Admin>) を使用してログインできます。

詳細は、『Readme』を参照してください。

外部認証ユーザーの追加

外部認証ユーザーは、外部認証ログインが成功すると、自動的に作成または更新されます。それらは、認証システムによって提供されるルールに基づいて割り当てられるグループです(デフォルトでは [ゲスト・グループ](#))。

手動で、追加のグループ割当てを指定できます([「ユーザーへのグループの割当て」](#)を参照)。

ユーザー・レポートのダウンロード

ユーザーに関する完全なレポートをダウンロードできます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」 と移動します。
3. 「Users」 タブを選択します。

4. ヘッダーで「Download」アクションをクリックします。

ユーザー統計のレビュー

詳細なユーザー・セッション統計をダウンロードできます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「User」タブを選択します。
4. リストからユーザーを選択します。
5. 下部のパネルで、「Show Statistics」をクリックします。
6. 統計が表示される期間を変更するには、ヘッダーの「Statistics For:」コントロールを使用します。

ユーザー・グループの割当て

ユーザーには、[ユーザー・グループの管理](#)で定義されるように、1つ以上のグループを割り当てるすることができます。割り当てられるグループごとに、ユーザー・インターフェースの関連付け(メタデータ・マネージャ UI またはメタデータ・エクスプローラ UI)と、割り当てられるセキュリティ・ロール(ビューア、エディタあるいはマネージャ)が制御されます。

ネイティブ・グループ割当て

ネイティブ・グループ割当てでは、すべてのネイティブ・ユーザーに適用されます。LDAP ドリブンのグループ割当てが無効の場合(デフォルト)、LDAP ユーザーにも適用できます。この場合、LDAP ユーザーがログインしたときのグループの割当て方法を指定せずに、LDAP 認証を設定している[LDAP 接続を構成](#)できます。このため、ユーザーは LDAP を使用して認証され、これらのユーザーはどのグループにも割り当てられません。

これらのいずれの場合も、グループ割当ては次のようにして行います。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「User」タブを選択します。
4. [新しいユーザーを作成](#)します(実行済の場合を除く)。
5. [新しいグループを作成](#)します(実行済の場合を除く)。
6. 選択したグループをユーザーに割り当てます。

管理ユーザーの定義

管理ユーザーとは、管理者グループを割り当てられた人たちのことです。管理ユーザーを作成する手順:

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。

2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「User」タブを選択します。
4. 新しいユーザーを作成します(実行済の場合を除く)。
5. ユーザーに管理者グループを割り当てます。

LDAP ドリブンのグループ割当て

LDAP 構成ウィンドウの 2 番目のタブは、LDAP ドリブンのグループ割当てのためのものです。この場合、グループ割当ては、事前定義された LDAP グループまたは LDAP 問合せに関連付けられます。LDAP の専門家でない人が必要なグループ割当てを取得または構築するのを助ける 2 つの便利な機能があります。

1. LDAP グループ・データ入力を使用すると、LDAP 環境で定義されたグループを検索し、そのようなグループ用の正確な LDAP 問合せを取得できます。これは、グループ割当てで、事前定義された大規模なビジネス・ユーザー・グループの使用を計画している場合に非常に便利です。
2. LDAP 検索フィルタ・データ入力を使用すると、LDAP ベースのユーザーの仮想グループを作成するための適切な問合せを自動的に構築できます。これは、プロジェクト用に小規模な管理者グループまたは一時的なグループを作成する場合に非常に便利です。

LDAP ドリブンのグループ割当てを定義する問合せを作成する手順:

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「User」タブを選択します。
4. ヘッダーにある認証タイプのプル・ダウンで「LDAP Authentication」を選択します。
5. ヘッダーで「LDAP」をクリックします。
6. 「Group Assignment」タブをクリックします。
7. 「Add」(+)アイコンをクリックします。
8. 次の情報を入力します。
 - a. 問合せの**名前**を入力
 - b. 問合せで、ユーザーと関連付けるグループを定義
 - c. グループ名によってグループを割り当てる手順:
 - i. 「Group」エントリで「Browse」(🔍)アイコンをクリック
 - ii. LDAP システムでグループ名を入力するか、テキストを検索
 - iii. そのグループの「Distinguished Name」を選択
 - d. 検索フィルタを指定して個々のユーザーを含める手順:
 - i. 検索ルートを次のように指定:
CN=company,CN=Users,DC=company,DC=local
 - ii. 「Search Filter」エントリの「Browse」(🔍)アイコンをクリックして、そのフィルタでユーザーを選択。

- e. 別の方法として、検索フィルタを指定して個々のユーザーを除外する手順:
 - i. **検索ルート**を次のように指定:
`CN=company,CN=Users,DC=company,DC=local`
 - ii. 次の構文を使用:
`(&(!sAMAccountName=username1))(!sAMAccountName=username))`
9. 「OK」をクリックします。

グループ割当てのために最初の LDAP 問合せを作成すると、すべての LDAP ユーザーに対し、ネイティブの(手動で管理される)グループ割当てから LDAP ドリブン(自動)のグループ割当てに切り替わることに注意してください。どの LDAP ユーザーも、次のログイン時には以前のネイティブのグループ割当てをすべて失うことになります。

同様に、グループ割当てのための最後の LDAP 問合せを削除すると、LDAP ドリブン(自動)のグループ割当てからネイティブの(手動で管理される)グループ割当てに切り替わります。これにより、すべての LDAP ユーザーは、そのユーザーにより多くのグループが手動で付与されるまで、「ゲスト」グループにのみ関連付けられるようになります。

外部グループ割当て

外部グループ割当てでは、次の操作が可能です。

- 特定のユーザーとしてログインして Oracle Metadata Management (OMM) でそのユーザーを確立し、[手動でグループを割り当てる](#)
- 外部のシングル・サインオン・システムから Oracle Metadata Management (OMM) にグループ割当てを渡す。

複数グループ割当て

1人のユーザーに対し、任意の数のグループを割り当てることができます。これにより、次のことことが可能になります。

- ユーザーは、これらのグループで提供されるすべてのセキュリティ・ロール割当ての結合を持つ
- ユーザーに割り当てられているグループのいずれかが[メタデータ・エクスプローラ UI に制限](#)されるように定義されている場合は、次のことが可能
 - ユーザーの初回サインイン時には常にメタデータ・エクスプローラ UI が表示され、割り当てられているグループがアクセス可能なすべての構成の結合から構成を選択。
 - この時点または後続のサインイン時にデフォルトの構成を定義。
 - 「Browse」→「Configuration」→「Change Configuration」に移動して、任意の時点で構成を変更。
 - ユーザーに割り当てられている少なくとも 1 つのグループがメタデータ・エクスプローラ UI に制限されていない場合、いつでもメタデータ・エクスプローラ UI の右上のメニューを使用してメタデータ・マネージャ UI に移動。
- ユーザーに割り当てられているグループのいずれも[メタデータ・エクスプローラ UI に制限](#)されるように定義されていない場合は、次のことが可能

- ユーザーの初回サインイン時には常にメタデータ・マネージャ UI を表示。
- [「Administrative Tools」メニュー](#)を使用していつでもメタデータ・エクスプローラ UI に移動。
- ユーザーに割り当てられているグループのいずれか 1 つが管理者である場合、ユーザーの初回サインイン時には常にメタデータ・マネージャ UI を表示。

グループ割当ての考慮事項

一般的に、適切なグループ割当てを行うために[ネイティブまたは LDAP](#)か、[外部認証](#)のいずれを使用するかはこれらの認証モードには依存しません。これは、これらのシステムは他の証明機関で管理され、一般に、ユーザーのグループ化によりグループ割当てが論理的にマッピングされるようには維持されないからです。

かわりに、単にデフォルトのグループ割当てを使用し、どのユーザーでも、初回のログイン時または作成時には[ゲスト](#)・グループがデフォルトで付与されるようにするのが一般的です。デフォルトでは、[ゲスト](#)・グループは公開済の構成に割り当てられます。これにより、メタデータ・エクスプローラ UI および制御されたデフォルトの構成に基づいて、新規ユーザー用のデフォルトの表示を制御します。

ユーザーの真のグループと責任が識別された後は、適切なグループがそのユーザーに割り当てられます。[複数グループ割当て](#)に関する考慮事項に注意してください。

同時ユーザーの管理

Oracle Metadata Management (OMM) ライセンスには、名前付きと浮動の両方の同時ユーザーのライセンスを含めることができます。たとえば、ライセンスで 10 人の名前付きユーザーと 5 人の浮動ユーザーが提供されている場合、最大 10 人のユーザーを名前付きユーザーとして設定でき、そのユーザーはいつでもログインできます。残りのユーザーは浮動ユーザーとみなされ、5 人のみが同時にサインオンできます。

利用可能なユーザー数の決定

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「License」タブを選択します。

名前付きユーザーの割当て

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM) にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Users」タブを選択します。
4. リストでユーザーをクリックします。
5. 「Named User」チェック・ボックスを選択します。
6. 「Save」をクリックします。

同時(浮動)ユーザーの割当て

ユーザーが名前付きユーザーとして定義されている場合:

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「Users」タブを選択します。
4. リストでユーザーをクリックします。
5. 「Named User」チェック・ボックスの選択を解除します。
6. 「Save」をクリックします。

明示的に名前が付けられていないユーザーはすべて、浮動ユーザーとみなされることに注意してください。

ユーザー非アクティブ・ログアウト期間の設定

システムは、特定の時間の経過後、ユーザーを自動的にログアウトします。この期間は分単位で測定され、次のようにしてメタデータ・マネージャ UI から制御できます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「Users」タブを選択します。
4. ログアウト前の非アクティブ時間の分数をクリックします(15、30、45、60 または 90)。

ユーザー統計とサーバー監査ログ

すべてのユーザー・ログイン、ログイン試行(拒否されたもの)およびオブジェクト作成、更新、削除の各アクションは、サーバー監査ログに記録されます。このログを CSV ファイルにダウンロードする手順:

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Repository」パネルで、レポート対象にするリポジトリ・レベル・オブジェクト(たとえば、リポジトリ全体、フォルダまたはモデル)を右クリックします。
3. 「More」 → 「Download Audit Log」を選択します。

システム・ログのレビュー

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「Log」タブを選択します。

スケジュール済タスクの管理

モデルの自動収集をスケジュールすることができます。この管理機能を使用することにより、管理者ユーザーはこれらのスケジュールを集中管理できます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Schedules」タブを選択します。

ユーザー定義属性の管理

リポジトリをカスタマイズしてユーザー定義プロパティ(UDP または属性)を追加し、特定のオブジェクト・タイプ(たとえば、フォルダ、コンテンツまたは構成)と関連付けることができます。

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Attributes」タブを選択します。

新しいUDPの追加

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Attributes」タブを選択します。
4. ヘッダーで「Add」アクションをクリックします。
5. 「Properties」パネルで、表示される UDP の名前を指定します。
6. UDP を割り当てるオブジェクト・タイプを選択します。
7. UDP のデータ・タイプを選択します。
8. オプションで、UDP の値が明示的に割り当てられていないすべてのオブジェクトに対して、「Properties」パネルで表示されるデフォルト値を指定します。

UDPの削除

1. 管理者グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Attributes」タブを選択します。
4. 削除する UDP を選択します。
5. ヘッダーで「Add」アクションをクリックします。

UDPの値の更新

1. UDP の値を更新するオブジェクトに対する更新権限を持つユーザーとして、リポジトリにサインインします。
2. 「Repository」パネルでオブジェクトを選択します
3. 「Properties」パネルで、UDP 値をクリックします。
4. UDP の値を入力します。

5. 編集ボックスを離れると、値が自動的にコミットされます。
6. [「Properties」パネル](#)の下部にある編集ボックスで、長い UDP(説明など)を編集できます。

ライセンスの管理

1. **管理者**グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Licenses」タブを選択します。
4. ここでは、**新しいライセンス**をアップロードしたり、新しいライセンスを要求する場合に、必要な**ライセンス情報をダウンロード**したりできます。

データベースの管理

共通のデータベース管理タスクの多くはメタデータ・マネージャ UI から実行でき、データベース・サーバーに直接接続する必要はありません。

1. **管理者**グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Licenses」タブを選択します。

データベース・メンテナンスの実行

1. **管理者**グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Licenses」タブを選択します。
4. 「Run Maintenance」ボタンをクリックします。

データベース・キャッシュのクリア

一部のリポジトリ・オブジェクトは、高速検索のためにキャッシュされます。キャッシュをクリアして、次回アクセスしたときにリポジトリがこれらのオブジェクトをデータベースから読み込むようにすることができます。

1. **管理者**グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。
2. 「Tools」→「Administration」と移動します。
3. 「Licenses」タブを選択します。
4. 「Clear Cache」ボタンをクリックします。
5. クリアするキャッシュを選択します。

パフォーマンス・スクリプトの実行

1. **管理者**グループに割り当てられているユーザーとして、Oracle Metadata Management (OMM)にサインインします。

2. 「Tools」 → 「Administration」と移動します。
3. 「Licenses」タブを選択します。

DBの構成

サーバーのインストールを参照してください。

システムのバックアップ

リポジトリのコンテンツを定期的にバックアップすることを強くお薦めします。Oracle Metadata Management (OMM)のバックアップでは、バックアップ対象としてデータベースとモデル・キャッシュの両方があります。分析のためのメタデータの表示に使用されるリポジトリのすべてのコンテンツは、完全にデータベース内に格納されるのに対し、収集された内容のキャッシュ(エクスポート時、または収集されたモデルからの用語集の移入時に使用)、および**増分収集**のサポートのために維持される情報は、アプリケーション・サーバー・マシン上のProgramData フォルダ内に保持されます。定期的なバックアップの一環として、そのフォルダのコンテンツをバックアップしてください。

インストール

インストールと構成の詳細は、『ReadMe』文書を参照してください。

HostInfoファイルとライセンス

ライセンスを要求する場合、サーバー・マシンに対して生成され HostInfo.xml ファイルが必要です。それは、Oracle Metadata Management (OMM)のインストール後、インストール・ディレクトリのルートにできます。

トラブルシューティング

一般的なトラブルシューティング手順

UIのトラブルシューティング手順

UIで予期しないことが発生した場合は、次の手順を実行してください。

1. サーバー・マシン上で Oracle Metadata Management (OMM)サービスを停止し、「**スタート**」→「**すべてのプログラム**」→「**Meta Integration**」→「**Server Restart**」を選択して、Oracle Metadata Management (OMM)をデスクトップ・アプリケーションとして実行します。
2. 使用中の Web ブラウザのすべてのインスタンスを閉じます。
3. ブラウザと Adobe Flash が最新のパッチまで更新されていることを確認します。
4. ブラウザのインスタンスを開きます。
5. Web ブラウザで、キャッシュと最近の履歴をクリアします。
6. Web ブラウザのすべてのインスタンスを閉じます。
7. ブラウザを開き、Oracle Metadata Management (OMM)に再接続します。

ブリッジのトラブルシューティング手順

モデルをインポート(あるいは、ERwin 経由でアップロード)中に予期しないことが発生した場合は、次の手順を実行してください。

1. ブリッジ全般および各ブリッジ・パラメータのツール・チップ(ヘルプ)を参照し、ブリッジが正しく使用されていることを確認します。
2. インポート(またはエクスポート)ログを開き、「**Show: All**」を選択していることを確認します。続いて、ログ・メッセージで指定されている変更をすべて実行します。
3. サーバー・マシン上で Oracle Metadata Management (OMM)サービスを停止し、「**スタート**」→「**すべてのプログラム**」→「**Meta Integration**」→「**Server Restart**」を選択して、Oracle Metadata Management (OMM)をデスクトップ・アプリケーションとして実行します。この手順で問題が解決したら、『[Oracle Metadata Management \(OMM\) Readme](#)』を参照し、次のステップに従っていることを確認します。
 - a. 5.1 項「バンドルされている Tomcat を使用する Windows でのデフォルト・インストール」のステップ 3
 - b. 6 項「MIMB (メタデータ収集)」のすべてのステップ
4. 次の場所にある、アプリケーション・サーバー・マシン上のインポート・キャッシュ・ディレクトリをクリアします。
C:\ProgramData\Meta Integration\data\MIMB\cache
5. システム・プリファレンスを「Print Debug Log Messages」に変更し、再度ブリッジを実行して、ログ・メッセージをレビューします。

構成のトラブルシューティング手順

何か予期しない事態が発生し、前述のいずれの方法でも問題を解決できなかつた場合:

1. システム管理スタッフに、[『ReadMe』](#) のインストールと構成の手順、特にアプリケーション・サーバーとソフトウェアのインストールとテストに関する項を確認するよう要請します。

レポートの問題

バックアップの作成

報告された問題をサポート・スタッフが再現できるように、Oracle Metadata Management (OMM) の関連部分を必ずバックアップしてください。一般的に、問題が発生した 1つ以上のモデルが含まれている構成のバックアップを作成することが最良です。

バックアップを作成する手順:

1. バックアップ・スコープに含まれているモデルと構成のすべてに対して完全なアクセス権があるユーザーとして、リポジトリにサインインします。
2. [「Repository」パネル](#)で、バックアップ対象となるルート・オブジェクトを選択します。含まれるすべてのモデルと構成もバックアップされることに注意してください。
3. 右クリックして **「More」** → **「Backup」** を選択します。
4. バックアップを作成するサーバー・マシン上のディレクトリを参照します。存在しないディレクトリを指定した場合、Oracle Metadata Management (OMM)により、バックアップ時にディレクトリが作成されます。
5. 問題がユーザー、グループ、セキュリティ・ロール割当てまたは他のシステム構成設定と関連がある場合、必ず **「Backup advanced system objects like Groups」** チェック・ボックスを選択します。
6. 必ず、**「Backup all versions of Models Content」** チェック・ボックスを選択します。
7. **「Backup」** ボタンをクリックします。

バックアップのリストア

バックアップをリストアする手順:

1. バックアップ・スコープに含まれているモデルと構成のすべてに対して完全なアクセス権があるユーザーとして、リポジトリにサインインします。
2. [「Repository」パネル](#)で、バックアップされたモデルをリストアするために使用するフォルダを作成し、空にします。含まれるすべてのモデルと構成もリストアされることに注意してください。
3. 右クリックして **「More」** → **「Restore」** を選択します。
4. 以前にバックアップを作成したサーバー・マシン上のディレクトリに移動します。
5. **「Restore」** ボタンをクリックします。